

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 739 集

ひら し みず 平清水 I 遺跡・ひら し みず 平清水 II 遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）関連遺跡発掘調査

2023

岩手県県北広域振興局
(公財)岩手県文化振興事業団

平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）に関連して、令和2年度・3年度の2箇年にわたり発掘調査を実施した平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代前期から中期の竪穴住居跡や土坑などの遺構、土器・石器などの遺物、古代の竪穴住居跡などを確認し、岩手県沿岸北部における縄文時代・古代の集落跡の様相を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県北広域振興局農政部農村整備室、野田村教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

令和5年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 石田 知子

例 言

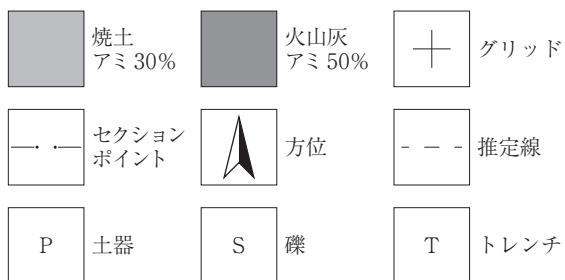
- 1 本報告書は、^{いわてけんくのへぐんのだむらおおあざのだ}岩手県九戸郡野田村大字野田第22地割に所在する^{ひらしみず}平清水 I 遺跡・平清水 II 遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の指導と調整を経て、岩手県県北広域振興局農政部農村整備室の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される平清水 I 遺跡・平清水 II 遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。
【平清水 I 遺跡】
遺跡コード：J G60-0241、遺跡略号：H S I -20（令和2年度）・H S I -21（令和3年度）
【平清水 II 遺跡】
遺跡コード：J G60-0224、遺跡略号：H S II -20（令和2年度）・H S II -21（令和3年度）
- 4 発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。
【令和2年度】調査期間：令和2年10月16日～11月26日、面積：1,132㎡
担 当 者：阿部勝則・溜 浩二郎
【令和3年度】調査期間：令和3年4月6日～6月30日、面積：2,949㎡
担 当 者：阿部勝則・野中裕貴
- 5 室内整理期間・担当者は次のとおりである。
【令和2年度】整理期間：令和2年12月1日～令和3年3月31日
担 当 者：阿部勝則
【令和3年度】調査期間：令和3年11月1日～令和4年3月31日
担 当 者：阿部勝則
- 6 本報告書の執筆分担は次のとおりである。
I：岩手県県北広域振興局農政部農村整備室、II・III・IV・VII：阿部勝則、V：阿部勝則・野中裕貴、VI：各分析の委託業者。編集・校正：阿部勝則
- 7 各種分析等の委託業務は次の機関等に依頼した（順不同）。
基準点測量：株式会社スズマ測量設計
表土掘削：株式会社晴山組・有限会社普代土木
航空写真撮影：株式会社晴山組
石器石質鑑定：花崗岩研究会
石器実測：株式会社ラング
放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所
火山灰分析：株式会社火山灰考古学研究所
- 8 野外調査及び室内整理にあたり、以下の機関等から御協力いただいた（順不同・敬称略）。
野田村教育委員会、井上雅孝、東本茂樹、立花雄太郎
- 9 本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 これまでに、調査成果の一部を調査概報等において公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

凡 例

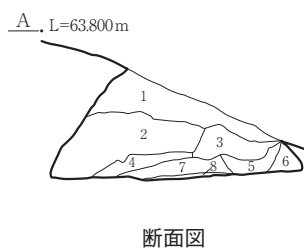
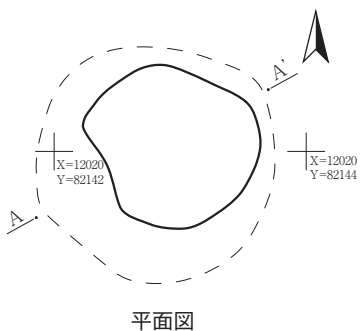
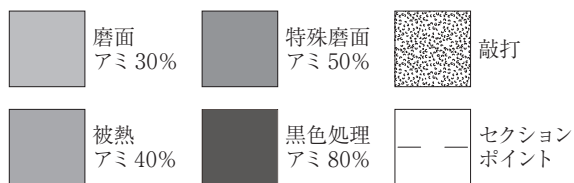
- 1 本書は、2箇年にわたる平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡の調査成果を報告したものである。報告書においては、Ⅳ 平清水Ⅰ遺跡、Ⅴ 平清水Ⅱ遺跡と各章に分けて、各遺跡の検出遺構・出土遺物について記載した。図版・写真図版も同様である。Ⅰ～Ⅲは共通である。Ⅵ 分析・鑑定は平清水Ⅱ遺跡分である。Ⅶ 総括は、各遺跡について総括し、また両遺跡を合わせた調査成果を総括した。
- 2 本書では国土地理院発行5万分の1地形図「陸中野田」、同2万5千分の1地形図「陸中野田」、岩手県発行『北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中野田 5万分の1 国土調査』所収の地形分類図・表層地質図、岩手県遺跡台帳検索システムR1の遺跡分布図等を使用した。
- 3 本調査・報告で使用した座標値は、平面直角座標第X系（世界測地系）に基づいている。
- 4 遺構図等の方位は真北を示している。
- 5 各図にスケールを入れた。
- 6 土層注記では、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）を使用した。
- 7 遺構・遺物の記載順、図版、写真図版、観察表の記載内容は次のとおりである。
 遺構は、竪穴住居跡（縄文・古代）（SⅠ）、土坑・陥し穴状遺構（SK）、その他（SX）の順で種類ごとに掲載した。各図にスケールを付し、写真図版は縮尺不定とした。
 遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製品、琥珀の順に遺物の種類ごとに出土地点・層位（下→上）を基準に掲載番号を付した。掲載番号は連番とした。平清水Ⅰ遺跡の遺物：1～5。平清水Ⅱ遺跡の遺物：11～120。図版は種別ごとに作成し、図版・写真図版とも同一番号とした。各図にスケールを付し、写真図版の縮尺は実測図とほぼ同じ縮尺とした。
 掲載遺構・遺物には、観察表を付した。観察表内の（数値）は残存値、〔数値〕は推定値である。

【凡例】

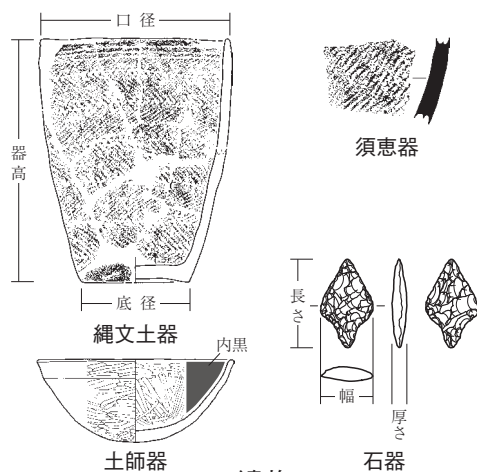
〈遺 構〉



〈遺 物〉



遺構



遺物

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の位置と立地	2
1	遺跡の位置と地理的環境	2
2	遺跡の立地と地形・地質	2
3	基本層序	7
4	周辺の遺跡	7
III	調査・整理の方法	11
1	野外調査	11
2	室内整理	15
IV	平清水 I 遺跡	16
1	検出遺構	16
2	出土遺物	16
V	平清水 II 遺跡	19
1	検出遺構	19
2	出土遺物	49
VI	分析・鑑定	66
1	放射性炭素年代測定	66
2	火山灰の分析	69
VII	総 括	73
1	平清水 I 遺跡	73
2	平清水 II 遺跡	73
3	自然科学的分析・鑑定結果と調査の所見	73
4	ま と め	76
	報告書抄録	107

図版目次

平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡		第20図	S K 06・07・08・18 土坑……………	41	
第1図	遺跡位置図……………	3	第21図	S K 09・10・11・12 土坑……………	42
第2図	野田村の地形図と地形区分図……………	4	第22図	S K 13・14・15 土坑……………	43
第3図	遺跡周辺の地形分類図……………	5	第23図	S K 16・17・19・21 土坑……………	44
第4図	遺跡周辺の表層地質図……………	6	第24図	S K 22・24・25・26 土坑……………	45
第5図	周辺の遺跡分布……………	9	第25図	S K 28・30・31・32・33 土坑……………	46
第6図	平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡 調査区位置図……………	12	第26図	S K 01・20・23 陥し穴状遺構……………	47
第7図	平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡 遺構配置図……………	13	第27図	S K 27・29 陥し穴状遺構、 S X 01 性格不明遺構……………	48
平清水Ⅰ遺跡		第28図	縄文土器（1）……………	56	
第8図	2・5区……………	17	第29図	縄文土器（2）……………	57
第9図	縄文土器、石器……………	18	第30図	縄文土器（3）……………	58
平清水Ⅱ遺跡		第31図	縄文土器（4）……………	59	
第10図	1・9区……………	31	第32図	縄文土器（5）、弥生土器、 土師器、須恵器……………	60
第11図	3・4（1／2）区……………	32	第33図	石器（1）……………	61
第12図	4（2／2）・6・7区……………	33	第34図	石器（2）……………	62
第13図	8区……………	34	第35図	石器（3）……………	63
第14図	10区……………	35	第36図	石器（4）……………	64
第15図	11・12区……………	36	第37図	石器（5）、石製品……………	65
第16図	S I 01 竪穴住居跡……………	37	第38図	周辺の地形と遺跡の立地……………	74
第17図	S I 02 竪穴住居跡……………	38	第39図	土坑の底径規模分布図……………	74
第18図	S I 03・04 竪穴住居跡……………	39	第40図	縄文土器集成図……………	75
第19図	S K 02・03・04・05 土坑……………	40			

表目次

平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡		平清水Ⅱ遺跡			
第1表	周辺の遺跡分布表（野田村分）……………	8	第10表	竪穴住居跡（縄文）観察表……………	30
第2表	平清水Ⅱ遺跡遺構一覧表……………	11	第11表	竪穴住居跡（古代）観察表……………	30
第3表	平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡 調査区一覧表……………	12	第12表	土坑・陥し穴状遺構観察表……………	30
平清水Ⅰ遺跡		第13表	土器重量表……………	51	
第4表	土器重量表……………	18	第14表	剥片重量表……………	51
第5表	剥片重量表……………	18	第15表	琥珀重量表……………	51
第6表	琥珀重量表……………	18	第16表	炭化材重量表……………	51
第7表	縄文土器観察表……………	18	第17表	縄文土器観察表……………	52・53
第8表	石器観察表……………	18	第18表	弥生土器観察表……………	53
第9表	掲載遺物一覧表……………	18	第19表	土師器観察表……………	53
			第20表	須恵器観察表……………	53
			第21表	石器観察表……………	54

第 22 表 石製品観察表	54	第 25 表 掲載遺物一覧表	55
第 23 表 琥珀観察表	55	第 26 表 縄文土器の計測値と比率	74
第 24 表 炭化材観察表	55		

写真図版目次

平清水 I 遺跡・平清水 II 遺跡		写真図版 15 S K 14・15・16・17 土坑	93	
写真図版 1	遺跡 (令和 2 年度)	79	写真図版 16 S K 18・19・21・22 土坑	94
写真図版 2	遺跡 (令和 3 年度)	80	写真図版 17 S K 24・25・26・28・30 土坑	95
平清水 I 遺跡		写真図版 18 S K 31・32・33 土坑	96	
写真図版 3	2・5 区、縄文土器、石器	81	写真図版 19 S K 01・20・23 陥し穴状遺構	97
平清水 II 遺跡		写真図版 20 S K 27・29 陥し穴状遺構、		
写真図版 4	1・3・4 区	82	S X 01 性格不明遺構	98
写真図版 5	6・7 区	83	写真図版 21 縄文土器 (1)	99
写真図版 6	8・9 区	84	写真図版 22 縄文土器 (2)	100
写真図版 7	10 区	85	写真図版 23 縄文土器 (3)	101
写真図版 8	11・12 区	86	写真図版 24 縄文土器 (4)、弥生土器、	
写真図版 9	S I 01 竪穴住居跡	87	土師器、須恵器	102
写真図版 10	S I 02 竪穴住居跡	88	写真図版 25 石器 (1)	103
写真図版 11	S I 03・04 竪穴住居跡	89	写真図版 26 石器 (2)	104
写真図版 12	S K 02・03・04・05 土坑	90	写真図版 27 石器 (3)	105
写真図版 13	S K 06・07・08 土坑	91	写真図版 28 石器 (4)、石製品、琥珀	106
写真図版 14	S K 09・10・11・12・13 土坑	92		

I 調査に至る経過

平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡は、経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）の事業区域内に存在することから、当該事業の施行に伴い発掘調査を実施することとなったものである。

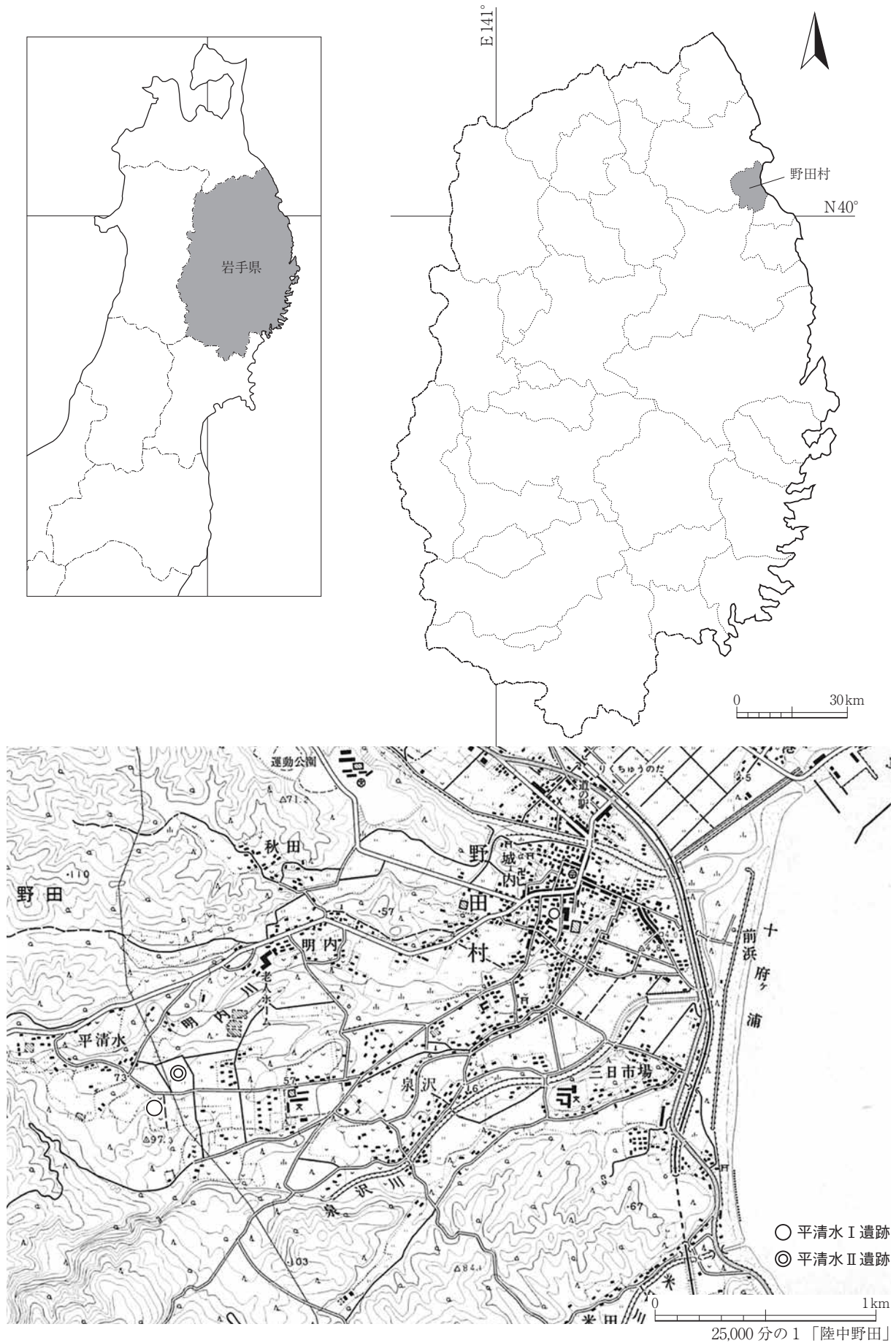
当該事業地区は、野田村の中央部に位置し、標高30～150mの中山間地で小規模稲作経営と一部花きや菌茸等を組み合わせた複合経営が行われている地域であるが、農地の区画が5～10アール程度と狭小であることや、農道の幅員が2～3mと狭いことから、大型の農業機械の導入が難しい状況にある。また、水路の大半が用排兼用の土水路であり水路底が浅く十分な排水機能が確保できていないため、水管理に多大な労力を要すると共に畑作物の作付けが困難な状況にある。このようなことから、営農の効率化及び各種施設の維持管理の省力化を図ると共に、担い手への農地集積を促進して経営規模拡大による農業経営の安定を図るため、当該事業により農地区画の拡大や農道の拡幅、用排水路の整備などを実施するものである。

当該遺跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳に登録済の周知の遺跡である。当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県県北広域振興局農政部農村整備室から県教育委員会に対し、平成30年12月5日付け県北広農整第254号及び令和元年11月6日付け県北広農整第212号により試掘調査を依頼した。

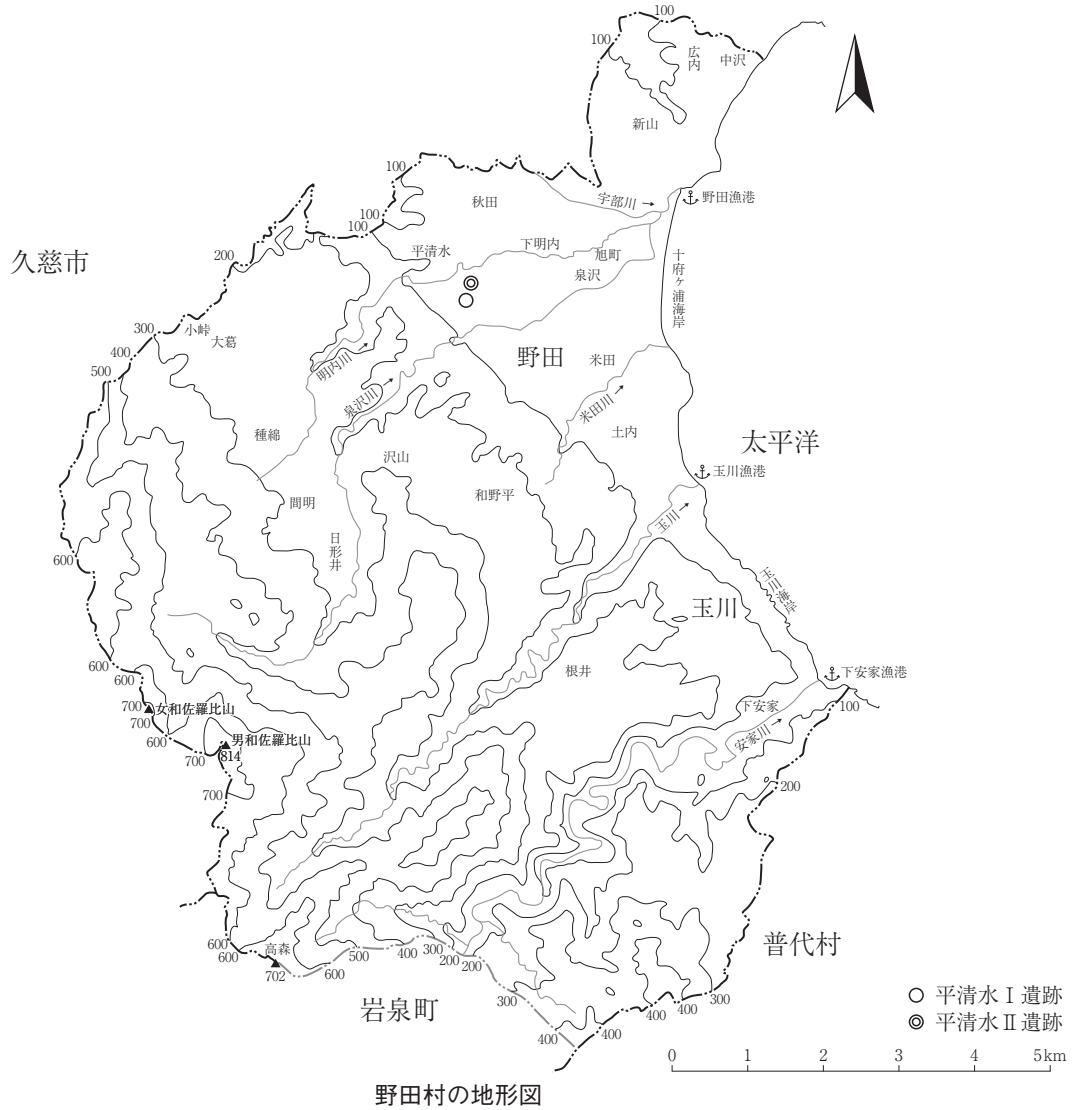
依頼を受けた県教育委員会は、平成31年1月及び令和元年11月に試掘調査を行い、令和2年1月10日付け教生第1278号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされた。

この結果を踏まえて、当室は県教育委員会と協議を行い、令和2年10月15日及び令和3年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

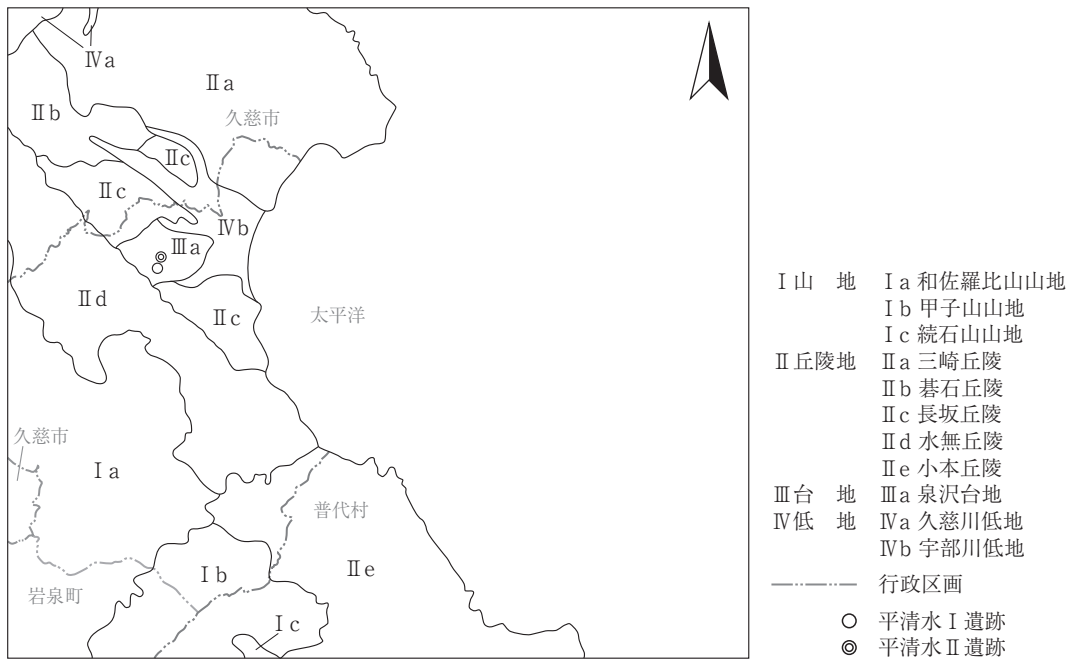
（岩手県県北広域振興局農政部農村整備室）



第1図 遺跡位置図

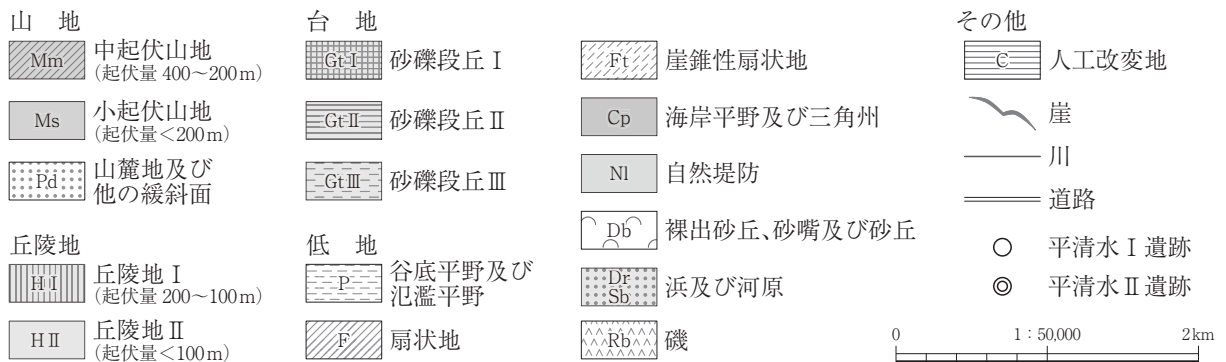
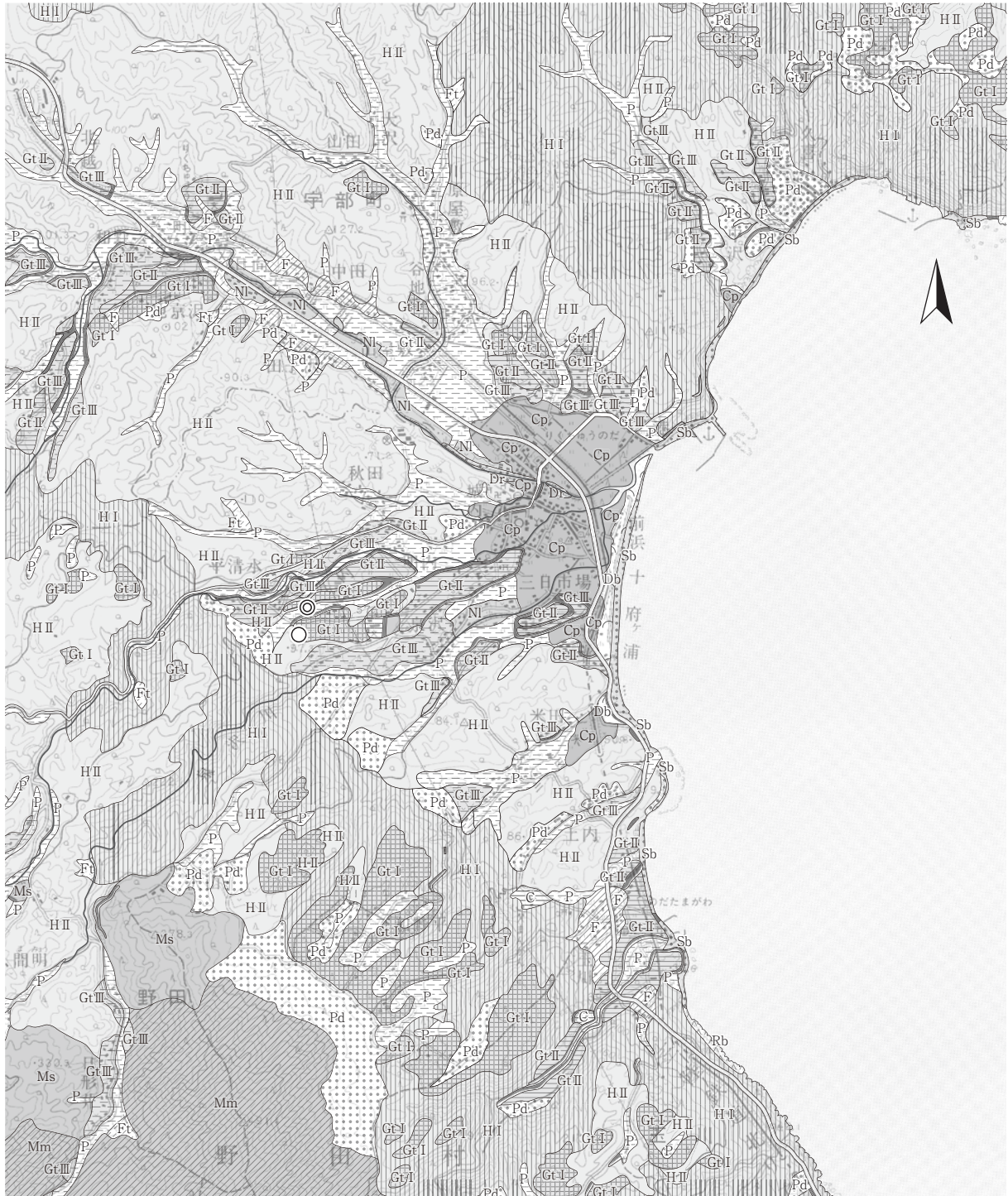


野田村の地形図

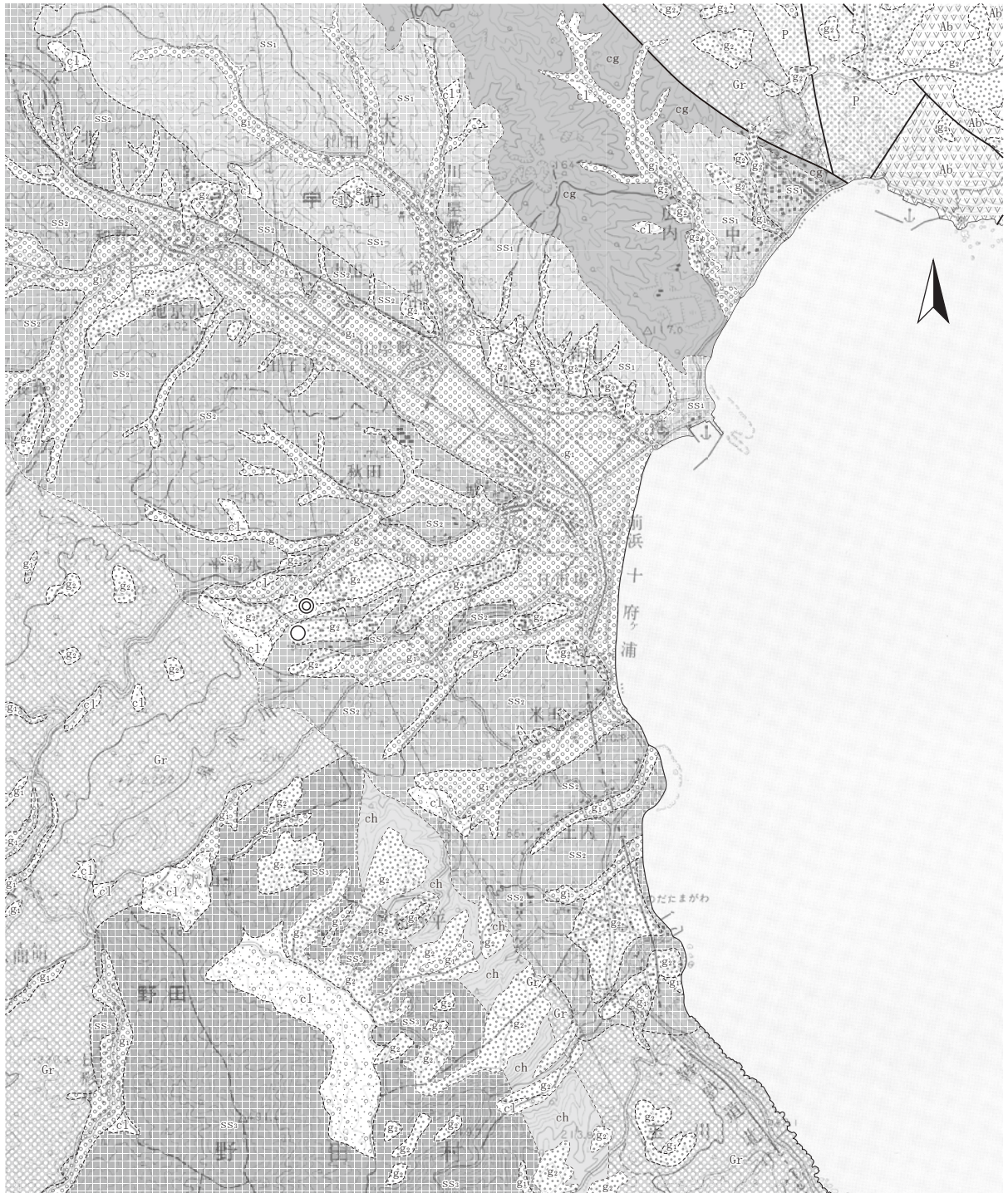


地形区分図

第2図 野田村の地形図と地形区分図



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 遺跡周辺の表層地質図

3 基本層序

調査区の現況は主に水田で、若干の宅地が点在する。かつての水田造成による改変が著しく、旧地形が読み取り難いが、現地を歩くと、尾根や谷状の微地形を確認できる。基本層序は各調査区で行い、次のように把握した。

- I 現表土、耕作土、盛土など。現在の水田造成に伴い、人工的に形成された土層の総称。
- II 旧表土。谷地形となる低い箇所（1区東側、4・11区北側）で確認した。
- III 漸移層の粘土質シルト層。削平されていない低い箇所（2区）で確認した。十和田中掬テフラを包含する。最初の遺構検出面。
- IV 基盤となる地山の粘土層。上下に細分可能で、下層は粘性・締まりが強い。最終の遺構検出面。
- V IV層下位にある基盤の砂礫層。水田造成時の削平の度合いが高い地点で露出する。

4 周辺の遺跡

(1) 野田村の遺跡

野田村の遺跡数は46遺跡を数える（令和3年3月時点）。第5図、第1表は、岩手県遺跡台帳検索システムR1に掲載されているもので、本遺跡周辺に分布する野田村の遺跡を中心に図示した。

ここでは、平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡に関連する縄文時代と古代の遺跡、遺構・遺物を中心に、これまで野田村内で実施されてきた調査遺跡の履歴を概観し、調査成果の位置付けに備えたい。

これまで（令和3年時点）、野田村内で調査が行われ、刊行された報告書は11遺跡（15冊）である。調査機関別では、県埋蔵文化財センター5遺跡（6冊）：平清水Ⅱ遺跡、中平遺跡、上泉沢遺跡、伏津館跡、上代川遺跡。野田村教育委員会6遺跡（10冊）：古館山遺跡、中平遺跡、新館遺跡、大平野遺跡、蒲沢遺跡、平清水Ⅲ遺跡。岩手県立博物館1遺跡：根井貝塚。ほかに岩手大学発刊の報告書もある。

村内の主な遺跡の調査履歴をみると、昭和時代に野田竪穴住居跡群／中平遺跡（10）、根井貝塚（31）の調査、その後、古館山遺跡（13）の調査が行われている。平成になって平清水Ⅱ遺跡（8）の緊急調査が行われたほか、平成23（2011）年の東日本大震災・津波以後、復興事業に係る三陸沿岸道路建設に関連して、伏津館跡（6）、上泉沢遺跡（12）、中平遺跡（10）、上代川遺跡（29）など大規模な調査が県埋蔵文化財センターで行われた。蒲沢遺跡（16）、平清水Ⅲ遺跡（9）、中平遺跡（10）の調査も岩手県教育委員会・野田村教育委員会によって行われている。中平遺跡は、地点調査が頻繁に行われており、履歴を辿るのが容易ではないが、既刊の『中平遺跡発掘調査報告書』岩手埋文第710集に詳しく整理されているので、参照されたい。次に本遺跡の調査成果に関わる時代の調査成果を概観する。

縄文時代

平清水Ⅱ遺跡では、縄文時代前期末葉から中期初頭を主体とする集落跡が確認されている。貯蔵穴と推測されるフラスコ状土坑が多数確認されたことが特徴である。上泉沢遺跡・中平遺跡では溝状や円形基調の陥し穴状遺構が多数確認されており、埋土に十和田中掬テフラが堆積する円形基調の陥し穴（旧）⇒十和田中掬テフラの堆積しない溝状の陥し穴（新）の新旧関係が重複関係からも確認され、報告されている。根井貝塚の調査では、縄文時代後期の土器、動物遺存体などが確認された。

古代

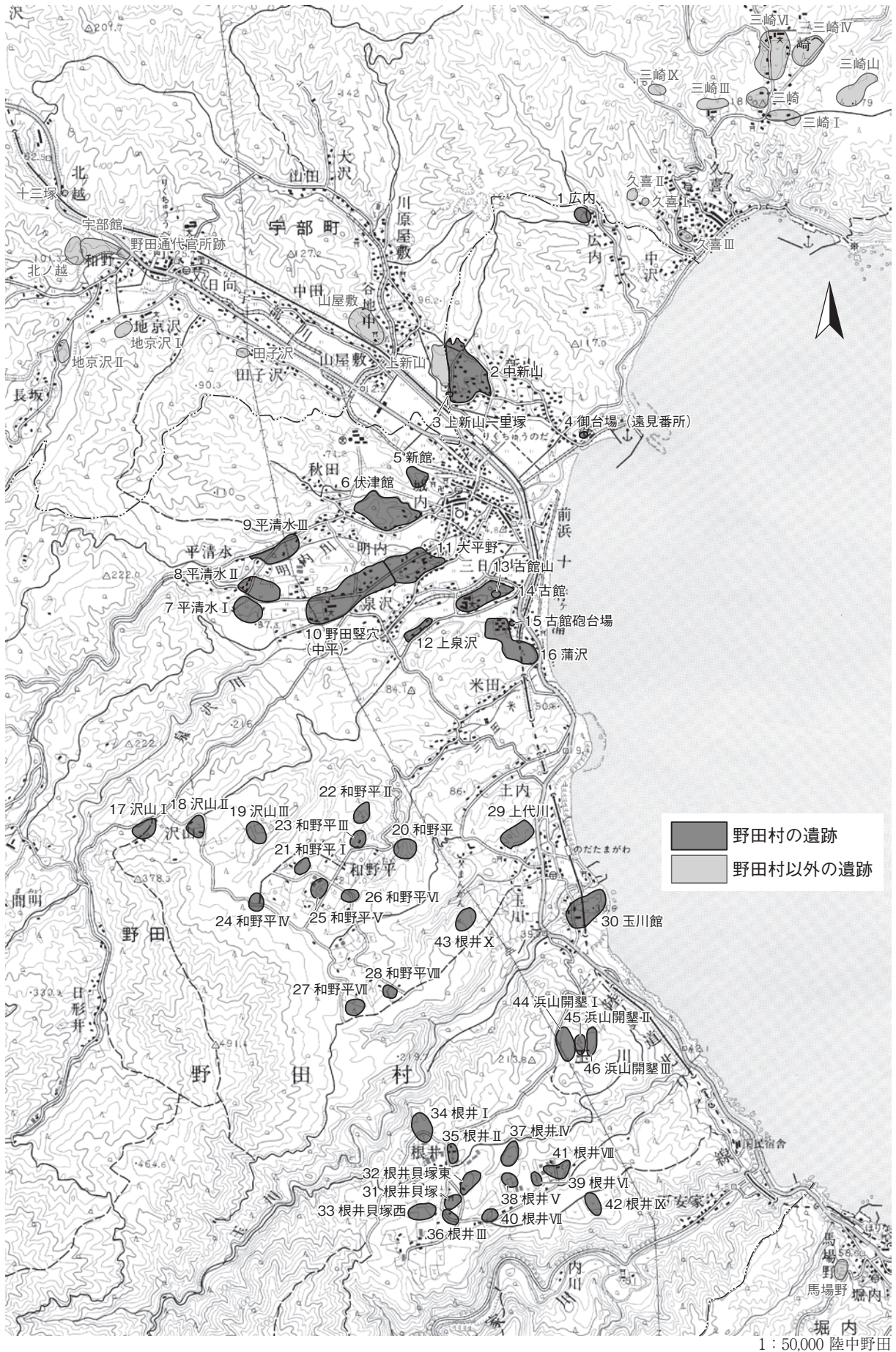
野田竪穴住居跡群（中平遺跡）をはじめ、蒲沢遺跡、平清水Ⅲ遺跡など多くの遺跡で、奈良時代か

4 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡分布表（野田村分）

No.	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	調査経歴	文献	備考
1	JG41-2192	広内	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石匙	日考年 草間（1966）	日考年 19（日考年 1971）	
2	JG51-1032	中新山	散布地	縄文・古代	土師器、縄文土器、巖手刀	岩教委（2007） H25 範囲拡大	岩文調報第 128 集 （岩教委 2009）	
3	JG51-0051	上新山 一里塚	一里塚	江戸		H25 新規		
4	JG51-1192	御台場 （遠見番所）	砲台跡		土塁	S59 調査		
5	JG50-2327	新館	城館跡	中世	平場、空堀	59 年調査、H24 調査	野田村文調報第 3 集（2013）	
6	JG50-2353	伏津館	城館跡	縄文・弥生・古代・中世	陥し穴状遺構、竪穴住居跡、曲輪、堀跡、土塁、切岸、武者走り状遺構、堀立柱建物跡、縄文土器、石器、陶磁器、銭貨、茶臼、硯、石鉢、金属製品など	59 年調査、本報告	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 630・647・692 集（概報）・695 集（岩文埋 2019）	「伏津館」と「野田城」を統合して「伏津館」とする
7	JG60-0241	平清水Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、土偶	岩教委（2000）	岩文調報第 112 集（岩教委 2001）	壊滅
8	JG60-0224	平清水Ⅱ	散布地・集落跡	縄文・古代・平安	縄文土器（前後期）土師器、石匙、石鏃、磨製石斧、石製垂飾品、竪穴住居跡、住居状遺構、フラスコ状土坑	H13.8～10 発掘調査 岩教委（2000）、岩文理（2001・2002）	岩文調報第 112 集（岩教委 2001）、岩文埋調報第 449 集（岩文理 2004）	壊滅
9	JG50-2275	平清水Ⅲ	集落	縄文・古代	土師器、巖手刀	H12.6.9 新規 H25 調査	野田村文調報第 7 集（2020）	
10	JG60-0258	野田堅穴 （中平）	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、縄文土器、土師器、須恵器、鉄器	野田村教委 日考協 草間（1965） 野田村教委 草間（1969）岩手史学会 草間 H21.10.13～H21.10.23 発掘調査（範囲拡大）、H24.9.20 範囲拡大、H24.12.17～H25.1.11 発掘調査（範囲拡大）	野田村中平遺跡（野田村教委 1967）日考年 18（日考協 1970）「中平・上明内調査概報」（野田村教委 1970）岩史研 No.58（岩手史学 1972） 岩文理調報第 710 集（岩文理 2022）	昭和 29.4.5 県指定史跡
11	JG60-0306	大平野	記載なし	縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、土坑、溝跡、土器	H21.12.7～H21.12.10 発掘調査、H24.9.19 範囲拡大、H24.11.15～H24.12.14 発掘調査（範囲拡大）	野田村文調報第 4 集（2014）	
12	JG60-0367	上泉沢	散布地・集落跡	縄文・古代	陥し穴状遺構、竪穴住居跡（古代）、縄文土器、土師器	H24 県教委試掘、 H26・27 県埋文調査	岩文理調報第 674 集（岩文理 2017）	
13	JG61-0033	古館山	集落跡	縄文・古代	土師器、縄文（前期）宋銭、柱跡	野田村教委 齊藤（1970）県博 熊谷・高橋・小田野（1981～1984）	野田村文調報（村教委 1987） 岩県博調報第 3 冊（岩県博 1987）	
14	JG61-0033	古館	城館跡	中世	堀	S59 調査、壊滅		
15	JG61-0035	古館砲台場	砲台跡		砲台跡	S59 調査、壊滅		
16	JG61-0076	蒲沢	散布地	縄文・古代	竪穴住居跡、陥し穴、土坑、土器、石器、動物遺存体	H24.10.16～18 新規発見、 H24.11.7～H24.12.26 発掘調査	野田村文調報第 5 集（2015）	
17	JG60-2134	沢山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
18	JG60-2148	沢山Ⅱ	散布地	弥生	弥生土器（捺糸紋？）			
19	JG60-2244	沢山Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器			
20	JG60-2376	和野平	散布地	縄文	縄文土器（中期）、石槍、石刀、石鏃			
21	JG60-2286	和野平Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
22	JG60-2332	和野平Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（後・晩期）			
23	JG60-2352	和野平Ⅲ	散布地		石器（搔器）			
24	JG70-0204	和野平Ⅳ	集落跡？	縄文	縄文土器（後期？）			
25	JG70-0218	和野平Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器			
26	JG70-0322	和野平Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器			
27	JG70-0392	和野平Ⅶ	散布地	縄文	縄文土器<量多い>			
28	JG70-0386	和野平Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器<量多い>			
29	JG61-2057	上代川	散布地	縄文・弥生・平安末～鎌倉	製鉄関連遺構、竪穴住居跡、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、羽口、炉壁、鉄滓	H24 県教委試掘調査 H29 県埋文調査	岩文理調報第 692 集（概報）（岩文理 2018）、岩文理調報第 713 集（岩文理 2020）	
30	JG71-0112	玉川館	集落跡・城館跡	縄文・中世	縄文土器（？）、堀切			
31	JG71-2071	根井貝塚	集落跡・貝塚	縄文	縄文土器（後期）、石槍、石剣、鹿のアゴ	S57～60 岩県博調査	岩県博調報第 3 冊（岩県博 1987）	
32	JG71-2062	根井貝塚東	貝塚？	縄文	縄文土器（晩期）、土師器			
33	JG70-2389	根井貝塚西	貝塚？	縄文	縄文土器、石器（搔器・剥片）			
34	JG70-2319	根井Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器<量少ない>			
35	JG71-2031	根井Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（？）			
36	JG71-2091	根井Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器（後期？）			
37	JG71-2037	根井Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器			
38	JG71-2066	根井Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、磨石<量多い>			
39	JG71-2058	根井Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器、剥片<量多い>			
40	JG71-2095	根井Ⅶ	散布地		磨製石斧			
41	JG71-2140	根井Ⅷ	散布地	縄文	縄文土器（後期）、<量少ない>			
42	JG71-2183	根井Ⅸ	散布地	縄文	縄文土器			
43	JG71-0032	根井Ⅹ	散布地	縄文	縄文土器（？）			
44	JG71-1142	浜山開墾Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器			
45	JG71-1154	浜山開墾Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器			
46	JG71-1165	浜山開墾Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器			

「伏津館跡発掘調査報告書」岩文理調報第 695 集に掲載の第 1 表 周辺の遺跡分布表を改変。



第5図 周辺の遺跡分布

ら平安時代にかけての比較的規模の大きな集落跡が確認されてきた。「野田竪穴住居跡群」(中平遺跡)は、昭和27年(1952)以降4次の発掘調査で面積約7haの範囲に百数十か所の竪穴住居が確認され、奈良時代から平安時代のロクロ使用の土師器、須恵器、鉄鏃、鉄製耳輪、琥珀玉が出土した。調査成果は、野田村のみならず、本県文化の発展を知るうえで貴重な遺跡であると評価され、昭和29年(1954)に県指定文化財(史跡)に指定された。近年の調査では、平清水Ⅲ遺跡で集落跡が確認されるとともに土壙墓から蕨手刀が出土するなど貴重な成果が得られている。

(2) 平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡の調査履歴

平清水Ⅱ遺跡は、ふるさと農道緊急整備事業に伴い、平成13・14年度に発掘調査が実施された。調査面積1,350㎡で、調査の結果、縄文時代前期中葉～中期前葉(円筒下層d式～円筒上層a式期主体)の竪穴住居跡3棟、炉跡10基、住居状遺構1基、土坑・墓壙104基、陥し穴状遺構7基、焼土42基、平安時代(9世紀後葉?)の竪穴住居跡2棟、住居状遺構1基、土坑1基が確認された。「口が極端に狭いフラスコ状土坑、五領ヶ台Ⅰa式系土器片、磨製石斧の未製品、石器製作時の剥片多く、石器製作址と考えられる。」の4点が特記されている(報告書抄録)。平清水Ⅱ遺跡の調査は、今回が2回目である。

引用・参考文献

- 岩手県教育委員会 2001 『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成12年度)』「43 平清水Ⅰ遺跡(JG60-0241)」(pp72)、
「47 平清水Ⅱ遺跡(JG60-0224)」(pp76)、岩手県文化財調査報告書第112集
- 岩手県教育委員会 2020 『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成30年度)』「21 平清水Ⅰ遺跡(JG60-0241)及び隣接地、
平清水Ⅱ遺跡(JG60-0224)及び隣接地」(pp27～28)、岩手県文化財調査報告書第159集
- 岩手県 1975 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中野田 5万分の1 国土調査』
- 岩手県 1975 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 陸中野田(別冊) 5万分の1 国土調査』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発刊報告書
- 2004 『平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第449集
- 2012 『中平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第602集
- 2017 『上泉沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第674集
- 2019 『伏津館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第695集
- 2020 『中平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第710集
- 2020 『上代川遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第713集
- 野田村教育委員会発刊報告書(年次順)
- 1987 『古館山-昭和45年三日市場発掘調査報告書(遺物編)-』野田村文化財調査報告書
- 2013 『中平遺跡発掘調査報告書第143地点』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 2013 『中平遺跡発掘調査報告書第141地点』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 2013 『新館遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
- 2014 『中平遺跡84地点・128地点・309地点 大平野遺跡20地点 古館山遺跡61地点発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財
発掘調査報告書第4集
- 2015 『蒲沢遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 2015 『平成25年度村内遺跡発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 2018 『大平野遺跡第2次・中平遺跡第13次・14次発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 2018 『中平遺跡第15次発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 2020 『平清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書<第Ⅰ分冊 遺構編>』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 2020 『平清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書<第Ⅱ分冊 遺物編>』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査の方法

調査区が点在するため、調査区に1～12区の名を付した(第6・7図、第3表)。調査区の座標は、平面直角座標(第X系:世界測地系)に合わせた基準点1(301)・2(302)・3(303)・4(304)の4点を中心に各調査区に区画点を打設し、測量時の基準とした。座標値(区画杭)は、第7図に表記した。

検出遺構の名称は、遺構種別に応じて、SI:竪穴住居跡、SK:土坑類、SX:その他のアルファベット略号を使用し、検出順に番号を付けて命名した。報告では、現場で命名した遺構名をそのまま使用した。本調査で使用した遺構名・調査年次・担当(原稿記載)は、第2表のとおりである。

第2表 平清水Ⅱ遺跡遺構一覧表

遺構名	調査年次	担当	遺構名	調査年次	担当	遺構名	調査年次	担当	遺構名	調査年次	担当	遺構名	調査年次	担当
SI01	R3	阿部	SK05	R3	野中	SK13	R3	阿部	SK21	R3	阿部	SK29	R3	阿部
SI02	R3	野中	SK06	R3	野中	SK14	R3	野中	SK22	R3	阿部	SK30	R3	阿部
SI03	R3	野中	SK07	R3	野中	SK15	R3	野中	SK23	R3	野中	SK31	R3	阿部
SI04	R3	阿部	SK08	R3	野中	SK16	R3	野中	SK24	R3	野中	SK32	R3	阿部
SK01	R2	阿部	SK09	R3	野中	SK17	R3	阿部	SK25	R3	野中	SK33	R3	阿部
SK02	R3	阿部	SK10	R3	野中	SK18	R3	野中	SK26	R3	野中	SX01	R3	阿部
SK03	R3	野中	SK11	R3	阿部	SK19	R3	野中	SK27	R3	野中			
SK04	R3	野中	SK12	R3	阿部	SK20	R3	野中	SK28	R3	阿部			

試掘は、細長い各調査区の両端や中央、あるいは高低差のある田面ごとに1×1～2mのトレンチを入れ、土層の堆積状況を把握した。試掘の結果、遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断した区域は、試掘調査のみで調査を終えた。それ以外の区域は、試掘結果を基に面的に表土掘削を行った。

粗掘りは、重機を使用して調査区全体の表土・耕作土を掘削し、除去した。残土の置き場は調査区に隣接する田面を使用し、残土を仮置きする際に耕作土面にブルーシートを敷き、耕作土と掘削した残土が混在しないように留意した。調査終了後は、埋め戻して現状復旧した。

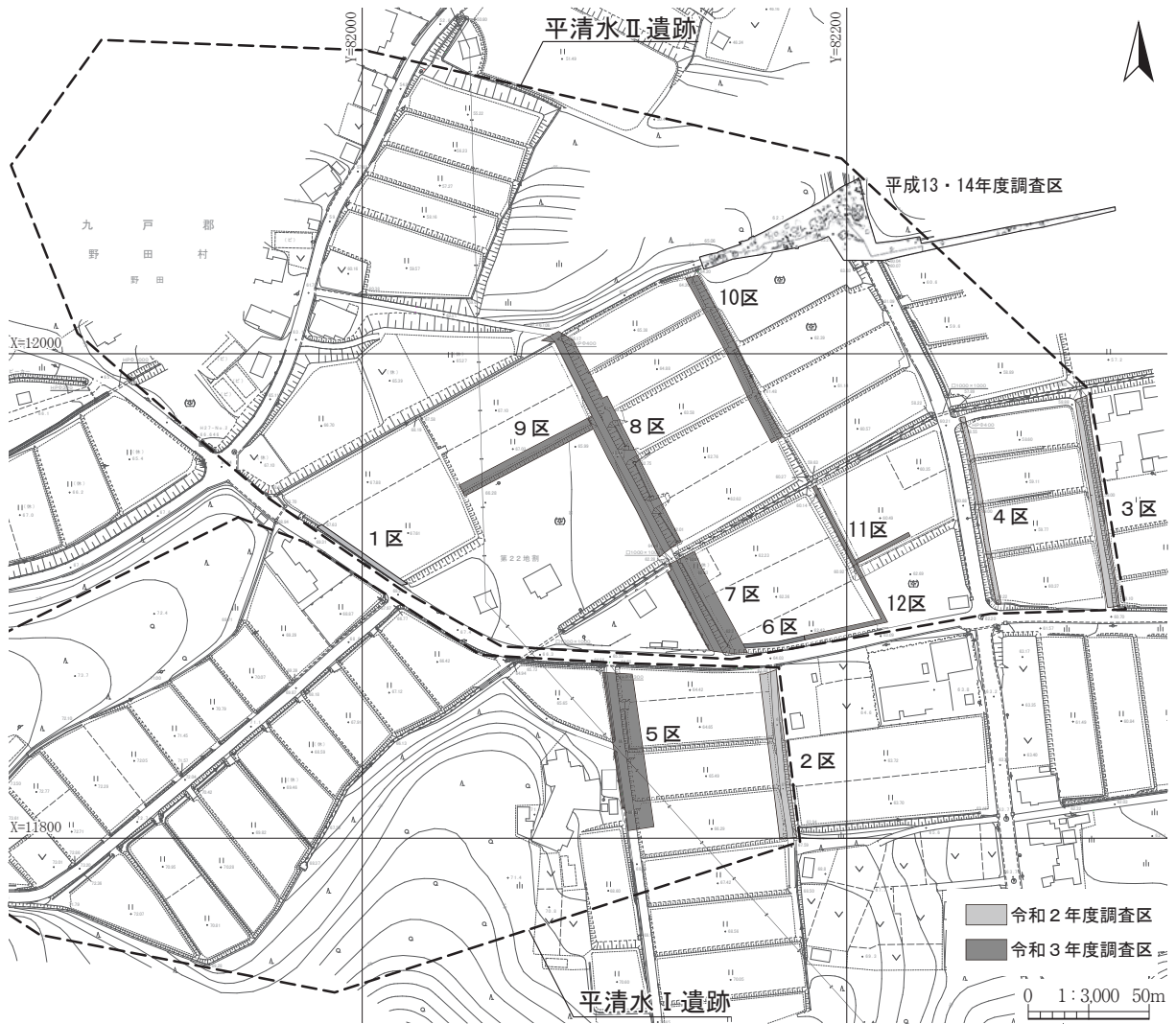
遺構検出は人力で行い、尾根上はⅣ層面、谷部はⅢ層面またはⅣ層面で作業を進めた。

遺構の精査は、原則として、竪穴住居跡など大形の遺構は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階で必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。遺構内出土遺物は、埋土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土遺物は、原則として、調査区ごとに出土した層位を記して取り上げた。現場での記録作成ではField・Cardを使用し、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録した。

実測については、平面実測は光波トランシットを用い、電子平板(遺構くん)を用いて図化作業を行った。基準点・区画点として打設した基準杭に光波測量機器を設置して測定した記録である。遺物出土状況は、写真測量により図化した。高さは、基準高を基に絶対高で測った。断面実測は、任意の高さを基に設定した水糸を基準に手作業で計測を行った。断面図の縮尺は、竪穴住居跡・土坑類は1/20縮尺を基本とし、炉跡など小規模な遺構は1/10縮尺で図化し、マイラー用紙に記録した。

写真撮影は、デジタルカメラ1台、モノクローム6×4.5cm判1台を使用して調査員が行った。デジタルデータはRAWデータとJPEGデータを同時に作成した。撮影に際しては、整理時の混乱を

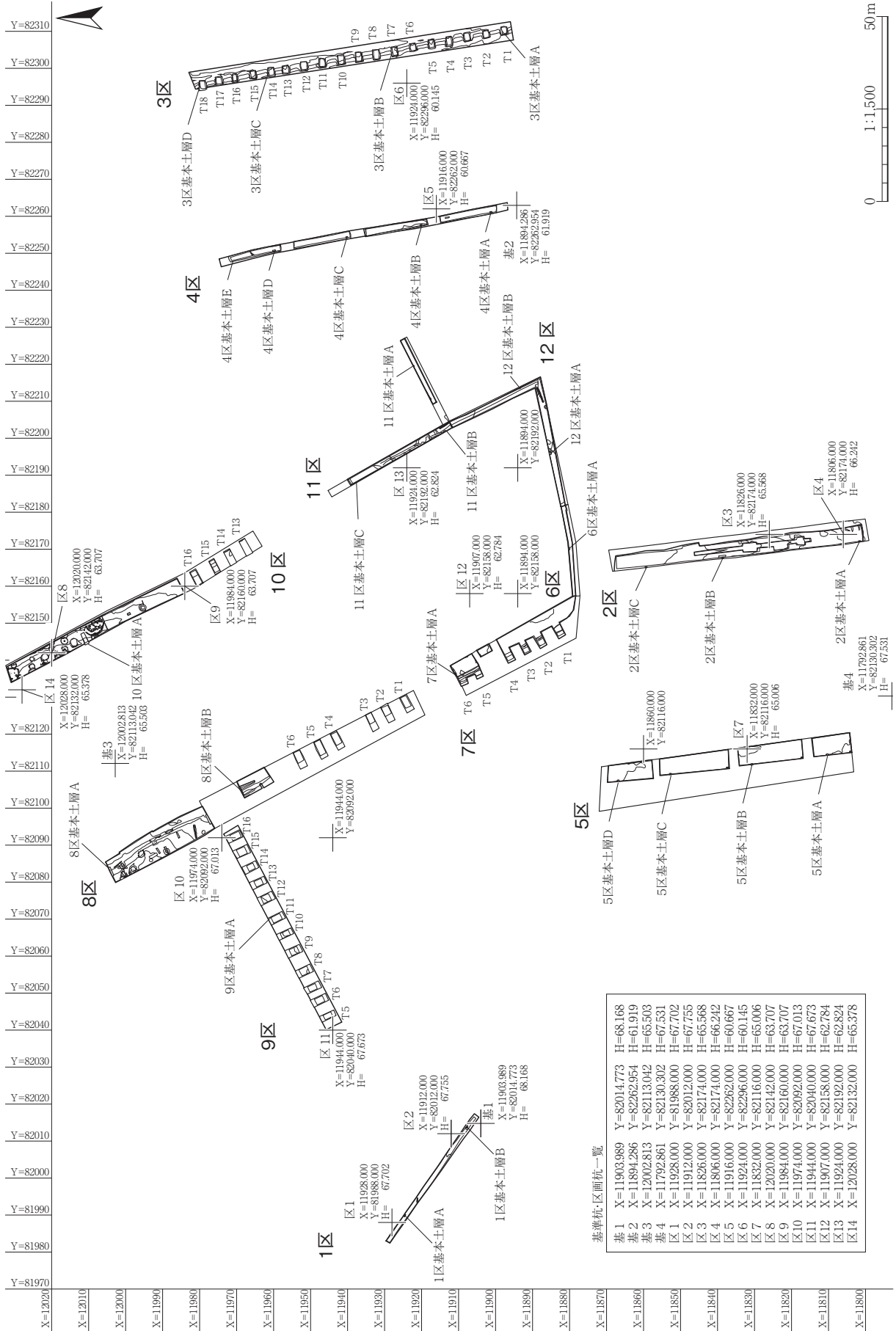
1 野外調査



第3表 平清水I遺跡・平清水II遺跡調査区一覧表

No.	調査区	調査年度	面積 (㎡)	検出遺構	出土遺物	備考	遺跡名(遺跡略号)
1	1区	令和2(2020)	86	陥し穴1	縄文土器(前)、弥生土器(前)	-	平清水II(HSII-20)
2	2区	令和2(2020)	469	なし	縄文土器(前・後・晩)、石鏃、琥珀	基本層序Ⅲ層中に十和田中振テフラ	平清水I(HSI-20)
3	3区	令和2(2020)	425	なし	なし	-	平清水II(HSII-20)
4	4区	令和2(2020)	152	なし	縄文土器(中)	10月30日追加	平清水II(HSII-20)
計		令和2(2020)	1,132				
5	5区	令和3(2021)	720	なし	なし	-	平清水I(HSI-21)
6	6区	令和3(2021)	50	なし	なし	-	平清水II(HSII-21)
7	7区	令和3(2021)	519	なし	なし	-	平清水II(HSII-21)
8	8区	令和3(2021)	804	竪穴住居跡1(古)、土坑6、陥し穴2、性格不明遺構1	縄文土器(前)、土師器、石器、琥珀	-	平清水II(HSII-21)
9	9区	令和3(2021)	280	なし	なし	-	平清水II(HSII-21)
10	10区	令和3(2021)	360	竪穴住居跡2(縄)・1(古)、土坑20、陥し穴1	縄文土器(前)、土師器、須恵器、石器、石製品、琥珀	陥し穴埋土に十和田中振テフラ	平清水II(HSII-21)
11	11区	令和3(2021)	100	なし	なし	-	平清水II(HSII-21)
12	12区	令和3(2021)	116	陥し穴1、土坑2	なし	5月11日追加	平清水II(HSII-21)
計		令和3(2021)	2,949				
計		令和2(2020) + 令和3(2021)	4,081				
	平清水I		1,189㎡	※縄=縄文時代			
	平清水II		2,892㎡	※古=古代			

第6図 平清水I遺跡・平清水II遺跡調査区位置図



第7図 平清水I遺跡・平清水II遺跡遺構配置図

避けるために撮影カードを使用し、各種遺構の埋土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況を撮影した。また、調査終了段階でドローンによる航空写真撮影を行った。

土層注記は、断面図作成後に行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物で、記載は『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）を基に行った。締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎の5段階、粘性は、強・やや強・有・やや弱・弱の5段階で記載した。層名は調査区の基本土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内埋土をアラビア数字（1・2・3）で表した。層位の細分の必要な場合は、小文字のアルファベットを付し、Ⅰa・Ⅰb・1cなどと表した。なお、複数の調査員の記載による表記等の若干のばらつきは、誤記を訂正した他は、あえて統一せずにそのまま掲載した。

土壌水洗は、動物遺存体・植物遺存体が存在する可能性を考慮し、縄文時代の竪穴住居跡の炉、焼土遺構、埋設土器内の埋土を採取して、水洗い、天日で乾燥、篩（5mm・3mm・1mm）での仕分けを行った。この工程を経て得られた遺物に土器、石器剥片、炭化物がある。

（2）調査の経過

令和2年度

調査期間は10月16日～11月26日である。調査員1～2名、作業員の登録人数は16名で調査を行った。以下に調査経過を記す。

10月16日（金）午後から資材搬入、現場設営を行った。当初の調査対象区域・面積は3路線（1～3区）980㎡であった。10月は1・2区の雑物撤去・安全対策・試掘を行い、1区から重機による表土除去・遺構検出を開始した。10月27日（火）以降、調査の進行状況を確認しながら基準点・区画点の打設を行った。1区で陥し穴状遺構1基を検出した。2区では、十和田中掘テフラ面と下位の地山で遺構検出を2回行ったが、遺構は確認できなかった。10月30日（金）委託者と業務打合わせを行い、調査範囲を1路線（152㎡）追加し、4路線（1～4区）1,132㎡を対象に調査を進めることとなった。

11月は3・4区の調査を行った。3区は盛土と斜面の現状から、埋め戻しと現状復旧を考慮し、試掘調査を行い、遺構が確認された箇所を拡張する方針で調査を進めた。遺構・遺物は確認されなかった。4区は、試掘の結果、地山まで削平されて田面が造成されたことを確認し、現状の4箇所の各田面単位で表土掘削・遺構検出を行った。北側で沢跡を検出した他、遺構・遺物は確認できなかった。11月12日（木）以降は調査と並行して1区から順次埋め戻しを行い、現状復旧を行った。11月16日（月）ドローンによる航空写真撮影を行い、11月19日（木）に終了確認を受け、11月25日（水）に埋め戻しを終了した。26日（木）に調査終了し、資材を搬出して撤収した。

令和3年度

調査期間は4月6日～6月30日である。調査員2名、作業員の登録人数は17名で調査を行った。以下に調査経過を記す。

4月6日（火）午後から資材搬入、現場設営を行った。調査対象区域・面積は7路線（5～11区）、2,833㎡であった。4月15日（木）基準点測量を行った。4月は、5・9・10区の試掘・表土掘削を行った。5区は村道南側に位置し、現状の4枚の田面単位で表土掘削・遺構検出を行ったが、地山まで削平され、遺構・遺物とも確認できなかった。同一田面東側の令和2年度調査2区の調査成果と令和2年度生文課による西側の試掘結果からも、5区に遺構・遺物が存在する可能性は低いと判断し、道路部分も含めて、5月11日（火）に部分終了確認を受けた。その際、調査を進めていた9・10区も確認を受けた。9区では遺構は確認されず、10区は北側を中心に竪穴住居跡や土坑を多数確認していた。以後、広範

圃に及ぶ各調査区において効率的に調査を進めるため、遺構・遺物が確認できなかった箇所は、作成した記録で確認を受けた後に埋め戻しを進める方針とし、調査と埋め戻しを期間内で実施することを目途に進めた。5月11日に委託者と業務打合せを行い、調査範囲を一路線(116㎡)追加し、8路線(5～12区)2,949㎡に変更して、調査を進めることとなった。同日ドローンによる航空写真撮影を行った。以後10区の遺構精査と6・7・8・11・12区の試掘・表土掘削を進めた。

6月は、10区の遺構精査と並行して8・12区の遺構精査を行った。8区では竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、12区では土坑・陥し穴状遺構を確認した。6月14日(月)にドローンによる航空写真撮影を実施し、6月28日(月)に終了確認を受けた。6月29(火)・30日(水)に一部遺構の精査と撤収準備を並行して行い、30日(水)に調査を終了し、撤収した。

2 室内整理

(1) 整理の方法

野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

遺構に関わる記録は、実測図を遺構ごとに分類し、点検を行い、必要に応じて第2原図を作成した。電子平板で測量したデータは、現場で入手した情報(Sitファイル)をそのまま保存した。手作業で作図した図は、読み込んで電子データ化し、パソコンを用いてトレース・図版作成を行った。撮影されたフィルムは、ネガアルバムに密着写真と一組にして収納し、写真のデジタルデータも保管を行った。いずれの得られた記録・情報についても、センターの内規に従って収納・保存を行っている。

報告書の掲載遺物は、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。不掲載資料もできる限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するよう努めた。遺物の整理は、以下の方針と選別基準で進めた。遺物は、野外及び当センター整理室で水洗した後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、重量を計測し、登録作業を実施した。その後、土器は、細片は別として、出土地点・層位等を全破片に注記した後、遺構単位、調査区単位で接合・復元作業を行った。土器は、土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器は、原則として計測値(器高・口径・底径)1箇所以上計測可能で、器形が把握できるものを立体土器として登録し、図化した。破片資料は、径5cm以上の口縁部破片を優先的に選択したが、内容により一部胴部破片や小破片も選んだ。石器・石製品は、出土した全点を対象に個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、一部資料について図・写真・観察表を掲載した。図化の基準は、遺構内出土遺物を優先した。遺物の実測図は実物大とし、トレースは遺物の状況に応じて縮小して図化した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師1名が行った。

(2) 整理の経過

令和2年度

室内整理の期間は、令和2年12月1日～令和3年3月31日に実施した。12月は遺物水洗・仕分け・登録・実測・トレース、各種データ整理などを行った。1～3月は図面の点検・合成、トレース、図版作成、原稿執筆などを行った。

令和3年度

室内整理の期間は、令和3年11月1日～令和4年3月31日に実施した。11月は遺物の注記、接合、復元。12月は実測、拓本、1～2月は遺物写真撮影、図面の点検・合成、トレース、図版作成、写真図版作成、原稿執筆、3月は原稿執筆、割付、収納作業などを行った。

IV 平清水 I 遺跡

1 検出遺構

(1) 調査区の概要

該当する調査区は、令和2年度調査の2区、令和3年度調査の5区である。各調査区の面積・検出遺構は、第6・7図、第3表を参照されたい。

2区(第8図、写真図版3)

ほぼ東西方向に長い4枚の田面(標高約66.3～64.4m)の東側と道路部分を跨いでほぼ南北方向に細長く設定された調査区である。調査区は標高66.5～63.5mで、南側から北側に傾斜する。基本層序では、現在の田面を造成した際の切土と盛土を確認した。試掘で十和田中堰テフラ(To-Cu)の分布を確認したため、十和田中堰テフラ(To-Cu)の分布面と地山で2度の遺構検出を行った。石鏃や琥珀片を確認したほか、遺構・遺物は確認されなかった。全体に谷状地形で、周囲からの流れ込みと判断した。

5区(第8図、写真図版3)

ほぼ東西方向に長い4枚の田面(標高約66.3～64.4m)の西側と道路部分を含むほぼ南北方向に長い調査区である。調査区は標高約66.0～63.9mで、南側から北側に傾斜する。2区と5区は同一田面の東西両端に位置する。田面は耕作土直下で地山のIV層粘土層が露出し、前回の水田造成時に地山まで削平され、本来の地形は2区よりも高かったと推測した。2区の調査成果と西側(1区南西側)で実施された令和2年度の岩手県教育委員会の試掘結果から道路部分も含め遺構・遺物なしと判断した。

(2) 検出遺構の概要

検出されなかった。

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

縄文土器、石器、琥珀が出土した。総量は、小コンテナ換算で0.5箱である。

(2) 縄文土器(第9図、写真図版3)

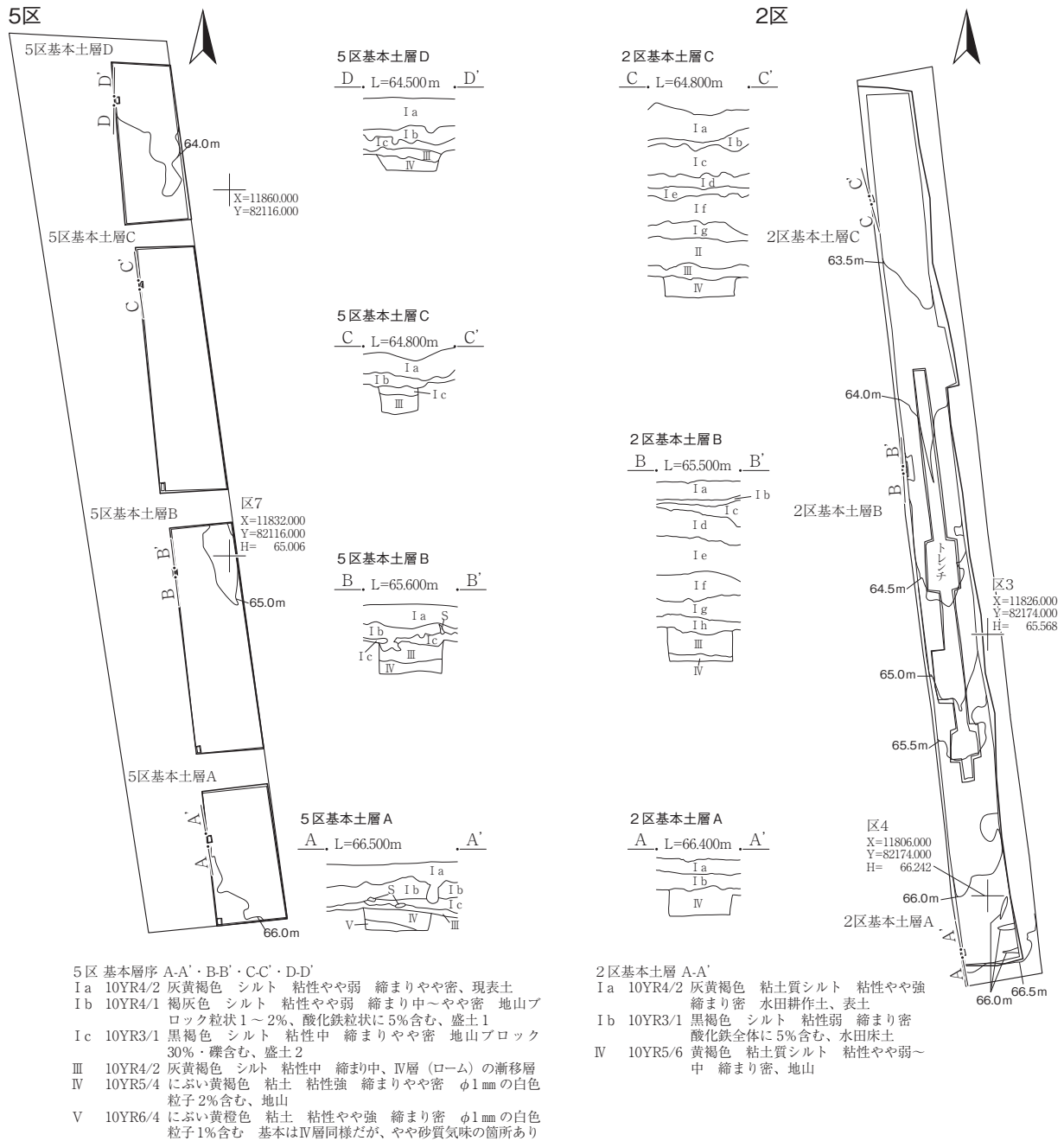
縄文土器は総量220g出土し、3点(1～3)掲載した。小片で詳細不明である。

(3) 石器(第9図、写真図版3)

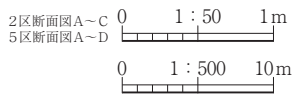
石器は出土した2点を掲載した。内訳は石鏃2点(4・5)で、無茎鏃である。石材は珪質頁岩とチャートで、北上山地産である。十和田中堰テフラの分布する面の下位から出土した。

(4) 琥珀

琥珀は1g未満の小片が出土した。産地同定などの分析は行っていない。



- 2区基本土層 B-B'**
- I a 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中～やや強 締まり密 水田耕作土、表土
 - I b 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性弱 締まり密 酸化鉄全体に5%含む、水田床土
 - I c 10YR3/1 黒褐色 シルト 60%、10YR6/6 明黄褐色シルト 40%の混合土 粘性やや弱 締まりやや密、水田造成時の盛土
 - I d 10YR2/1 黒色 シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 明黄褐色シルト(10YR6/6) φ1～5cm)ブロックを全体に15～20%含む、水田造成時の盛土
 - I e 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性弱 締まりやや密 明黄褐色シルトブロック(10YR6/6)を全体に30～40%含む、水田造成時の盛土
 - I f 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱 締まりやや密 φ2～3mmの炭化物粒1%未満含む、旧表土
 - I g 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 締まりやや密 明黄褐色シルト粒(10YR6/6 φ3～5mm)1%含む
 - I h 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 締まり密 明黄褐色シルト粒(10YR6/6 φ3～5mm)1～2%場所により5～10mmのブロックで混入する
 - III 10YR4/4 褐色 シルト 50%、10YR3/4 暗褐色シルト 50%混合土 粘性やや弱 締まりやや密、漸移層
 - IV 10YR6/6 明黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり密、地山
- 2区基本土層 C-C'**
- I a 10YR4/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中～やや強 締まり密 水田耕作土、表土
 - I b 10YR6/6 明黄褐色 シルトと10YR3/1 黒褐色シルトの混合土 割合は場所により異なる 粘性やや弱 締まり やや密、水田造成時の盛土
 - I c 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 締まりやや密 明黄褐色シルト(10YR6/6)1～2%含む、水田造成時の盛土
 - I d 10YR6/6 明黄褐色 シルトと10YR3/1 黒褐色シルトの混合土 割合は場所により異なる I b層とはほぼ同じ、水田造成時の盛土
 - I e 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや密 明黄褐色シルト(10YR6/6)を粒状(φ7～10mm)に10%含む、水田造成時の盛土
 - I f 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性やや弱 締まり密 明黄褐色シルト(10YR6/6)30%・黒褐色シルト(10YR3/1)3%混じる、水田造成時の盛土
 - I g 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中 締まり密 明黄褐色シルト(10YR6/6)20～30%混じる、水田造成時の盛土
 - II 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性中～やや強 締まり密 φ5～7cmの炭化物粒1%未満含む、中振テフラより上の層
 - III 10YR4/4 褐色 シルト 70%、10YR3/4 暗褐色シルト 30%混合土 粘性やや弱 締まりやや密、漸移層
 - IV 10YR6/6 明黄褐色 粘土質シルト 粘性中 締まり密、地山



第8図 2・5区

2 出土遺物

第4表 土器重量表

出土地点	重量 (g)
	縄文
2区南側	3.2
2区T	18.8
小計	22.0

第5表 剥片重量表

出土地点	重量 (g)
	剥片
2区T	3.6
小計	3.6

第6表 琥珀重量表

出土地点	重量 (g)
	琥珀
2区	0.03
小計	0.03

第7表 縄文土器観察表

(数値)：残存値、[数値]：推定値

掲載No.	出土地点	層位	器種	部位	煤の付着	内面調整	胎土	色調	文様の特徴	計測値 (cm)			時期	備考	図版No.	写図No.
										口径	器高	底径				
1	2区南側	埋め戻しの土に混入	鉢?	胴	無	N	1	5YR7/6 橙色	口：沈線、工文字?	—	—	—	晩期?		9	3
2	2区T	盛土	深鉢	胴	無	N	1	7.5YR5/3 にぶい褐色	胴：LR斜	—	—	—	後期?	摩滅している	9	3
3	2区T	盛土	深鉢	胴	無	N?	1	10YR4/2 灰黄褐色	胴：LR横	—	—	—	前期		9	3

縄文土器観察表の凡例

項目	表記	内容
部位の名称	口唇	口唇部
	口	口縁部
	頸	頸部
	胴	胴部
	底	底部
内	内面	
施文の順番	旧→新	
煤の付着	内	内面コゲ
ス・コゲ	外	外面ス
	無	付着無し

項目	表記	内容
内面調整	M	ミガキ
	N	ナデ
	—	不明
胎土	1	砂粒を含む
	2	細礫・砂粒を含む
	3	細礫を含む
	4	細礫を多量に含む
	A	繊維を少量含む
	B	繊維を含む

項目	表記	内容
文様	原体側圧	原体側面圧痕
	絡条体圧	絡条体圧痕
	単軸絡第〇類	単軸絡条体第〇類
	多軸絡	多軸絡条体
	結束1	結束第1種(羽状縄文)
	結束2	結束第2種(羽状縄文)
	結節(S)	結節(S字状)綾絡文
	結節(Z)	結節(Z字状)綾絡文
	縦	縦回転
	横	横回転
斜	斜回転	

第8表 石器観察表

(数値)：残存値

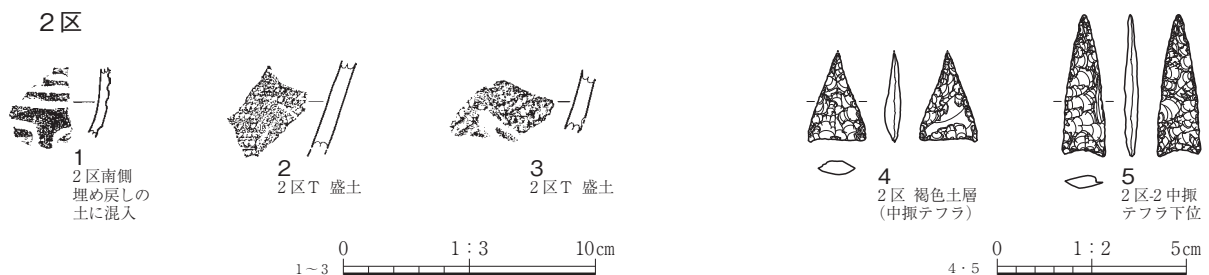
掲載No.	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	石材	産地・時代	備考	図版No.	写図No.
4	2区	褐色土層(中振テフラ)	石鏃	23.2	15.0	4.1	1.02	平基無茎鏃	珪質頁岩	1	尖頭部欠損	9	3
5	2区-2	中振テフラ下位	石鏃	37.4	11.4	3.6	1.35	凹基無茎鏃	チャート	1		9	3

石器観察表の凡例

表記	時代	産地
1	中生代三疊紀～ジュラ紀	北上山地
2	中生代(変成は中生代白亜紀)	北上山地
3	中生代白亜紀	北上山地
4	中生代白亜紀～新生代古第三紀	久慈層群・野田層群

第9表 掲載遺物一覧表

出土地点	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	石器	石製品	琥珀
2区	1～3				4・5(石鏃)		



第9図 縄文土器、石器

V 平清水Ⅱ遺跡

1 検出遺構

(1) 調査区の概要

該当する調査区は、令和2年度調査の1・3・4区、令和3年度調査の6・7・8・9・10・11・12区である。各調査区の面積・検出遺構などは、第6・7図、第3表を参照されたい。

1区（第10図、写真図版4）

1枚の田面（標高約67.6m）の南西側と土側溝を跨ぐ北西から南東方向に長く設定された調査区である。調査区の標高は67.5～66.5mである。現在の田面を造成した際に切土され、耕作土直下で地山のⅣ層を確認した。調査区東側は落ち込み、最深部で約50cm下がる。調査区の南西側から北東側に流れる現排水路の水源となる旧沢跡の西端部分と判断した。西側で陥し穴状遺構1基を確認した。

3区（第11図、写真図版4）

東西方向に長い4枚の田面（標高約60.4～58.6m）の東側と道路を跨ぐ、ほぼ南北方向に長く設定された調査区である。調査区の標高は60.5～58.0mで、全体に南西から北東側に傾斜し、現在の田面を造成した際の盛土を確認した。トレンチ1～18を設定し調査した。遺構・遺物は確認できなかった。

4区（第11・12図、写真図版4）

ほぼ東西方向に長い4枚の田面（標高約60.4～58.6m）の西側にほぼ南北方向に長く設定された調査区である。同一田面の東側が3区である。全体に南側から北側に傾斜する地形で、調査区の標高は61.5～58.5mである。現在の田面を造成した際の切土が確認され、耕作土直下で一部に基盤となる礫が露出した。北端で確認した湧水地点は、南西から北東方向に流れる現排水路の下位にある旧沢跡の南端部分であると判断した。北端の湧水地点から土器が数点出土したが、遺構は確認できなかった。

6区（第12図、写真図版5）

ほぼ東西方向に長い1枚の田面（標高約62.4m）の南西側にほぼ東西方向に長く設定された調査区である。南側に村道が走る。同じ田面の西側は7区、東側は12区に隣接する。調査区の標高は62.5～62.0mで、ほぼ平坦である。耕作土直下で地山のⅣ層を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

7区（第12図、写真図版5）

ほぼ南東から北西方向に長く、3枚の田面（標高約62.4～62.2m）の西側と道路部分にかかる調査区である。北側には現在の排水路が横断する。調査区の標高は62.5～62.0mである。田面部分は面的に表土除去を行い、耕作土直下で削平を受けた地山のⅣ層を検出した。道路部分はトレンチ1～6を設けて試掘を行い、盛土であることを確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

8区（第13図、写真図版6）

ほぼ南東から北西方向に長く、5枚の田面（標高約65.4～62.6m）の西側と道路部分に設定された

調査区である。田面の東側には10区が位置し、西側の田面には9区が隣接する。調査区の南側に排水路が横断する。5枚の田面は北から南に低くなるが、各田面（北から8区-1～5と命名）で試掘を行い、遺構が確認された調査区は拡張して調査を行った。8区-1・2（標高67.0～64.5m）は、試掘の結果、遺構が確認されたことから、地山のIV層で面的に調査した。遺構が確認された道路部分は、東側の田面より1.6～1.1mほど高い。田面は、より深く削平され、V層砂層が露出し、遺構は消滅したと判断した。検出された遺構の残存状況が削平の度合いを表している。8区-3（標高約64.0～63.5m）では遺構は確認されなかった。8区-4・5（標高約62.6～61.5m）はトレンチ1～6を設定した。いずれも湧水地点で、旧沢跡の範囲と推測された。遺構・遺物はなかった。この状況は、北側の尾根頂部から南側に向かって傾斜する旧地形を反映して、東側に位置する10区の状況と整合性がある。8区-1・2で縄文時代の土坑6基、陥し穴状遺構2基、古代の竪穴住居跡1棟、性格不明遺構1基を確認した。

9区（第10図、写真図版6）

ほぼ南西から北東方向に長い1枚の田面（標高約67.1m）の南側に細長く設定された調査区である。南側は民地で標高が約1m下がる。東側には8区が隣接し、西側に隣接する田面の西側には1区が位置する。試掘を行った結果、耕作土直下の盛土が厚く堆積していたことが判明した。そのためトレンチ5～16（12本）を設定して試掘調査を行い、遺構が確認された地点を拡張して調査する方針とした。試掘を行った結果、地山のIV層粘土層からV層砂層まで削平した後に160cmほど盛土されていることを確認した。調査区の標高は65.5mで、東側から西側に向かって低くなる地形に盛土して現在の田面を造成している。盛土から遺物が数点確認されたが、遺構は確認できなかった。

10区（第14図、写真図版7）

ほぼ南東から北西方向に長い4枚の田面（標高約65.4～62.7m）の東側に細長く設定された調査区で、同一田面の西側に8区が位置する。本来の地形は北側から南側に傾斜し、現在の田面を造成した際の切土と盛土を確認した。北側の標高の高い10区-1～3（標高64.5～62.5m）のIV層面で縄文時代の竪穴住居跡2棟、土坑20基、陥し穴状遺構1基、古代の竪穴住居跡1棟を確認した。10区-4（標高61.5m以下）は南側に横断している排水路（旧沢跡）に向かって傾斜する落ち込みを確認した。

11区（第15図、写真図版8）

ほぼ方形基調の田面（標高約60.5m）の西側と南側にL字状に設けられた調査区（標高60.5～59.5m）である。現況は、西側の田面や南側の民地より低く、北側に排水路が位置する。調査区南西端は12区北端と隣接する。調査の結果、南側（標高60.5m）は地山のIV層粘土層まで削平され、西側（60.5～59.5m）は北側の排水路（旧沢跡）に向かって落ち込んでいた。遺構・遺物は確認できなかった。

12区（第15図、写真図版8）

ほぼ東西方向に長い1枚の田面（標高約62.4m）の南側に東西方向に長く、東側に南北方向に長く設定された調査区が連続する。同一田面西側は6区と隣接し、南側は村道が走る。東側は民地と接し、北側は11区に隣接する。東側（標高61.5～61.0m）は、攪乱を受け、地山まで深く掘削されていた。遺構・遺物は確認されなかった。南側（標高62.0～61.5m）は、地山のIV層粘土層まで削平されていたが、南東端を中心に遺構を確認した。土坑2基、陥し穴状遺構1基を確認した。

(2) 検出遺構の概要

縄文時代の竪穴住居跡2棟、土坑（フラスコ状土坑含）28基、陥し穴状遺構5基、古代の竪穴住居跡2棟を確認した。個別遺構の計測値は、観察表の第10～12表、掲載遺物は第25表を参照されたい。

(3) 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡2棟、古代の竪穴住居跡2棟を確認した。

縄文時代の竪穴住居跡

S I O 1 竪穴住居跡（第16図、写真図版9、遺物：第28・33・34・37図、写真図版21・25・28）

10区の北側に位置する。表土除去時に土器埋設炉を確認し、IV層面で検出した黒褐色土から暗褐色土の広がりから竪穴住居跡と認識した。北側・西側は調査区域外にかかる。東側は削平を受け、消滅したと推測される。東側で重複するSK02土坑との新旧関係は不明である。南側で重複するSK22土坑を切っている。規模・平面形は、3.70×2.80m以上で、平面形は円形基調か。埋土・堆積状況は、黒褐色土・暗褐色土・にぶい褐色土で構成される。自然堆積か。壁・床面は地山のIV層を掘り込んでつくられている。床面は、ほぼ平坦である。柱穴は3個（P1～3）確認した。炉の位置を通る東西方向を中軸線とした場合、P3が中軸線上に位置し、P1・2が線対称の南側の位置になる。炉は土器埋設炉1基を確認した。土器は正立状態で埋設され、土器内には暗褐色土が入る。表土掘削時に土器上部を一部欠いている。埋設土器の周囲と下位に赤褐色の焼土が5～8cmの厚さで形成されていた。他に地床炉と推定される焼土2基は、平面形は不整形で、色調は、にぶい赤褐色と赤褐色、厚さ3～5cmである。

遺物は、埋土から縄文土器、石器、石製品、琥珀が出土した。炉の埋設土器は、深鉢の口縁部と底部を欠いた状態で、正立で埋設されていた。縄文土器の深鉢5点（11～15）、11は炉埋設土器で深鉢胴部、尖頭器1点（71）、石錐1点（73）、楔形石器2点（79・80）、不定形石器3点（85～87）、石製品1点（113）、琥珀（116）を掲載した。

時期は、遺構の形状と出土遺物から縄文時代前期末葉と推測する。炉の埋設土器内の炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、¹⁴C年代4730±30yrBP、1σ暦年代範囲3429calBC-3382calBC（30.1%）の測定値が出ている。

S I O 2 竪穴住居跡（第17図、写真図版10、遺物：第28・33・34・35・37図、写真図版21・25・26・28）

10区の北側に位置する。IV層面で黒褐色土の広がりとして検出した。東側・南側は床面まで削平を受けていた。中央付近に残存する埋土に十字の土層観察ベルトを設定し、精査を進めた。SK10・19土坑と重複し、S I O 2竪穴住居跡が切っている。規模は6.0×3.9m以上で、平面形は円形基調か。埋土・堆積状況は、床面直上に焼土粒、炭化物を含む1層黒褐色土と2層灰黄褐色土を確認した。自然堆積か。壁・床面は地山のIV層を掘り込んでつくられ、床面は東側にやや傾斜するが、概ね平坦である。西側に壁の一部と壁溝1条、その内側に壁溝1条を確認した。柱穴は47個（P1～47）を確認した。西側の壁溝沿いの柱穴、内側の弧状の柱穴配置から2時期以上の建替えが行われた可能性がある。

遺物は、埋土から縄文土器、石器、琥珀が出土した。縄文土器の深鉢の口縁部破片1点（16）、楔形石器1点（81）、残核1点（94）、敲石1点（101）、石錘1点（109）、琥珀（117）を掲載した。

時期は、遺構の形状や重複関係、出土遺物から縄文時代中期前葉以降と推測する。

古代の竪穴住居跡

S I O 3 竪穴住居跡（第18図、写真図版11、遺物：第32・34図、写真図版24～26・28）

10区の北側に位置する。IV層面で黒褐色土の広がりとして検出した。西側は調査区域外にかかり、東端のみを確認した。縄文時代のS K 15・16土坑と重複し、切っている。規模・平面形は、調査範囲で4.80×0.90mで、平面形は方形基調と推測する。埋土・堆積状況は、黒褐色土・灰黄褐色土、壁の崩落土と考えられるにぶい黄褐色土・明黄褐色土で構成される。埋土下位7層に浅黄橙色の火山灰が薄く堆積しており、採取して分析した結果、十和田a火山灰（To-a）と白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）が含まれる可能性が高いとの結果を得た。自然堆積か。壁・床面は地山のIV層と重複するS K 15・16土坑を掘り込んでいる。床面はやや北側に傾斜する。柱穴・カマドなどは、検出範囲で未確認である。

遺物は、埋土から土師器、石器が出土した。土師器の甕の口縁部破片1点（54）、不定形石器1点（88）、残核3点（95～97）を掲載した。他にS I O 3付近、S K 16、10区T 3出土の須恵器3点（56～58）、S K 16出土の砥石1点（111）も、出土地点からS I O 3竪穴住居跡に伴う遺物と考える。

時期は、遺構の形状と出土遺物から平安時代（10世紀前葉以前）と推測する。

S I O 4 竪穴住居跡（第18図、写真図版11、遺物：第32図、写真図版24）

8区の北側に位置する。8区の表土掘削時に道路から田面にかかる法面のIV層面で暗褐色土の広がりとして検出した。水田造成時に深く掘削された東側と北側は消滅している。重複関係はない。規模・平面形は不明で、竪穴住居跡の南西端を確認したと判断した。埋土・堆積状況は、黄褐色土を主体とし、1層に十和田a?火山灰と推測されるブロックが混入しているとの調査所見がある。分析は行っていない。壁・床面は、地山のIV層を掘り込んでいる。柱穴、カマドなどの施設は不明である。

遺物は、床上から土師器が出土した。床面直上から出土した坏1点（55）を掲載した。

時期は、遺構の形状と出土遺物から、奈良時代（8世紀中葉）と推測する。

（4）土 坑

土坑28基確認した。うち24基は、いわゆるフラスコ状土坑と判断する。以下、個別に記載する。

S K O 2 土坑（第19図、写真図版12、遺物：第33・37図、写真図版25・28）

10区北側に位置する。IV層面で暗褐色土の広がりとして検出した。東側は削平され、失われている。西側半分の底面付近を確認したと判断した。S I O 1及びS I O 1-P 1と重複するが、直接的な切り合い関係は確認できなかった。規模・平面形は、底部径145cmの円形基調か。深さ40cmである。埋土・堆積状況は、暗褐色土・褐色土を主体とする。底面付近の埋土で、4層は底面中央付近に堆積する山なりの堆積であったと推測される。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでおり、壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から石器が出土した。石匙1点（76）、礫器1点（110）を掲載した。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

S K O 3 土坑（第19図、写真図版12、遺物：第28・34・35図、写真図版21・25・26・28）

10区の北側に位置する。IV層面で炭化物を含む黒褐色土・にぶい黄褐色土の広がりとして検出した。検出時は単独の遺構として精査を進めたが、底面付近でS K 13土坑との重複関係が判明し、断面記録作成時にS K O 3土坑がS K 13土坑を切っていることを確認した。規模・平面形は、開口部径215×170cm、底部径170cmの楕円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ125cmである。埋土・堆積状況は、

上位に黒褐色土、中位ににぶい黄褐色土、下位に灰黄褐色土が堆積する。底面中央付近は山なりの堆積を示す。自然堆積か。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングし、底面は、ほぼ平坦である。遺物は埋土から縄文土器、石器、琥珀が出土した。縄文土器の深鉢の口縁部破片2点(17・18)、不定形石器1点(89)、残核1点(98)、磨石1点(100)、琥珀(118)を掲載した。時期は、縄文時代と推測する。

SK04土坑(第19図、写真図版12)

10区北側に位置する。Ⅳ層面で明黄褐色土の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかる。遺構上部は大きく削平され、西側の底面付近を確認したものと判断した。重複関係はない。規模・平面形は、底径175cmの円形基調で、深さ25cmである。埋土・堆積状況は、明黄褐色土・灰黄褐色土を主体とし、壁の崩落土と底面中央付近の山なりの堆積と推測される。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込み、壁はオーバーハングし、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、遺構の形状から縄文時代と推測する。

SK05土坑(第19図、写真図版12、遺物：図版28、写真図版21)

10区の北側に位置する。Ⅳ層面でにぶい黄褐色土の広がりとして検出した。東側は深く削平され、遺構上部が失われている。重複関係はない。規模・平面形は、開口部径130cm、底部径185cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ90cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土が主体で、検出時はⅣ層との識別が難しかった。上位に厚く堆積するⅣ層由来の1・2層は、全体的に炭化物を微量に含み、人為堆積の可能性が高い。底面直上の褐灰色土とにぶい黄褐色土の互層は、底面付近が自然堆積であることを示す。ある程度堆積が進んだ段階で、人為的に埋め戻されたと解釈する。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込み、壁は深くオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から縄文土器が出土した。深鉢の胴部破片1点(19)を掲載した。時期は、縄文時代と推測する。

SK06土坑(第20図、写真図版13、遺物：第28・33・35・36図、写真図版21・25・26・27)

10区の北側に位置する。Ⅳ層面で炭化物を含んだにぶい黄褐色土の広がりとして検出した。北西壁は試掘トレンチにより失われている。重複関係はない。規模・平面形は、開口部径140×135cm、底部径180cmの円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ75cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土、にぶい黄褐色土、灰黄褐色土が主体で、底面中央付近は山なりの堆積を示す。自然堆積か。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦で、中央に副穴1個を確認した。遺物は、埋土から縄文土器、石器が出土した。縄文土器の深鉢の底部と口縁部破片2点(20・21)、石匙1点(77)、敲石2点(102・103)を掲載した。時期は、縄文時代と推測する。

SK07土坑(第20図、写真図版13、遺物：第28・29・33・37図、写真図版21・22・25・28)

10区の北側に位置する。Ⅳ層面で炭化物を含むにぶい黄褐色土・にぶい黄褐色土の広がりとして検出した。東側は削平され、遺構上部は失われている。東壁がSK14土坑と重複し、SK14土坑を切っている。規模・平面形は、開口部径180cm、底部径185cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ60cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土・灰黄褐色土が主体である。自然堆積か。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込み、壁はわずかにオーバーハングする。底面は平坦で、中央に副穴1個を確認した。遺物は、床面と埋土中位から縄文土器、石器、琥珀が出土した。深鉢8点(22～29)、石鏃

1点(61)、台石1点(112)、琥珀(119)を掲載した。時期は、縄文時代前期末葉と推測する。

SK08土坑 (第20図、写真図版13、遺物：第30・31図、写真図版22・23)

10区の北側に位置する。IV層面で炭化物を含んだにぶい黄橙色土・にぶい黄褐色土の広がりとして検出した。東側は削平され、遺構上部が失われている。当初は単独の遺構と判断して精査を進めたが、北側半分の精査時に西壁が想定していた形状と異なったことから、別遺構との重複を考えた。検討の結果、西壁でSK18土坑と重複し、切られていると判断した。規模・平面形は、開口部195×175cm、底部径235cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ70cmである。埋土・堆積状況は、1～3層がSK18土坑埋土、4～22層がSK08土坑埋土である。にぶい黄褐色土が主体で、東壁寄りに山なりの堆積を示す。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は底面直上、埋土下位から縄文土器が出土した。深鉢11点(30～40)を掲載した。6点がほぼ完形である。時期は、縄文時代前期末葉(円筒下層d1式)と推測する。底面直上の22層中に含まれる炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、¹⁴C年代4640±30yrBP、1σ暦年年代範囲3496calBC-3439calBC(57.3%)の測定値が出ている。

SK09土坑 (第21図、写真図版14、遺物：第31図、写真図版23)

10区の北側に位置する。IV層面で明黄褐色土・灰黄褐色土の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかり、西端部のみ確認した。遺構上部は削平され、底面付近を確認した状態である。重複関係はない。規模・平面形は、底部径170cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ40cmである。埋土・堆積状況は、灰黄褐色土を主体とする底面付近の埋土で、自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでおり、壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から縄文土器が出土した。深鉢の口縁部破片1点(41)を掲載した。時期は、縄文時代と推測する。

SK10土坑 (第21図、写真図版14、遺物：第31・34図、写真図版23・25・28)

10区の北側に位置する。IV層面で灰黄褐色土の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかる。遺構の西端部分を確認した。遺構上部は削平されている。当初は単独の遺構と判断して精査を進めたが、精査中にSI02-P2・46・47に切られていることを確認した。規模・平面形は、底部径185cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ50cmである。埋土・堆積状況は、底面付近の埋土で灰黄褐色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでおり、壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から縄文土器、石器、琥珀が出土した。縄文土器の深鉢1点(42)、不定形石器1点(90)、琥珀(120)を掲載した。時期は、縄文時代前期末葉(円筒下層d1式)と推測する。底面直上より採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、¹⁴C年代4750±30yrBP、1σ暦年年代範囲3626calBC-3561calBC(59.0%)の測定値が出ている。

SK11土坑 (第21図、写真図版14、遺物：第31・33図、写真図版24・25)

10区の北側に位置する。IV層面で黒褐色土の広がりとして検出した。西側は調査区域外にかかる。SK12土坑と重複し、断面図からSK11土坑が新しいと判断した。規模・平面形は、開口部径85cm、底部径150cmの円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ95cmである。埋土・堆積状況は、黒褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から縄文土器、石器が出土した。縄

文土器の深鉢の口縁部破片1点(43)、石鏃1点(62)を掲載した。時期は、縄文時代と推測する。

SK12土坑(第21図、写真図版14)

10区の北側に位置する。SK11土坑精査中に別遺構として確認したものである。西側は調査区域外にかかる。断面観察からSK11土坑に切られていると判断した。規模・平面形は、開口部径190cm、底部径195cmの円形基調か。深さ145cmか。断面形はフラスコ状と推測する。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とし、各層ともほぼ水平に堆積する。SK11土坑埋土及びIV層との識別が難しかった。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK13土坑(第22図、写真図版14、遺物：第32・35・36・37図、写真図版24・26・27・28)

10区の北側に位置する。IV層面で暗褐色土の広がりとして検出した。当初、穴の規模から柱穴状土坑と判断して精査を進めたが、先行して精査を進めた東側に隣接するSK03土坑に切られる土坑の開口部であると後に判断した(写真図版12参照)。精査は、狭い開口部と先行して精査を進めたSK03土坑との関係から、断面図の記録作成を2段階に分け、掘り方も開口部を階段状にして安全面に配慮して進めた。SK03土坑に切られている。規模・平面形は、開口部径65×45cm、底部径185cmの円形基調か。深さ145cm、断面形はフラスコ状と推測する。埋土・堆積状況は、上位の灰黄褐色土、中位から下位の黒褐色土・灰黄褐色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面中央に副穴1個と四方に延びる溝を確認した。遺物は、埋土上位から縄文土器(44)が横位で、石器(99)、礫と共に出土した。縄文土器の深鉢1点(44)、磨製石斧1点(99)、敲石1点(104)、石製品1点(114)を掲載した。時期は、縄文時代前期末葉と推測する。

SK14土坑(第22図、写真図版15)

10区の北側に位置する。IV層面で炭化物を含んだにぶい黄橙色土・にぶい黄褐色土の広がりとして検出した。東側は調査区域外にかかる。遺構上部は削平され、西側の底面付近のみの確認である。西側でSK07土坑と重複し、切られている。規模・平面形は、底部径205cmの円形基調で、断面形はフラスコ状と推測する。深さ40cmである。埋土・堆積状況は、灰黄褐色土が主体である。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、遺構の重複関係から縄文時代前期末葉以前と推測する。

SK15土坑(第22図、写真図版15、遺物：第36図、写真図版27)

10区の北側に位置する。IV層でにぶい黄橙色土の広がりとして検出した。本遺構の西側上半がSI03竪穴住居跡に切られている。規模・平面形は、底部径180cmの円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ125cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄橙色土・にぶい黄褐色土が主体で、検出時はIV層との識別が難しかった。埋土上位に厚く堆積する1～4層にぶい黄橙色土はIV層起源で、3・4層は炭化物を微量に含み、人為堆積の可能性が高い。底面直上の山なりの堆積状況は自然堆積と判断した。ある程度堆積が進んだ段階で人為的に埋め戻されたと解釈する。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦で、やや南側に副穴1個を確認した。遺物は、埋土から石器が出土した。敲石1点(105)を掲載した。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK16土坑（第23図、写真図版15、遺物：第32・37図、写真図版24・28）

10区の北側に位置する。SI03竪穴住居跡の床面のIV層面で炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色土の広がりとして検出した。本遺構の上部は、SI03竪穴住居跡に切られている。規模・平面形は、底部径85cmの円形基調で、断面形は逆台形である。深さ80cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土、灰黄褐色土が主体である。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁は南東壁がオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から土師器、須恵器、石器が出土した。土師器の甕の口縁部破片1点（54）はSI03出土遺物と接合した。須恵器の胴部破片1点（57）、砥石1点（111）を掲載した。出土遺物は、遺構の重複関係から、古代のSI03竪穴住居跡に伴う遺物であった可能性が高い。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK17土坑（第23図、写真図版15、遺物：第31図、写真図版24）

10区の北側に位置する。IV層面で小礫を含む褐色土の塊状の集合体として検出した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径135×130cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ80cmである。埋土・堆積状況は、褐色土を主体とする壁の崩落土で、IV層との識別が難しかった。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングし、底面は平坦である。遺物は、埋土から縄文土器が出土した。深鉢の胴部破片1点（45）を掲載した。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK18土坑（第20図、写真図版16）

10区の北側に位置する。SK08土坑精査中に断面記録から、SK08土坑を切る別遺構として認識した。平面記録は西端のみである。規模・平面形は、開口部110×75cm程度の楕円形基調で、断面形は歪な椀形、深さ50cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土が主体である。自然堆積か。壁・底面は、西側は地山のIV層、東側はSK08土坑埋土を掘り込んでいる。壁は西壁が直立し、東壁は外傾する。底面は湾曲する。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK19土坑（第23図、写真図版16、遺物：第31・33・37図、写真図版24・25・28）

10区の北側に位置し、IV層面で灰黄褐色土の広がりとして検出した。西側は調査区域外にかかる。確認した東側でSI02竪穴住居跡に切られている。規模・平面形は、開口部径150cm、底部径210cmの円形基調で、断面形はフラスコ状か。深さ100cmである。埋土・堆積状況は、灰黄褐色土を主体とする埋土である。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでおり、壁はオーバーハングする。底面はほぼ平坦で、中央に副穴1個を確認した。遺物は、埋土から縄文土器、石器、石製品が出土した。縄文土器の深鉢の口縁部破片3点（46～48）、底部1点（49）、石鏃2点（63・64）、尖頭器1点（72）、楔形石器1点（82）、石製品1点（115）を掲載した。時期は、縄文時代中期前葉と推測する。

SK21土坑（第23図、写真図版16）

10区の北側に位置する。SK11土坑の東側で、IV層面でにぶい黄褐色土の広がりとして検出した。SK11土坑との重複関係は判然としないが、切られていた可能性がある。規模・平面形は、開口部径150cm、底径140cmの円形基調か。深さ50cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土・黄褐色土・褐色土が主体でIV層との識別が難しかった。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK22土坑（第24図、写真図版16）

10区の北側に位置する。SI01竪穴住居跡の南側壁面と底面に不明瞭な灰黄褐色土の広がりとして検出した。西側は調査区域外にかかる。SI01竪穴住居跡に切られている。規模・平面形は、開口部径155cm、底部径105cmの円形基調で、深さ50cmである。埋土・堆積状況は、灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を主体とし、IV層との識別が難しかった。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK24土坑（第24図、写真図版17、遺物：第36図、写真図版27）

8区の北側に位置する。IV層面でのにぶい黄褐色土の広がりとして検出した。斜面に位置することから、トレンチを設定し、足場を確保して精査を進めた。重複関係はない。規模・平面形は、開口部径100cm、底部径155cmの楕円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ100cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄褐色土を主体とし、底面中央付近はやや山なりの堆積を示す。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングし、底面は、ほぼ平坦である。遺物は、埋土から石器が出土した。敲石1点（106）を掲載した。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK25土坑（第24図、写真図版17、遺物：第33図、写真図版25）

8区の北側に位置する。IV層面で褐色土の広がりとして検出した。斜面に位置することから、トレンチを設定し、足場を確保して精査を進めた。重複関係はない。規模・平面形は、開口部径120cm、底部径135cmの楕円形基調で、断面形はフラスコ状である。深さ110cmである。埋土・堆積状況は、褐色土、黄褐色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦だが、中央に副穴1個を確認した。遺物は、埋土から石器が出土した。石匙1点（78）を掲載した。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK26土坑（第24図、写真図版17）

8区の北側に位置する。IV層面でのにぶい黄橙色土の広がりとして検出した。斜面に位置することから、トレンチを設定し、足場を確保して精査を進めた。当初は、重複関係はなく、単独の遺構として精査を進めたが、南西壁が想定した形状と異なることが判明したため、別遺構（平面図SK26a）が存在していた可能性もある。規模・平面形は、開口部径105cm、底部径175cmの楕円形基調か。断面形はフラスコ状である。深さ80cmである。埋土・堆積状況は、にぶい黄橙色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングする。底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK28土坑（第25図、写真図版17）

12区の東側に位置する。IV層面で黒色土の広がりとして検出した。南側は調査区域外にかかる。土坑の北端部を確認した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径40cmの円形基調で、深さ70cmである。埋土・堆積状況は、黒色土・黒褐色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁は外傾して湾曲し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

SK30土坑（第25図、写真図版17）

12区の東側に位置する。IV層面で黒褐色土の広がりとして検出した。北側は調査区域外にかかる。

土坑の南端部を確認した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径75cm以上の円形基調か。深さ35cmである。埋土・堆積状況は、黒褐色土・黒色土を主体とする。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁は湾曲し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

SK31 土坑 (第25図、写真図版18)

8区の北側に位置する。道路と田面の境界となる法面のIV層面で黄褐色土の広がりとして検出した。大半は削平され、土坑底部の西端部のみを確認した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径205cm以上の円形基調か。深さ50cmである。埋土・堆積状況は、黄褐色土を主体とする底面付近の埋土の状態である。自然堆積か。壁・底面は、地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングしていたか。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK32 土坑 (第25図、写真図版18)

8区の北側に位置する。道路と田面の境界となる法面のIV層面で暗褐色土の広がりとして検出した。大半は削平され、土坑底部の西端部のみを確認した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径185cmの円形基調か。深さ70cmである。埋土・堆積状況は、暗褐色土を主とする埋土で、6層は底面中央付近に堆積する山なりの堆積と推測する。壁・底面はIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングし、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK33 土坑 (第25図、写真図版18)

8区の北側に位置する。道路と田面の境界となる法面のIV層面で褐色土の広がりとして検出した。大半は削平され、土坑底部の西端部のみを確認した。重複関係はない。規模・平面形は、底部径125cm以上の円形基調か。深さ20cmである。埋土・堆積状況は、褐色土を主体とする底面付近の埋土の状態である。壁・底面は地山のIV層を掘り込んでいる。壁はオーバーハングし、底面は平坦か。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

(5) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構5基を調査した。平面形で分けると、楕円形2基、溝状3基である。

SK01 陥し穴状遺構 (第26図、写真図版19)

1区の西側に位置する。IV層面で細長い暗褐色土の広がりとして検出した。西側が調査区域外にかかる。重複関係はない。規模・平面形は、開口部長さ120cm以上、幅20cmの東西方向に長軸を持つ溝状で深さ約50cmである。埋土・堆積状況は、上位に堆積する暗褐色土・黄褐色土は壁の崩落土、底面直上に薄く堆積する黒褐色土は旧表土と考えられる。壁・底面はIV層を掘り込んでいる。壁は、ほぼ直立し、底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

SK20 陥し穴状遺構 (第26図、写真図版19)

10区の中央に位置する。IV層面で黒褐色土の楕円形の広がりとして検出した。南側の上端は削平により失われている。重複関係はない。規模・平面形は、開口部径200×190cmで、南北方向に長軸を持つ楕円形、底部100×70cmの隅丸長方形である。深さ約130cmである。埋土・堆積状況は、上位に1～3層黒褐色土、4層褐灰色土、中位から下位に5～7層灰黄褐色土、底面直上に褐灰色土が堆積する。

1層下面に黄橙色の火山灰ブロックを確認し、採取して分析した結果、十和田中振火山灰 (To-Cu) であるとの結果を得た。壁付近に堆積する6層にぶい黄褐色土、8層明黄褐色土は壁の崩落土か。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁は底面付近がほぼ直立し、上半部が外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、火山灰降下前の縄文時代前期前葉以前か。

S K 2 3 陥し穴状遺構 (第26図、写真図版19)

8区の北側に位置する。Ⅳ層面で細長い黒褐色土の広がりとして検出した。重複関係はない。規模・平面形は、開口部370×50cm、底部340×10cmで、北東から南西方向に長軸を持つ溝状で、深さ約100cmである。埋土・堆積状況は、上位に1・2層黒褐色土、中位に3層褐灰色土、下位に4層黒褐色土が堆積する。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁はほぼ直立し、底面は、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

S K 2 7 陥し穴状遺構 (第27図、写真図版20、遺物：第32図、写真図版24)

8区の北側に位置する。Ⅳ層面で隅丸方形の黒褐色土の広がりとして検出した。重複関係はない。規模・平面形は、開口部155×150cm、底部65×60cmで、北西から南東方向に長軸を持つ隅丸方形で、深さ約160cmである。埋土・堆積状況は、黒褐色土・灰黄褐色土を主体とし、その間層に壁の崩落土と考えられるにぶい黄褐色土が複数回にわたって堆積する。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁は、底面付近がほぼ直立し、上半部が外傾して立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。遺物は、縄文土器が出土した。深鉢の口縁部破片1点(50)を掲載した。時期は、S K 20と類似する形状・埋土で、縄文時代前期前葉以前と推測する。底面直上で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、¹⁴C年代5890±30yrBP、1σ暦年代範囲4786calBC-4723calBC(68.3%)の測定値が出ている。

S K 2 9 陥し穴状遺構 (第27図、写真図版20)

12区の東側に位置する。Ⅳ層面で暗褐色土の細長い広がりとして検出した。重複関係はない。規模・平面形は、開口部430×40cm、底部420×14cmで、東西方向に長軸を持つ溝状である。深さ約50cmである。上部はかなり削平されていると推測する。埋土・堆積状況は、暗褐色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積し、礫も含まれる。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込んでいる。壁は外傾して立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は出土しなかった。時期は、縄文時代と推測するが、詳細は不明である。

(6) その他

溝状を呈する遺構1条がある。残存状況が不良で、詳細は不明である。ここで記載する。

S X 0 1 性格不明遺構 (第27図、写真図版20)

8区の北側に位置する。Ⅳ層面で細長い褐色土の広がりとして検出した。重複関係はない。規模・平面形は、長さ260cm、幅15cmの北西から南東方向に長軸を持つ溝状で、深さ約10cmである。本遺構の長軸方向北側約1.3mの調査区北端の断面計測箇所にも同様の痕跡を確認した(第13図8区基本土層A参照)。本来の形状は未確認部分も含め、さらに長かった可能性がある。埋土・堆積状況は、褐色土で暗褐色土ブロックを含む。壁・底面は、地山のⅣ層を掘り込み、壁は外傾して立ち上がる。性格は、単独の溝状遺構より、竪穴住居跡の壁溝の一部の可能性が考えられた。周辺の遺構の残存状況から、当該遺構周辺は、大きく削平されていたと判断する。遺物は出土しなかった。時期の詳細は不明である。

1 検出遺構

第 10 表 竪穴住居跡（縄文）観察表

(数値)：残存値

遺構名	位置	平面形	規模 (m)					炉の形態	柱穴 個数	付属 施設	壁溝	貼床	新旧関係 (旧→新)	備考	時期	図版 No	写図 No
			開口部		壁高	床面											
			長径	短径		長径	短径										
SI01	10区	円形？	(3.70)	(2.80)	0.4	(2.60)	(1.65)	土器埋設炉、 地床炉	3	無	無	無	SK02と重複	¹⁴ C年代測定	前期	16	9
SI02	10区	円形？	6.00	(3.90)	—	(6.00)	(3.70)	不明	47	無	有	無	SK10→SI02、 SK19→SI02	2時期以上の 建替えか？	中期？	17	10

第 11 表 竪穴住居跡（古代）観察表

(数値)：残存値

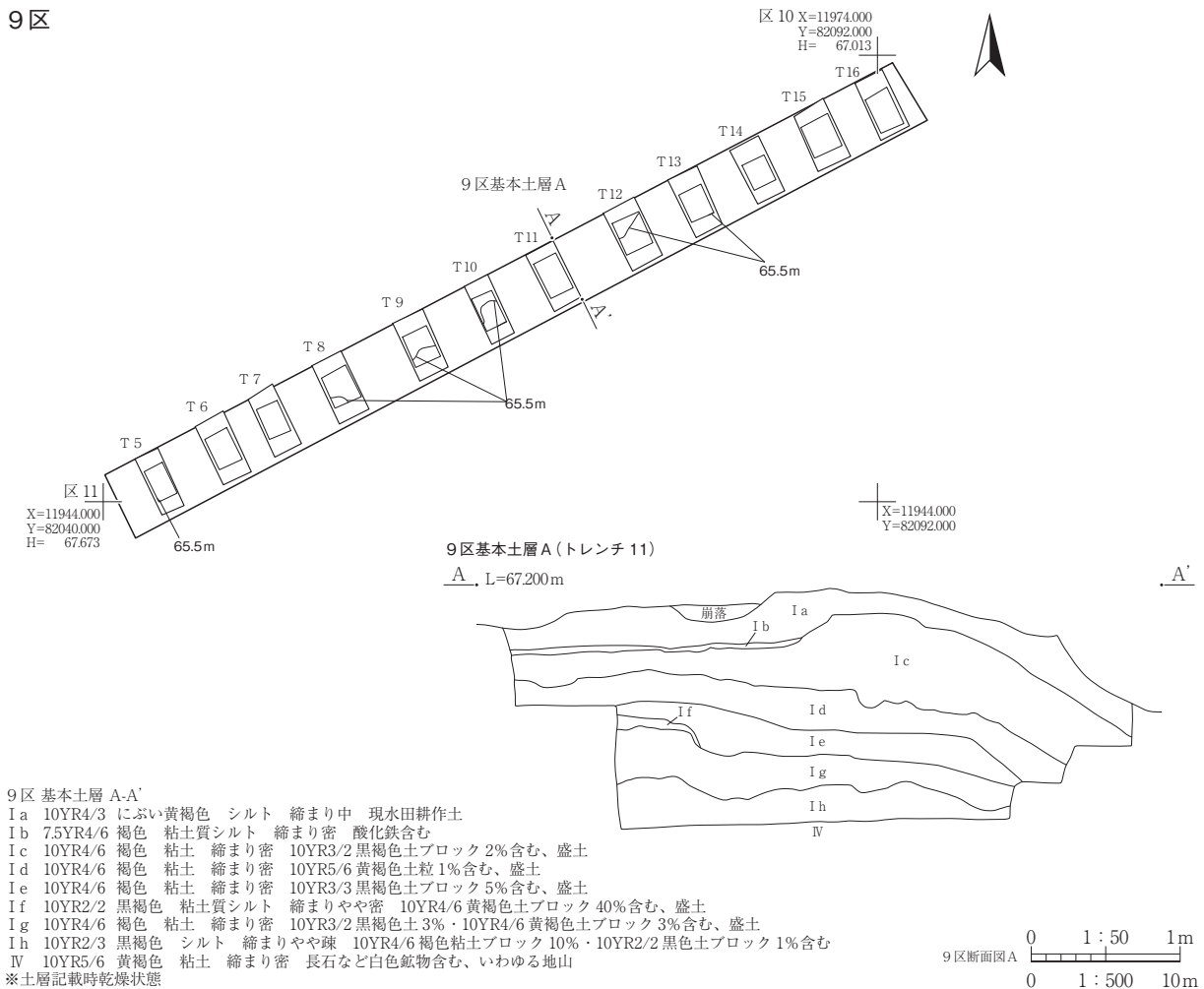
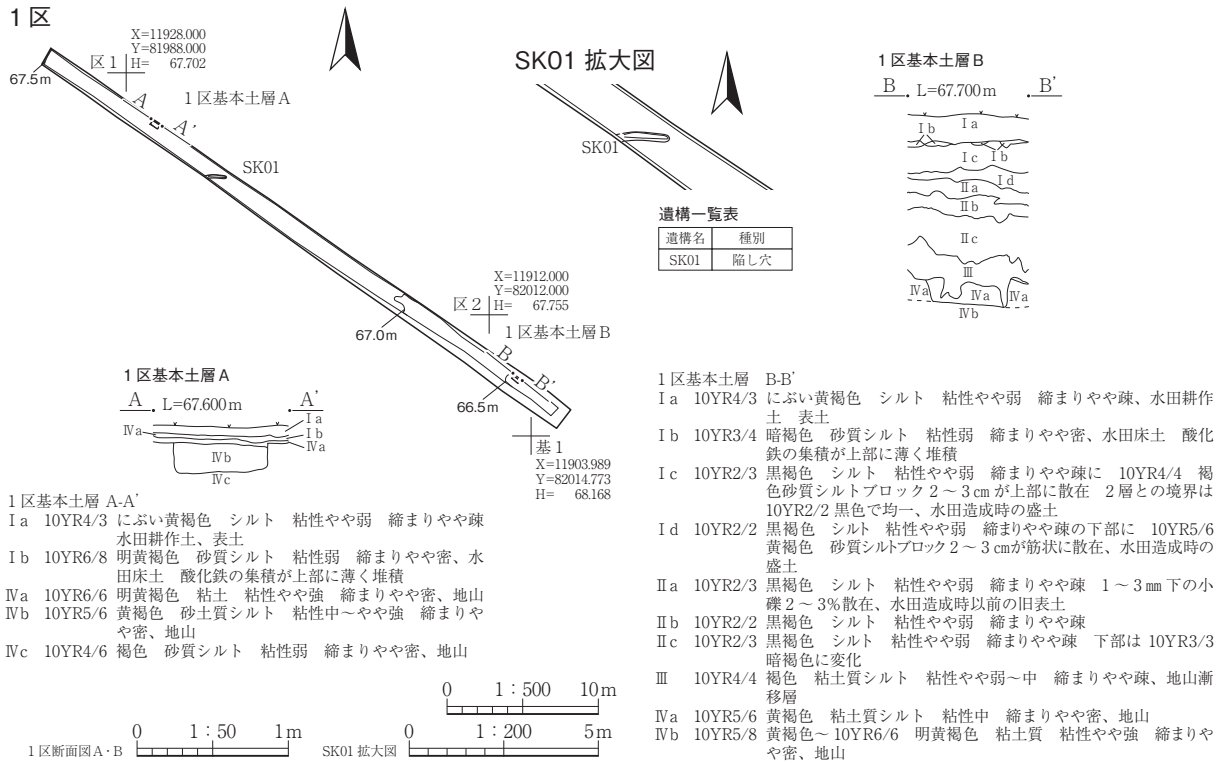
遺構名	位置	平面形	規模 (m)					カマド 位置	主軸 方位	柱穴 個数	付属 施設	壁溝	貼床	新旧関係 (旧→新)	備考	時期	図版 No	写図 No
			開口部		壁高	床面												
			長辺	短辺		長辺	短辺											
SI03	10区	方形？	(4.8)	(0.90)	0.70	(3.00)	(0.75)	不明	不明	不明	無	無	無	SK15→SI03、 SK16→SI03	十和田 a テフラ	10C 初頭？	18	11
SI04	8区	不明	—	—	0.40	—	—	不明	不明	不明	無	無	無	無		8C 中頃？	18	11

第 12 表 土坑・陥し穴状遺構観察表

(数値)：残存値

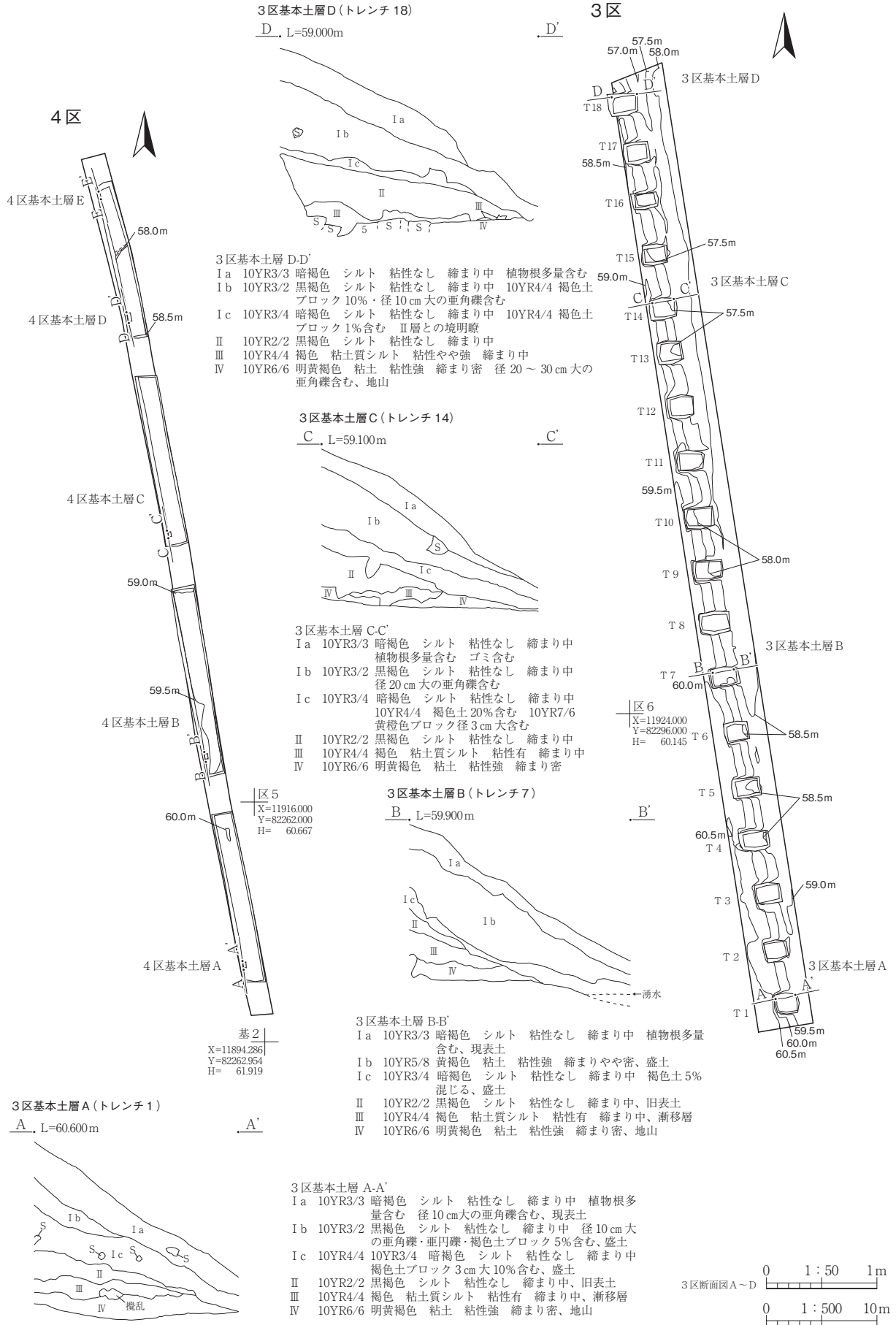
遺構名	位置	平面形	断面形	規模 (cm)					付属 施設	性格 ※	新旧関係 (旧→新)	備考	時期	図版 No	写図 No
				開口部		底部		深さ							
				長径	短径	長径	短径								
SK01	1区	溝状	V字状	(120)	22	(115)	15	45	無	陥	無	西側調査区域外	縄文	26	19
SK02	10区	円形？	フラスコ状？	150	(60)	145	(90)	40	無	貯	SI01と重複		縄文	19	12
SK03	10区	円形	フラスコ状	215	170	170	170	125	無	貯	SK17→SK03		縄文	19	12
SK04	10区	円形？	フラスコ状？	180	(65)	175	(70)	25	無	貯	無	東側調査区域外	縄文	19	12
SK05	10区	円形	フラスコ状？	130	130	185	185	90	無	貯	無		縄文	19	12
SK06	10区	円形	フラスコ状	140	135	180	175	75	副穴	貯	無		縄文	20	13
SK07	10区	円形	フラスコ状	180	180	185	185	60	副穴	貯	SK14→SK07		縄文	20	13
SK08	10区	円形	フラスコ状	195	175	235	225	70	無	貯	SK08→SK18	¹⁴ C年代測定	縄文	20	13
SK09	10区	円形？	フラスコ状？	150	(50)	170	(80)	40	無	貯	無	東側調査区域外	縄文	21	14
SK10	10区	円形？	フラスコ状	170	(65)	185	(65)	50	無	貯	SK10→SI02	¹⁴ C年代測定 東側調査区域外	縄文	21	14
SK11	10区	円形？	フラスコ状	85	(70)	150	(50)	95	無	貯	SK12→SK11	西側調査区域外	縄文	21	14
SK12	10区	円形？	フラスコ状	190	(70)	195	(50)	100	無	貯？	SK12→SK11	西側調査区域外	縄文	21	14
SK13	10区	円形	フラスコ状	65	45	185	(120)	145	副穴・溝	貯	SK13→SK03	西側調査区域外	縄文	22	14
SK14	10区	円形？	フラスコ状	175	(70)	205	(70)	40	無	貯	SK14→SK07	東側調査区域外	縄文	22	15
SK15	10区	円形	フラスコ状	80	(40)	180	180	125	無	貯	SK15→SI03		縄文	22	15
SK16	10区	円形？	ピーカー状	(110)	(15)	(85)	(20)	80	無	貯	SK16→SI03	西側調査区域外	縄文	23	15
SK17	10区	円形	フラスコ状	110	105	135	130	80	無	貯	無		縄文	23	15
SK18	10区	不明	碗形？	110?	—	40?	—	50	無	土	SK08→SK18		縄文	20	16
SK19	10区	円形？	フラスコ状	150	(110)	210	(105)	100	副穴	貯	SK19→SI02	西側調査区域外	縄文	23	16
SK20	10区	楕円形	逆台形	(190)	200	100	70	130	無	陥	無	十和田中掘テフラ	縄文	26	19
SK21	10区	円形？	碗形？	150	(110)	140	(105)	50	無	貯？	SK21→SK11・12		縄文	23	16
SK22	10区	円形？	フラスコ状？	155	(85)	105	(65)	50	無	貯	SK22→SI01	西側調査区域外	縄文	24	16
SK23	8区	溝状	V字状	370	50	340	10	100	無	陥	無		縄文	26	19
SK24	8区	円形	フラスコ状	110	100	155	155	100	無	貯	無		縄文	24	17
SK25	8区	円形	フラスコ状	120	120	135	125	110	副穴？	貯	無		縄文	24	17
SK26	8区	円形？	フラスコ状	105	(60)	175	(85)	80	無	貯	無	西側調査区域外	縄文	24	17
SK27	8区	円形	逆台形	155	150	65	60	160	無	陥	無	¹⁴ C年代測定	縄文	27	20
SK28	12区	円形？	U字状	95	(55)	40	(40)	70	無	土	無	南側調査区域外	不明	25	17
SK29	12区	溝状	V字状	430	40	420	15	50	無	陥	無		縄文	27	20
SK30	12区	円形？	碗形	95	(60)	75	(40)	35	無	土	無	北側調査区域外	不明	25	17
SK31	8区	円形？	フラスコ状？	(220)	(35)	(205)	(65)	50	無	貯	無		縄文	25	18
SK32	8区	円形？	フラスコ状？	(185)	(70)	(185)	(105)	70	無	貯	無		縄文	25	18
SK33	8区	円形？	フラスコ状？	(115)	(25)	(125)	(25)	20	無	貯	無		縄文	25	18

※ 貯：貯蔵穴
土：土坑
陥：陥し穴

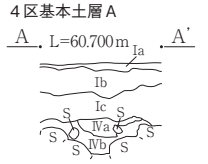


第10図 1・9区

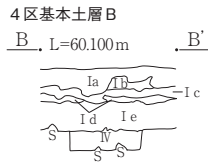
1 検出遺構



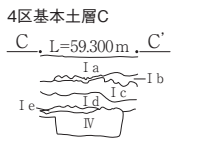
第11図 3・4 (1/2) 区



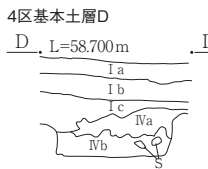
4区基本土層 A-A'
Ia 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性なし 締まり疎、現表土 アゼ部分
Ib 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強 締まり密 径5cm大の礫含む、盛土
Ic 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや有 締まりやや密 10YR4/4 褐色土ブロック径1cm大1%含む、耕作土相当
IVa 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 粘性やや有 締まり中 10YR5/8 黄褐色地山に入った汚れ、地山
IVb 10YR5/8 黄褐色 砂質粘土 粘性やや有 締まり密 径10~20cm大の垂円礫3~5%含む 花崗岩も含む、地山



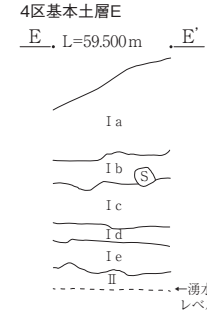
4区基本土層 B-B'
Ia 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性なし 締まり疎、現表土 アゼ部分
Ib 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強 締まり密 径5cm大の礫含む
Ic 1a層とIb層の混土層 Ia層20% Ib層80%
Id 1b層とIc層の混土層 Ib層80% Ic層20%
Ie 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや有 締まりやや密 10YR4/4 褐色土ブロック 径1cm大1%含む
IV 25Y5/3 黄褐色 粘土 締まり密 径10~15cmの垂角礫1%含む A-A' Ie層の砂質粘土層、礫層の上に乗る層



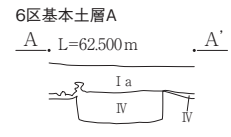
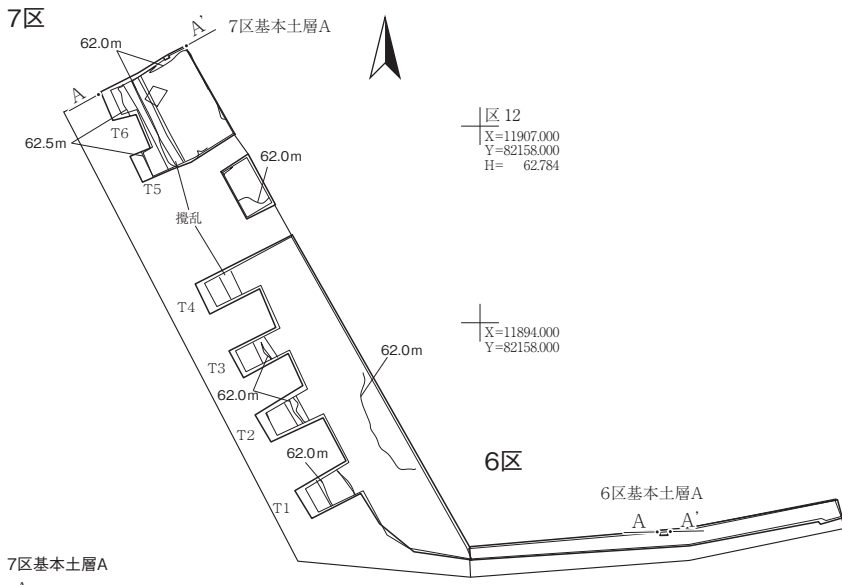
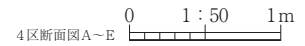
4区基本土層 C-C'
Ia 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性なし 締まり疎、現表土 アゼ部分
Ib 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強 締まり密、盛土
Ic 1b層とId層の混土層 Ib層ブロック20%径1cm大 Id層80%、盛土
Id 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや有 締まりやや密 10YR4/4 褐色土ブロック径1cm大1%含む、耕作土
Ie Id層とIV層の混土層 3層90% IV層ブロック径5~30mm大10%含む、耕作土
IV 25Y6/4 黄褐色 粘土 粘性やや強 締まり密 砂層も含む 酸化した地山



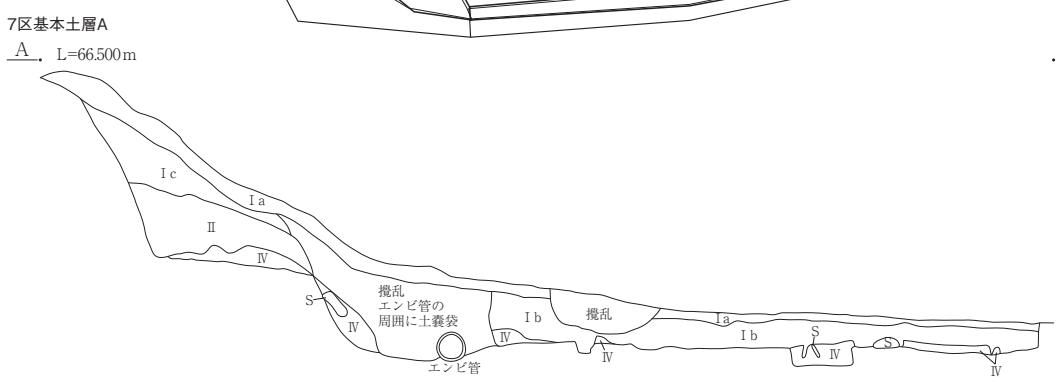
4区基本土層 D-D'
Ia 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性なし 締まり中
Ib 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 締まり中 黄褐色ブロック 径5~10mm大10%含む
Ic 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性なし 締まり中 黄褐色地山粘土ブロック5%含む
IVa 10YR7/6 ~ 5/6 明黄褐色 粘土 粘性強 締まり密
IVb 25Y6/1 ~ 5/1 黄灰色 粘土 粘性強 締まり密 径10~20cm大の垂円礫・円角礫含む



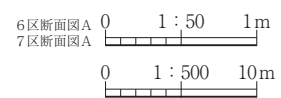
4区基本土層 E-E'
Ia 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性強 締まりやや密、北端の道路への盛土
Ib 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性やや有 締まりやや密 10YR5/8 黄褐色ブロック5%含む 径20cm大の円角礫含む、盛土
Ic 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性なし 締まり中 10YR7/6 明黄褐色 粘土 20%含む、耕作土
Id 10YR7/1 灰白色 粗砂 粘性なし 締まりやや疎 盛土
Ie 10YR5/2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 径5~20cm大ブロック 意図的に耕作土上に敷いた砂、攪乱層
II 10YR6/1 褐灰白 砂質粘土 粘性強 締まり密 以下湧水面 各所に細砂層が確認できる 水成堆積 地山上に堆積する水成堆積



6区基本土層 A-A'
Ia 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 10YR5/6 黄褐色土ブロック1~3%含む 稲藁含、現耕作土
IV 10YR4/6 ~ 10YR6/2 褐色~灰黄褐色 粘土 締まり密 φ1~3cm大の小礫含む

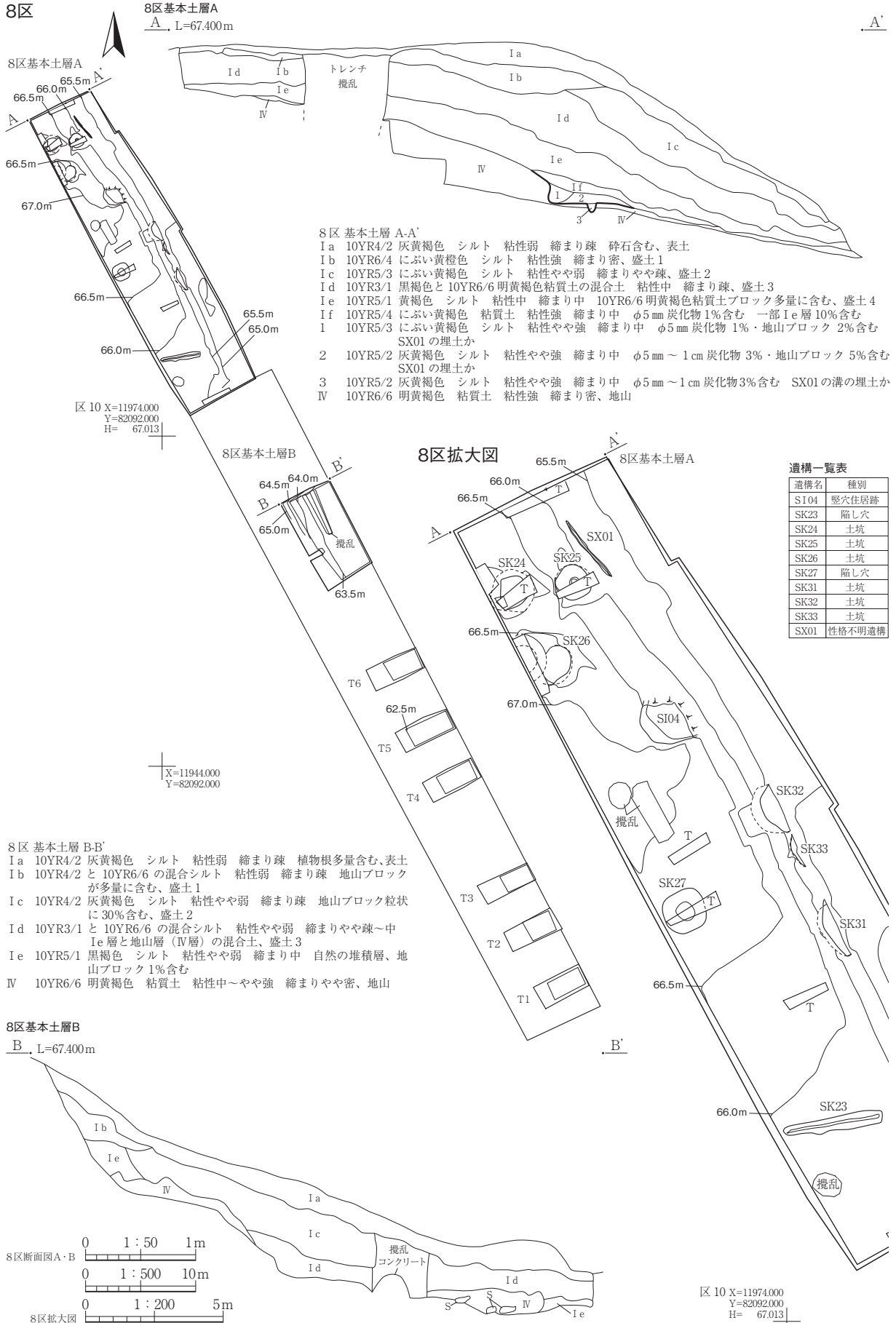


7区基本土層 A-A'
Ia 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり疎 植物根・φ1~2cm大の中礫・10YR2/3 黒褐色土20%含む
Ib 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 10YR5/6 黄褐色粘土ブロックφ1~5cm大5%・植物根含む
Ic 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 10YR2/2 黒褐色土10%含む
II 10YR2/1 黒色 シルト 締まり中 酸化鉄の集積ブロック3%含む
IV 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり密 粘性強 酸化していない部分は10YR7/2に黄褐色

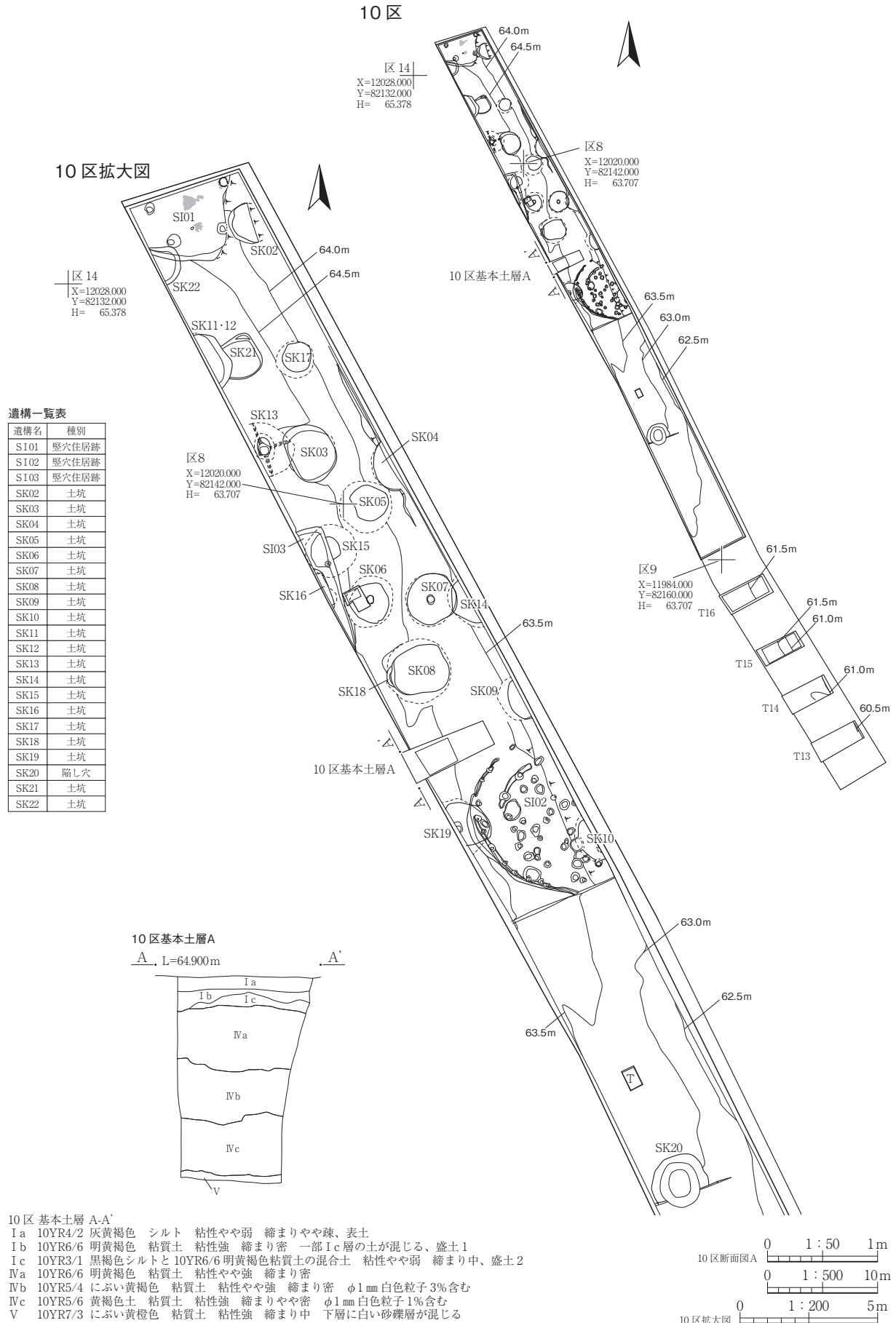


第12図 4区(2/2)・6・7区

1 検出遺構



第13図 8区

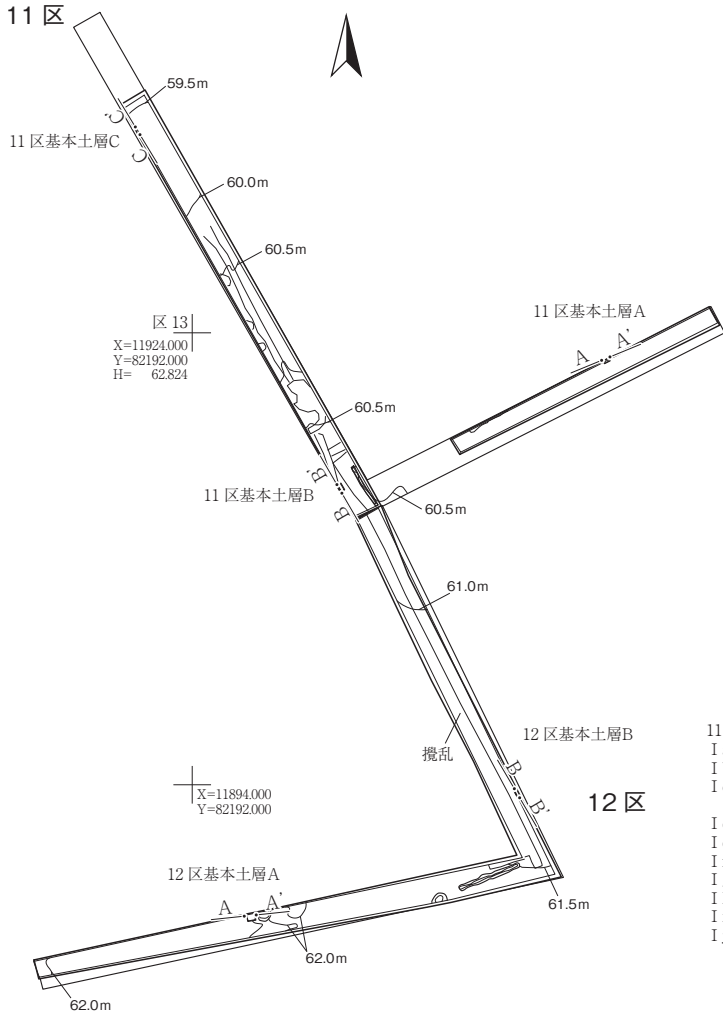


10区基本土層 A-A'

Ia 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや疎、表土
 Ib 10YR6/6 明黄褐色 粘質土 粘性強 締まり密 一部Ic層の土が混じる、盛土1
 Ic 10YR3/1 黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘質土の混合土 粘性やや弱 締まり中、盛土2
 IVa 10YR6/6 明黄褐色 粘質土 粘性やや強 締まり密
 IVb 10YR5/4 濃い黄褐色 粘質土 粘性やや強 締まり密 φ1mm白色粒子3%含む
 IVc 10YR5/6 黄褐色土 粘質土 粘性強 締まりやや密 φ1mm白色粒子1%含む
 V 10YR7/3 濃い黄褐色 粘質土 粘性強 締まり中 下層に白い砂礫層が混じる

第14図 10区

1 検出遺構



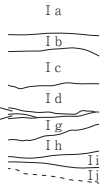
11区基本土層A
A, L=60.600m, A'

11区基本土層B
B, L=61.200m, B'



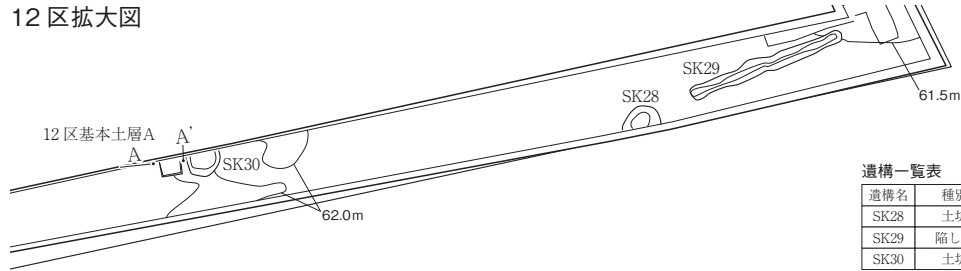
11区基本土層 A-A'・B-B'
Ia 10YR2/1 黒褐色 シルト 締まり中 稲藁含む 10YR4/6 褐色土ブロックφ1cm大3%含む
IV 10YR5/6~10YR7/2 黄褐色~にぶい黄褐色 粘土 粘性強 締まり密 φ4cm大の小礫含む 細砂含む

11区基本土層C
C, L=61.100m, C'



11区基本土層 C-C'
Ia 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 植物根多量に含む、現表土
Ib 10YR2/1 黒色 シルト 締まり中
Ic 10YR3/1 黒褐色 砂質シルト 締まり中 砂50%・炭化物1%・10YR4/6黄褐色土粒1%含む
Id 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 締まり中 炭化物1%・砂10%含む
Ie 10YR7/1 黒色 粗砂 締まり中 炭化物10%含む
If 10YR2/3 にぶい黄褐色 細砂 締まり中
Ig 10YR7/1 黒色 シルト(泥に近い) 締まり中 炭化物1%含む
Ih 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 締まり中 砂50%・植物根多量含む
Ii 10YR3/3 黒褐色 砂質シルト 締まり中 砂10%・植物根多量含む
Ij 10YR2/1 黒色 砂質シルト(泥に近い) 締まり中 砂5%含む

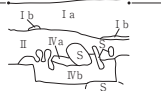
12区拡大図



遺構一覧表

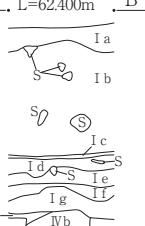
遺構名	種別
SK28	土坑
SK29	陥し穴
SK30	土坑

12区基本土層A
A, L=62.400m, A'



12区基本土層 A-A'
Ia 10YR3/2 黒褐色 シルト 締まり中 黄褐色土1%含む、現耕作土
Ib 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり中 粘性あり Ia層の下位に断続的に見られる
II 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 炭化物1%含む、旧表土 遺物を含包しない
IVa 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 締まり中
IVb 10YR4/6 褐色 粘土 締まり中、地山 φ20~30cm大の礫含む 地山の層位として下の方か 削平されているか

12区基本土層B
B, L=62.400m, B'



12区基本土層 B-B'
Ia 10YR3/2 黒褐色 シルト 締まり中 植物根含む φ5~10cm大の礫含む、現表土
Ib 10YR5/8 黄褐色 砂礫 φ5~10cm大の礫含む
Ic 2.5Y6/1 黄灰色 砂質粘土 締まり密
Id 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土 締まり密 粘性強 φ3~5cm大の礫含む
Ie 10YR3/1 黒褐色 シルト 締まり中 ゴミ含む
If 10YR6/3 にぶい黄色 粘土 締まり密
Ig 10YR7/1 黒色 シルト 締まり中 10YR6/3にぶい黄色粘土ブロック含む
Ib~If 盛土
IVa 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり密 粘性強 IVb層が酸化して変色したものと
IVb 5Y7/3 浅黄灰色 粘土 締まり密 粘性強
12区の東側は、地山まで削平された後、盛土されている。

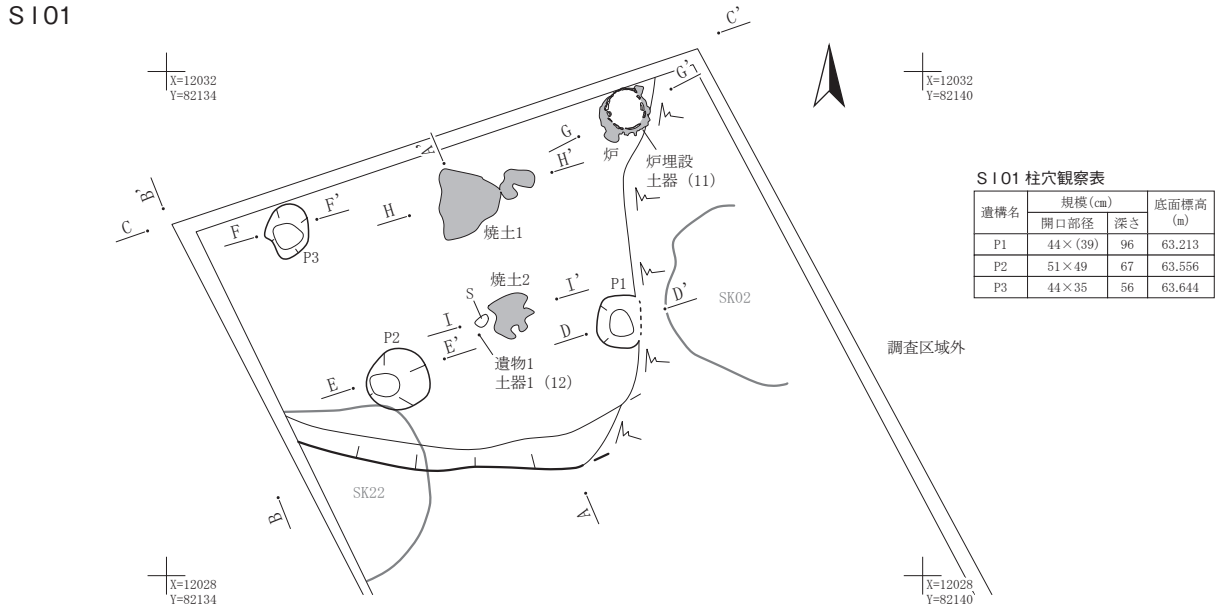
11区断面図A-C 0 1:50 1m

12区断面図A-B 0 1:500 10m

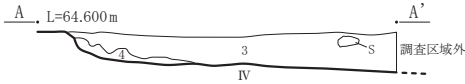
12区拡大図 0 1:200 5m

第15図 11・12区

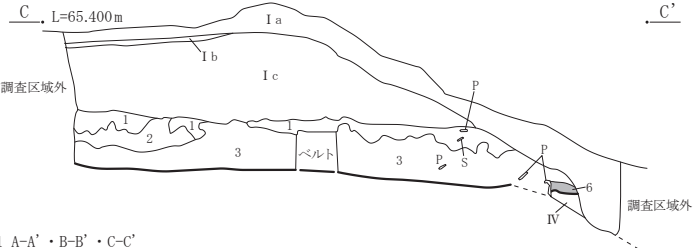
S101



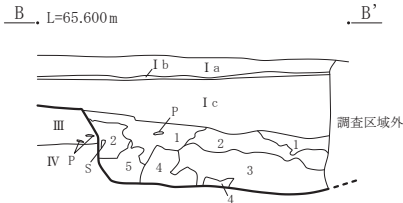
S101 A-A'



S101 C-C'



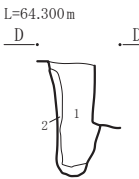
S101 B-B'



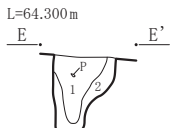
S101 A-A'・B-B'・C-C'

- 1a 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 締まり中、耕作土
- 1b 7.5YR4/6 褐色 粘土 締まり中、酸化鉄含む
- 1c 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まりやや密 10YR5/6 黄褐色ブロック 20%含む(φ3~10cm)・大型のブロックが入る箇所もある
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 10YR3/3 暗褐色 3%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 締まり中
- 3 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まりやや密 炭化物 1%含む
- 4 10YR4/6 褐色 粘土 締まり密
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 締まり密 炭化物 黄褐色土ブロックの混ざる暗褐色土層の広がりあり・※S101B-B'の南側に重複する土坑あり
- 6 10YR5/8 明赤褐色 焼土 締まり密

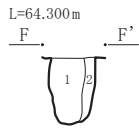
S101-P1



S101-P2



S101-P3



S101-P1 D-D'

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 炭化物 3%・10YR4/6 黄褐色ブロック 40%含む
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 粘性強 締まり密

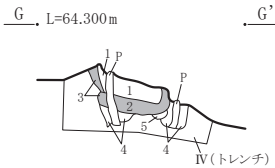
S101-P2 E-E'

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 炭化物 1%含む
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 粘性やや強 締まり中 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10%含む

S101-P3 F-F'

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 炭化物 1%含む
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 粘性やや強 締まり中 10YR4/3 にぶい黄褐色土 10%含む

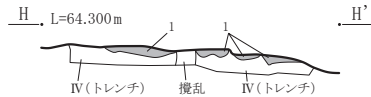
S101-炉 G-G'



S101-炉 G-G'

- ※直立の埋設土器
- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 炭化物 1%含む
- 2 5YR4/6 赤褐色 焼土 締まり密
- 3 10YR5/8 明赤褐色 焼土 締まり密
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密
- 5 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まりやや疎 攪乱か

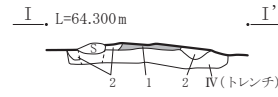
S101-焼土 1



S101-焼土 1 H-H'

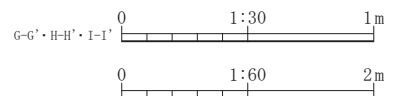
- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色 焼土 締まり密
- IV 10YR4/4 褐色 粘土 締まり密

S101-焼土 2



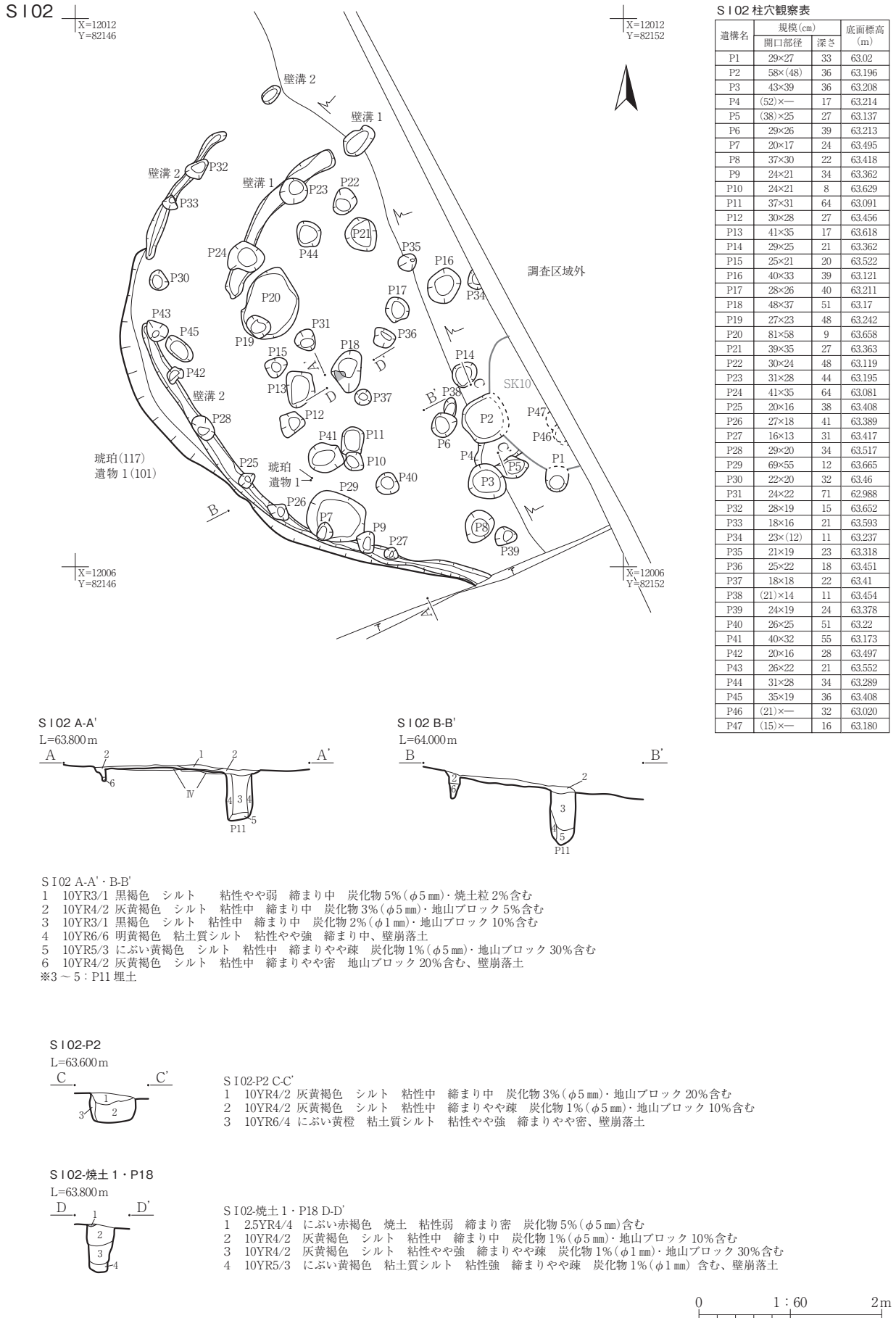
S101-焼土 2 I-I'

- 1 5YR4/4 赤褐色 焼土 締まり密
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 炭化物 1%含む

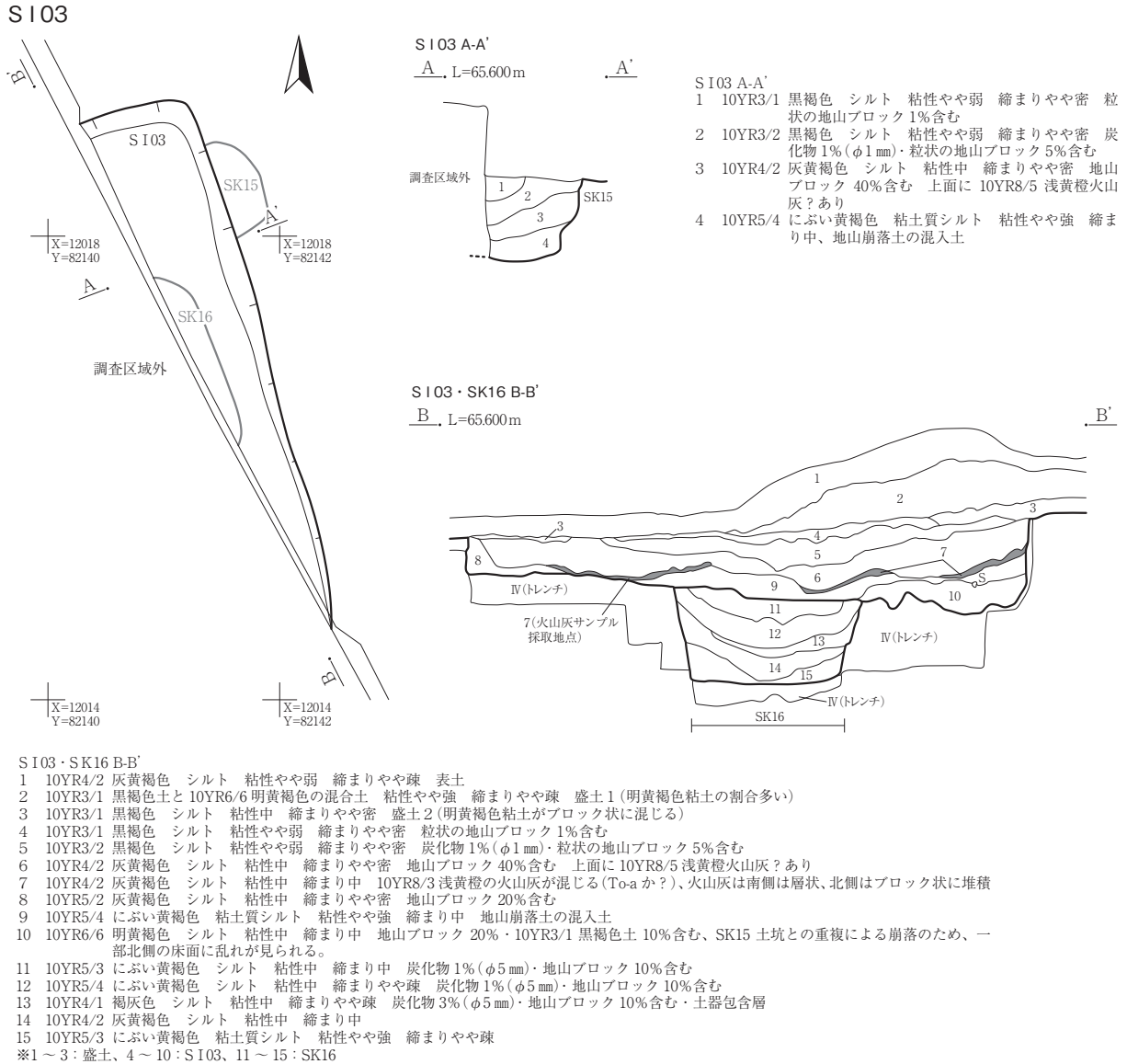


第 16 図 S101 竪穴住居跡

1 検出遺構

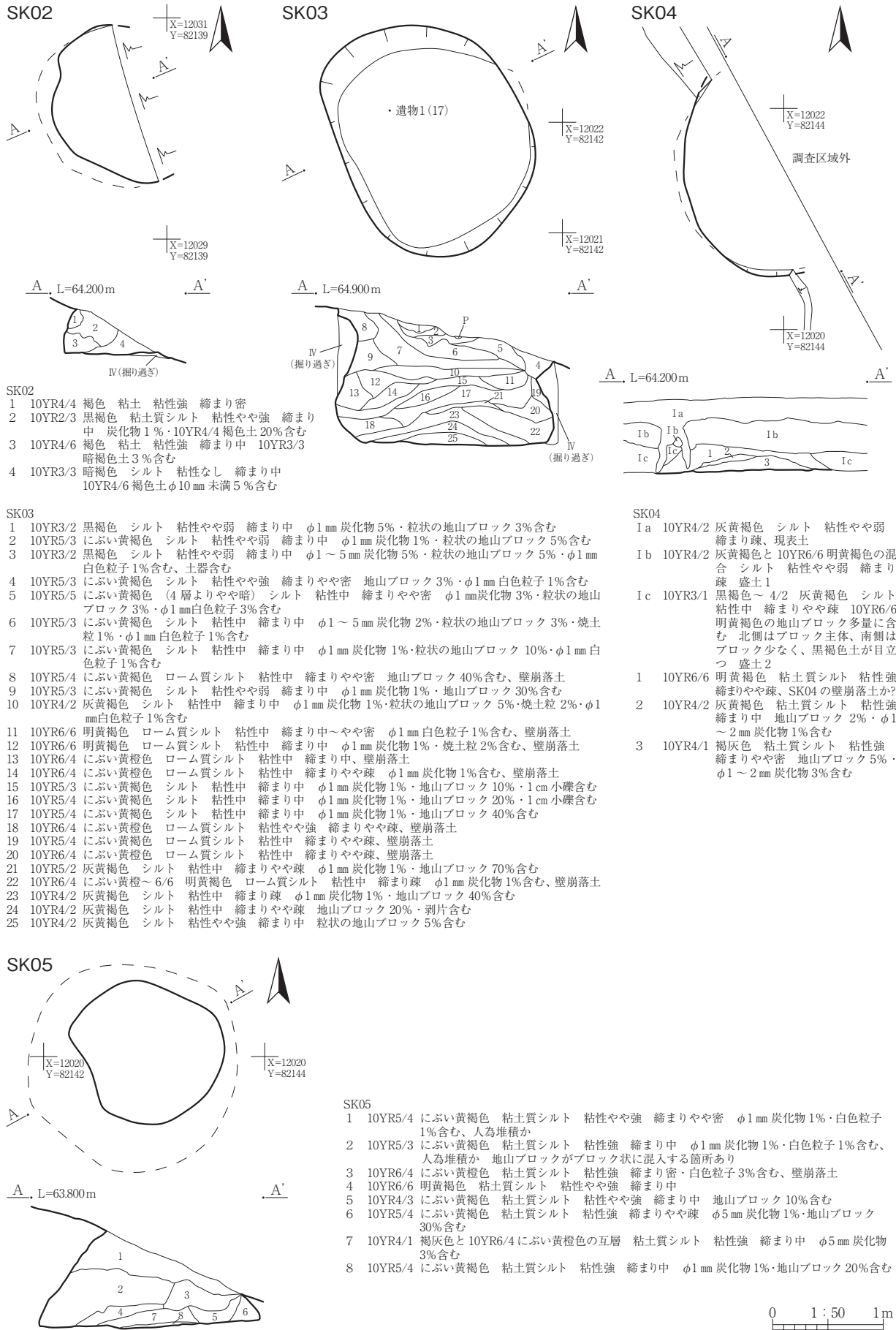


第17図 S102 竪穴住居跡



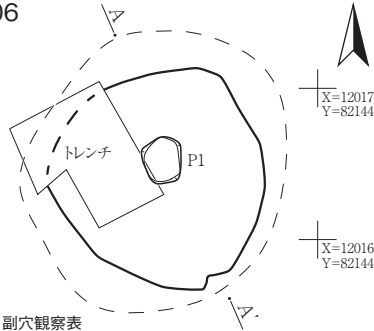
第18図 S103・04 竪穴住居跡

1 検出遺構



第19図 SK02・03・04・05土坑

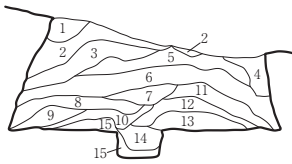
SK06



SK06 副穴観察表

遺構名	規模 (cm)		底面標高 (m)
	開口部径	深さ	
SK06-P1	30×28	17	63.572

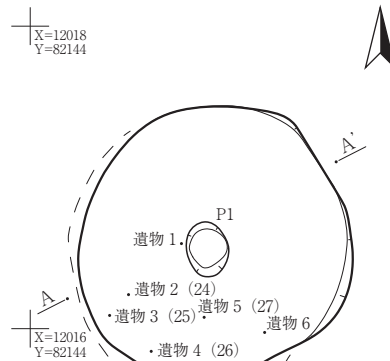
A, L=64.700m



SK06

- 1 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト 粘性やや弱 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・φ1mm白色粒子1%含む
- 2 10YR6/3 にぶい黄橙色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック40%・φ1mm白色粒子1%含む
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック40%含む
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
- 6 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物3%・地山ブロック20%含む
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
- 8 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ5mm炭化物2%・地山ブロック10%含む
- 9 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック40%含む
- 10 10YR3/1 黒褐色 シルト(炭混じり) 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物5%・地山ブロック20%含む
- 11 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
- 12 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%含む
- 14 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%含む、副穴埋土
- 15 10YR6/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり疎、副穴埋土

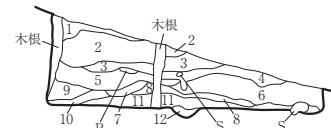
SK07



SK07 副穴観察表

遺構名	規模 (cm)		底面標高 (m)
	開口部径	深さ	
SK07-P1	35×26	6	63.274

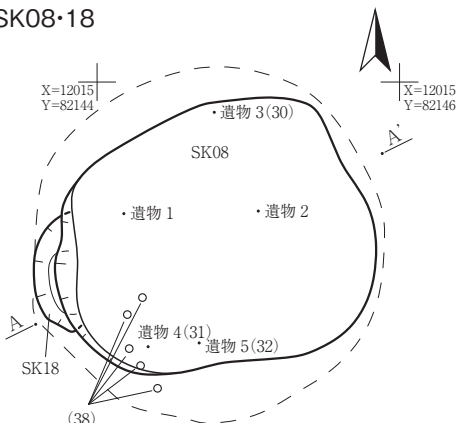
A, L=64.200m



SK07

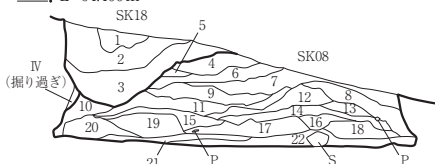
- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック10%含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1~5mm炭化物3%・粒状の地山ブロック5%含む
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1~5mm炭化物2%・地山ブロック10%含む
- 4 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1~5mm炭化物2%・5層との層界に土器を含む
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物2%・粒状の地山ブロック3%含む
- 6 10YR6/6 明黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%含む、壁崩落土
- 7 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ1mm炭化物10%・粒状の地山ブロック1%・焼土粒1%含む
- 8 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ5~10mm炭化物3%・粒状の地山ブロック3%含む
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1~5mm炭化物2%・地山ブロック10%含む
- 10 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・粒状の地山ブロック2%含む
- 11 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・粒状の地山ブロック2%・φ10cm大の礫含む
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 粒状の地山ブロック10%含む、副穴埋土

SK08・18



※SK18の平面図はIV層を掘り込んだ範囲のみ図化した。 ○遺物(38)(埋土中位)

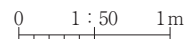
A, L=64.400m



SK08・18

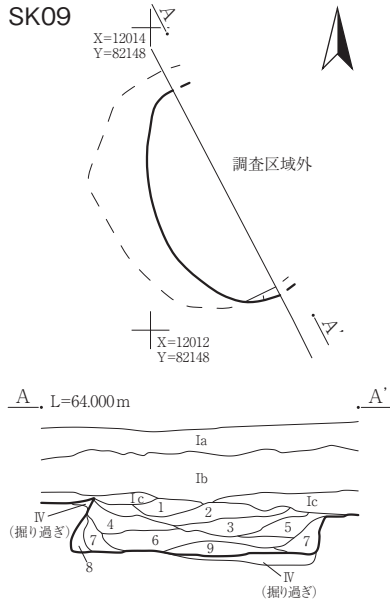
- 1 10YR6/6 明黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ5mm炭化物1%含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1~2mm炭化物3%・地山ブロック5%含む
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1~5mm炭化物5%・地山ブロック10%含む
- 4 10YR6/6 明黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや密 φ1~2mm炭化物1%含む
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1mm炭化物5%・地山ブロック5%含む
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5~10mm炭化物5%・地山ブロック5%含む
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ5mm炭化物3%・地山ブロック3%含む
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック10%含む
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
- 10 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック5%含む
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5~10mm炭化物3%・地山ブロック20%含む
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5~10mm炭化物2%・地山ブロック30%含む
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5~10mm炭化物3%・地山ブロック20%含む
- 15 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック5%含む
- 16 10YR6/4 にぶい黄橙 粘土質シルト 粘性強 締まりやや密 φ1mm炭化物1%含む
- 17 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ1mm炭化物5%・地山ブロック5%・2cm大の小礫・土器含む
- 18 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ5~10mm炭化物3%含む
- 19 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%含む
- 20 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック5%含む
- 21 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物2%・地山ブロック10%・遺物ポイント2の石器含む

※1~3: SK18, 4~22: SK08



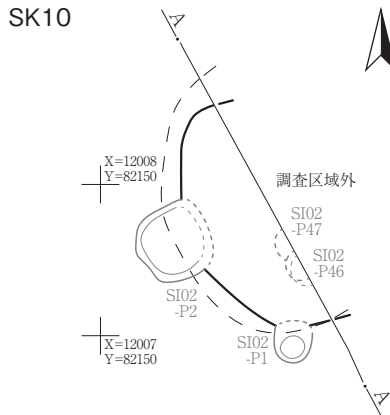
第20図 SK06・07・08・18土坑

1 検出遺構



SK09

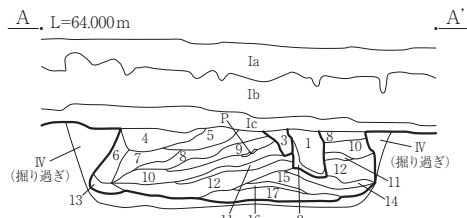
- Ia 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性弱 締まり疎 現表土
- Ib 10YR4/2 灰黄褐色と明黄褐色の混合 シルト 粘性やや弱 締まり疎 盛土1
- Ic 10YR3/1 黒褐色～4/2 明黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 10YR6/6 明黄褐色の地山ブロックを多量に含む、盛土2
- 1 10YR4/2 灰黄褐色～4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・粒状の地山ブロック10%・焼土粒2%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物3%・地山ブロック粒状主体（一部ブロック状あり）10%・焼土粒1%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物3%・地山ブロック粒状3%・焼土粒1%含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック状30%・焼土粒2%含む
- 5 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック状2%含む
- 6 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性強 締まりやや疎 φ1mm炭化物2%・地山ブロック粒状10%・焼土粒2%含む・10YR8/3 浅黄褐色の火山灰?一部混入
- 7 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性強 締まり中 φ1～5mm炭化物2%・地山ブロック粒状5%・焼土粒1%含む
- 8 10YR6/6 明黄褐色 ローム質シルト 粘性強 締まりやや疎、壁崩落土
- 9 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性強 締まり疎 φ5～10mm炭化物5%・地山ブロック粒状3%・焼土粒2%含む・10YR8/3 浅黄褐色の火山灰?一部混入



SK10

- Ia 表土
- Ib 盛土1
- Ic 盛土2
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック3%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック1%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5mm炭化物3%・地山ブロック10%含む
- 4 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ5mm炭化物3%・地山ブロック3%含む
- 5 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ5mm炭化物5%・地山ブロック5%・焼土粒1%含む
- 6 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ5mm炭化物2%・地山ブロック5%含む
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ5mm炭化物3%・地山ブロック3%・焼土粒1%含む
- 8 10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ5mm炭化物2%・地山ブロック20%含む
- 9 10YR4/1 褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1mm炭化物2%・地山ブロック2%含む
- 10 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ5～10mm炭化物5%・地山ブロック5%・焼土粒2%含む・上面に土器あり
- 11 10YR6/4 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
- 12 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック2%含む
- 13 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや疎 地山ブロック5%含む
- 14 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや密 φ1mm炭化物1%・地山ブロック5%含む
- 15 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや密 φ1～5mm炭化物1%・地山ブロック3%含む
- 16 10YR4/1 褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック5%含む
- 17 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック3%・焼土粒1%含む

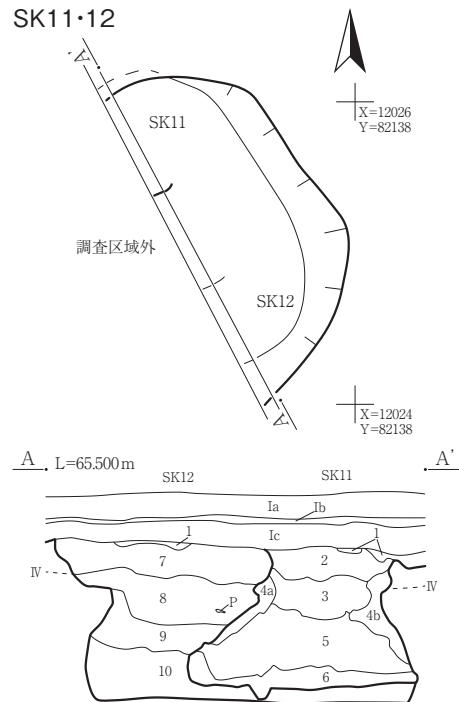
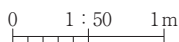
※1・2: SI02-P46、3: SI02-P47



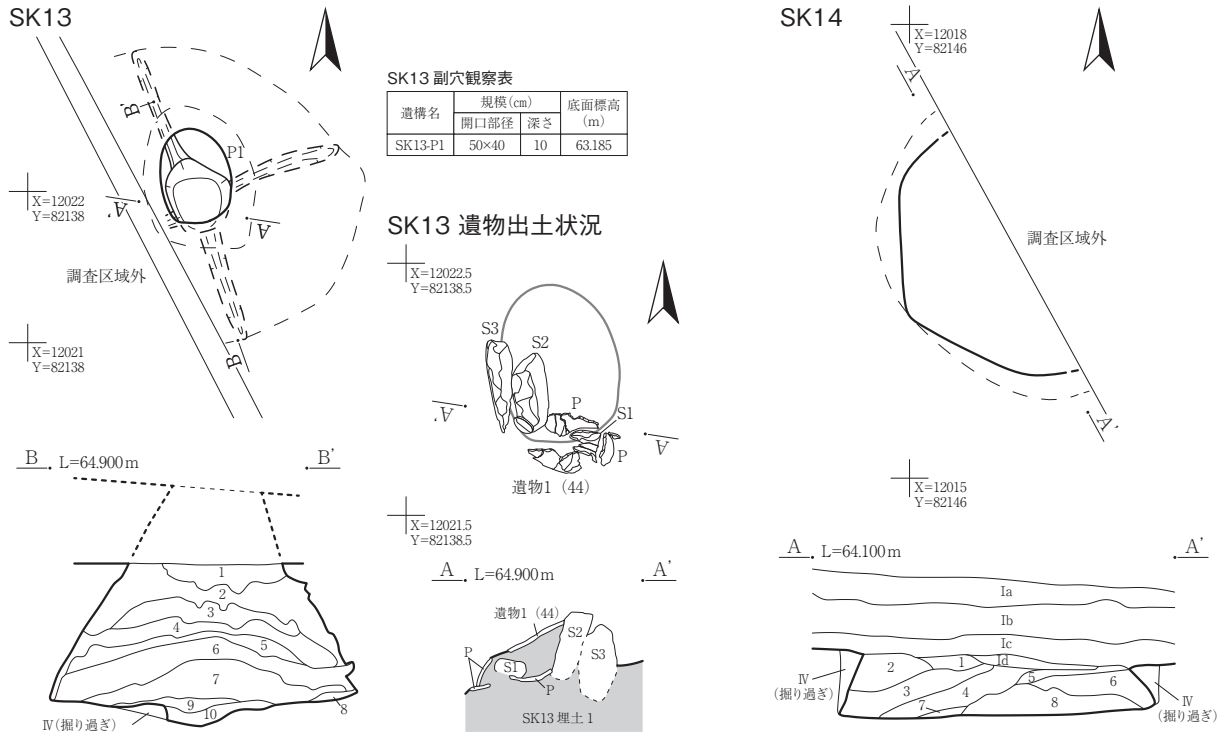
SK11・12

- Ia 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 締まり中 耕作土
- Ib 10YR4/6 褐色 粘土質シルト 締まり密 酸化鉄含む
- Ic 10YR5/6 黄褐色と10YR3/3 暗褐色の混合 シルト 締まり密、盛土
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中
- 2 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 10YR5/8 黄褐色土粒1%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 10YR5/8 黄褐色土粒1%含む
- 4a 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 10YR4/6 褐色10%含む
- 4b 10YR4/6 褐色 粘土 締まり中 10YR3/4 暗褐色土20%含む
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 10YR5/8 黄褐色土粒1%含む
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 締まり中 10YR4/6 褐色土粒5%含む
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 締まり中 10YR4/6 褐色土粒1%・10YR2/3 暗褐色土5%含む
- 8 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 10YR4/6 褐色土粒10%・炭化物1%含む
- 9 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 締まりやや疎 10YR4/6 褐色土粒1%含む
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 締まり密

※2～6: SK11、7～10: SK12

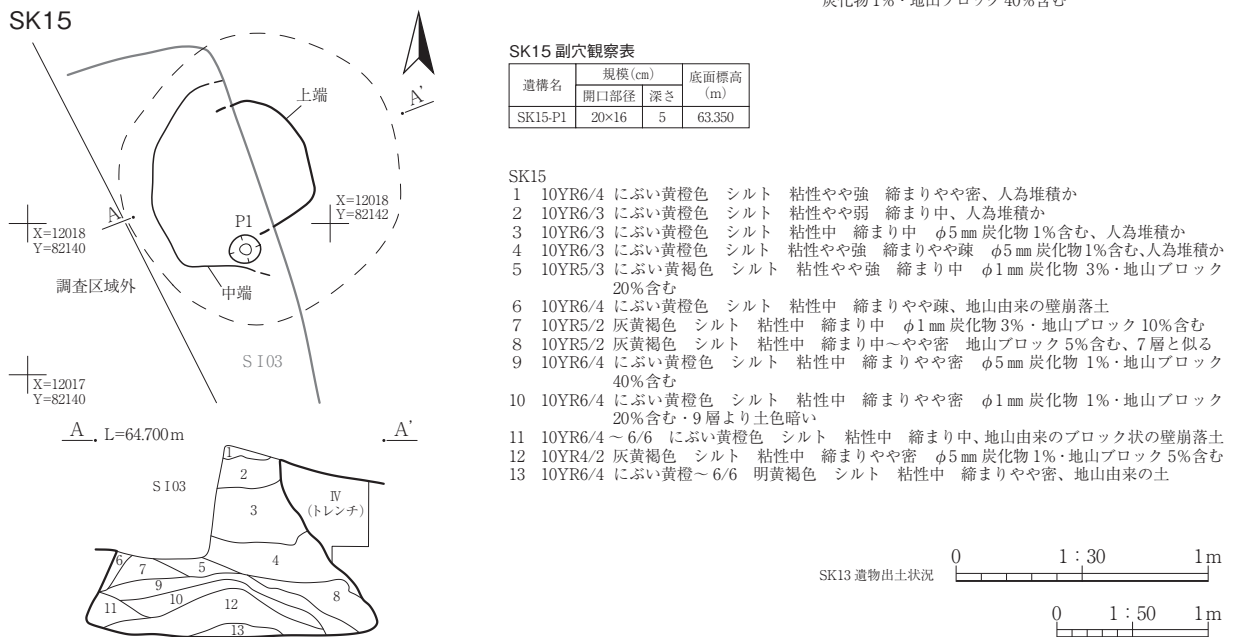


第21図 SK09・10・11・12土坑



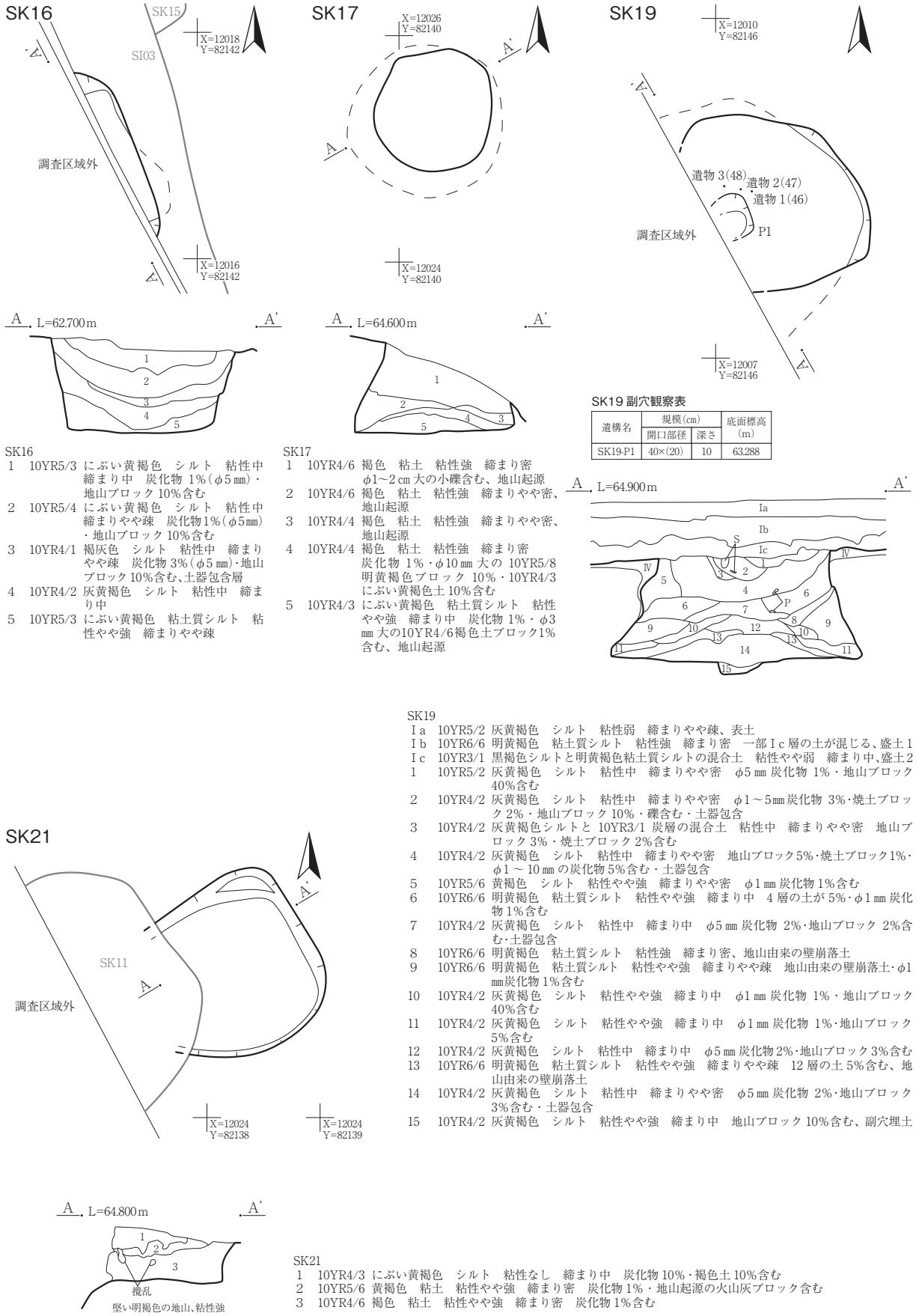
- SK13**
- 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ1mm炭化物1%・小礫・地山ブロック5%含む
 - 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性やや弱 締まり中 φ5mm炭化物1%・地山ブロック10%含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
 - 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや密 φ1~5mm炭化物1%・地山ブロック10%含む
 - 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1~5mm炭化物3%・地山ブロック5%含む
 - 10YR3/2 黒褐色~4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 φ1~5mm炭化物3%・地山ブロック5%含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや密 φ1~5mm炭化物2%・地山ブロック3%含む
 - 10YR5/4 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中、地山由来の土
 - 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック2%含む
 - 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性中 締まり疎 地山ブロック3%含む、副穴埋土

- SK14**
- Ia 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり疎、現表土
- Ib 10YR4/2 灰黄褐色と10YR6/6明黄褐色の混合 シルト 粘性やや弱 締まり疎、盛土1
- Ic 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 10YR6/6明黄褐色の地山ブロックを多量に含む、盛土2
- Id 10YR3/1 黒褐色と10YR6/6明黄褐色の混合 シルト 粘性中 締まり中、盛土4
- 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
 - 10YR6/6 明黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎
 - 10YR5/2 灰黄褐色~4/1 褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ5mm炭化物2%・地山ブロック30%含む
 - 10YR6/4 におい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%含む
 - 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 粘性強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック20%含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎 φ1mm炭化物1%・地山ブロック10%含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色 シルト 粘性強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック30%含む
 - 10YR5/2 灰黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まり中 φ1mm炭化物1%・地山ブロック40%含む

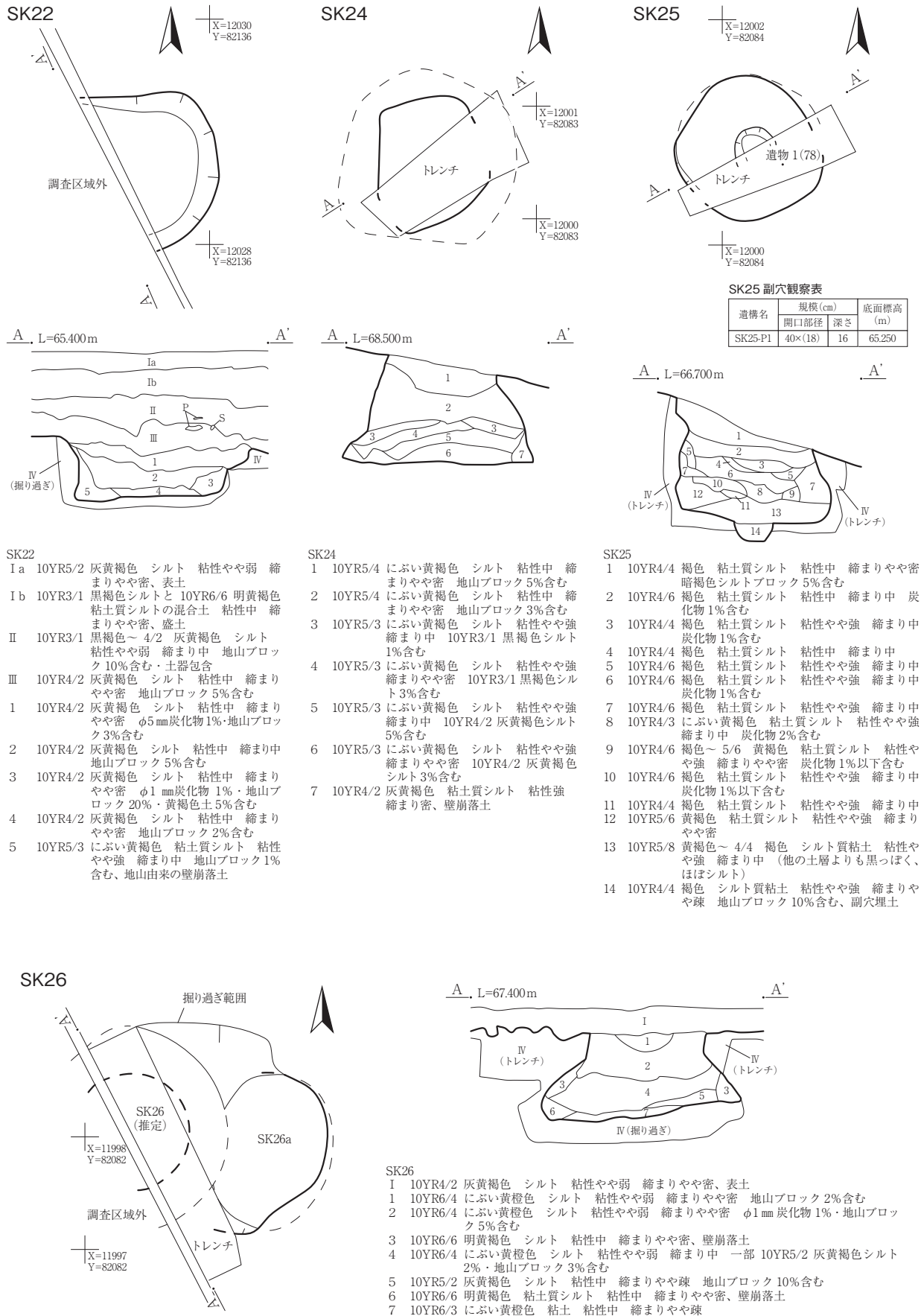


第22図 SK13・14・15土坑

1 検出遺構

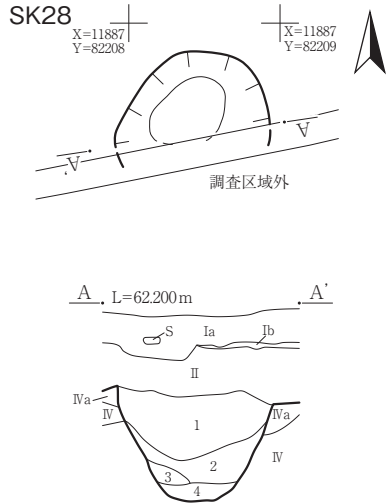


第 23 図 SK16・17・19・21 土坑

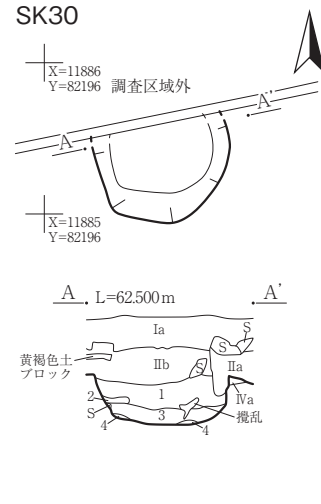


第24図 SK22・24・25・26土坑

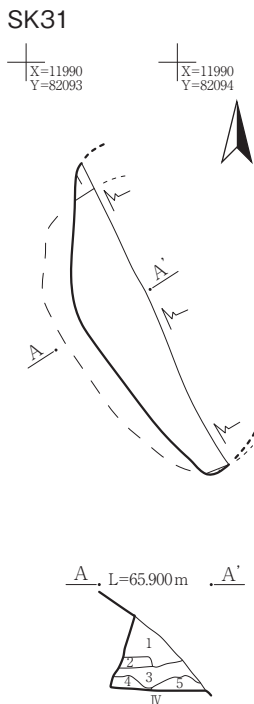
1 検出遺構



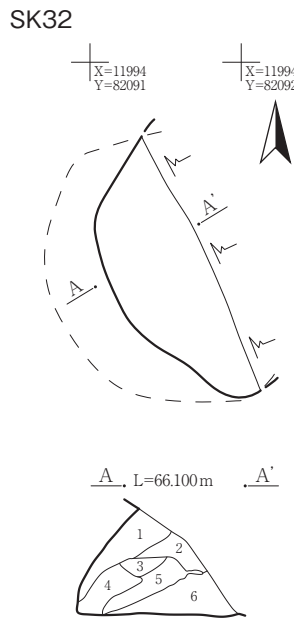
- SK28
- I a 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中 植物根・φ10 cm 大の礫含む
 - I b 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中 10YR4/4 褐色土粒 20%含む、I層下位に断続的に確認できる
 - II 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中
 - 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性なし 縮まり中 φ3 cm 10YR4/4 褐色土ブロック含む
 - 2 10YR2/1 黒色 砂質シルト 粘性なし 縮まり中 φ1 cm 10YR4/4 褐色土ブロック 3%含む
 - 3 10YR4/6 褐色 粘土 粘性強 縮まり密
 - 4 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中
 - IVa 10YR3/4 暗褐色 粘土 粘性強 縮まり中、漸移層
 - IV 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強 縮まり密 φ5 ~ 10 cm の礫含む



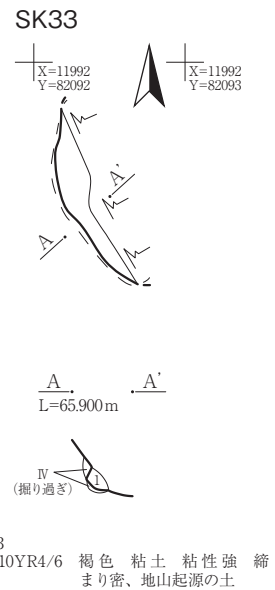
- SK30
- I a 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中 現耕作土・植物根含む
 - II a 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中 10YR4/4 褐色 ~ 5/6 黄褐色ブロック含む
 - II b 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中 10YR4/4 褐色粘土ブロック含む、II a層よりは明るい
 - IV a 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 縮まり密 φ5 ~ 10 cm 大の礫含む
 - 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 縮まり中
 - 2 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性やや強 縮まり中
 - 3 10YR2/1 黒色 シルト 粘性なし 縮まり中
 - 4 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性やや強 縮まり中



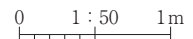
- SK31
- 1 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 縮まり密
 - 2 10YR4/4 褐色 粘土 粘性強 縮まりやや密
 - 3 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 縮まり密 10YR3/4 暗褐色土 5%含む
 - 4 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 縮まり密 10YR3/4 暗褐色土 10%含む
 - 5 10YR5/6 黄褐色 粘土 粘性強 縮まり密 10YR3/4 暗褐色土 30%含む



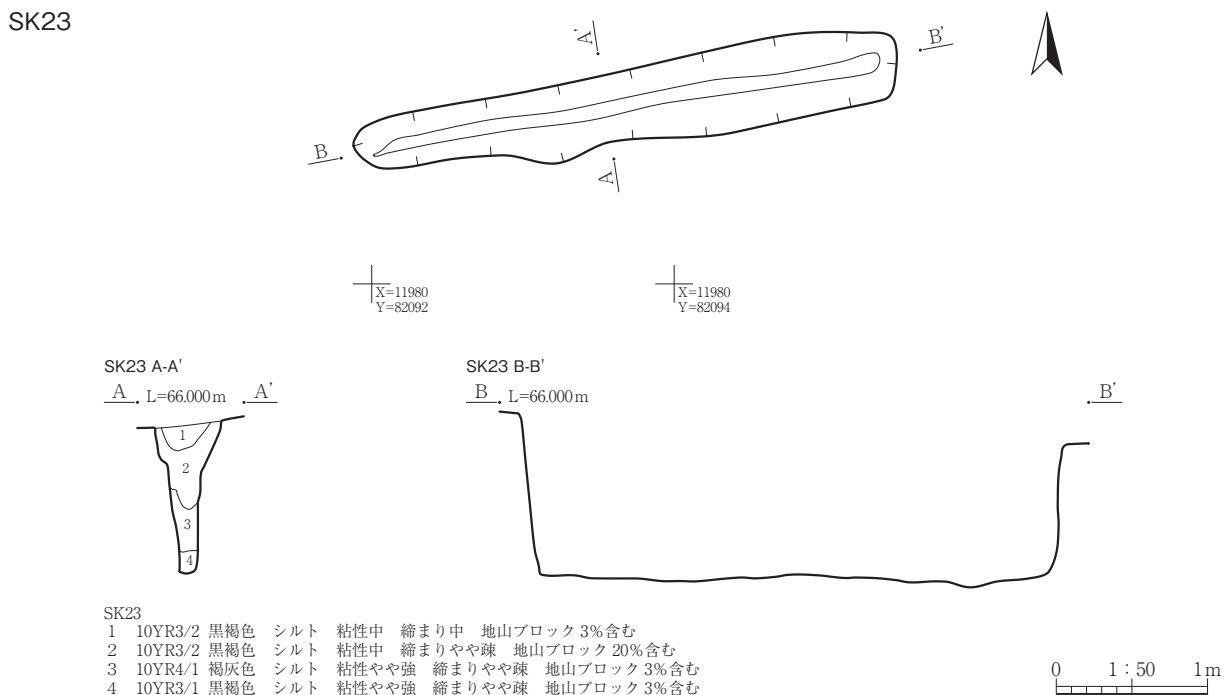
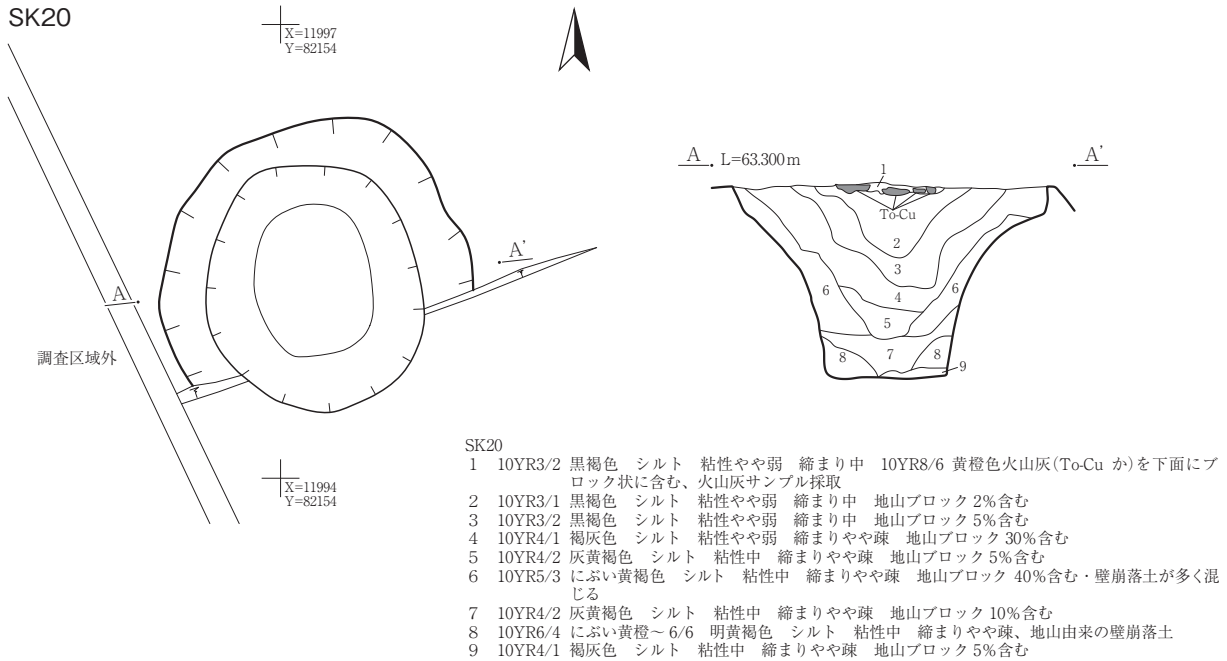
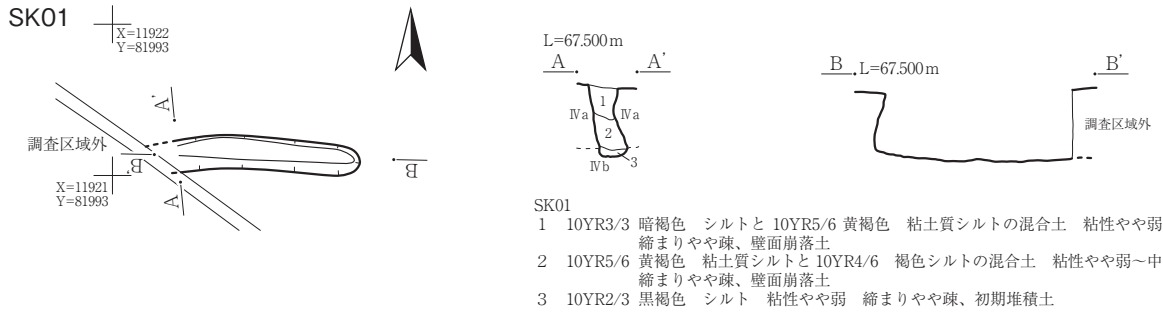
- SK32
- 1 10YR4/6 褐色 粘土 粘性強 縮まり密
 - 2 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 縮まり密
 - 3 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 縮まりやや密 10YR4/6 褐色土 5%含む
 - 4 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 縮まりやや疎 10YR4/6 褐色土 20%含む
 - 5 10YR5/8 黄褐色 粘土 粘性やや強 縮まり密
 - 6 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 縮まり中 10YR4/6 褐色土 3%・炭化物 1%含む



- SK33
- 1 10YR4/6 褐色 粘土 粘性強 縮まり密、地山起源の土



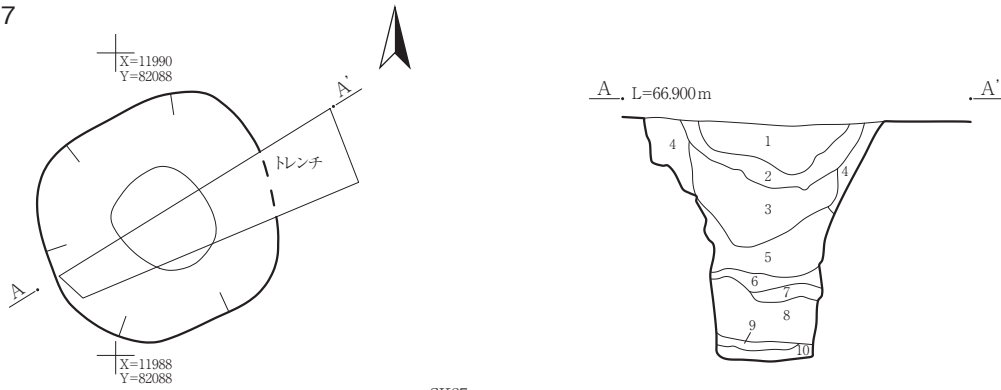
第25図 SK28・30・31・32・33 土坑



第26図 SK01・20・23 陥し穴状遺構

1 検出遺構

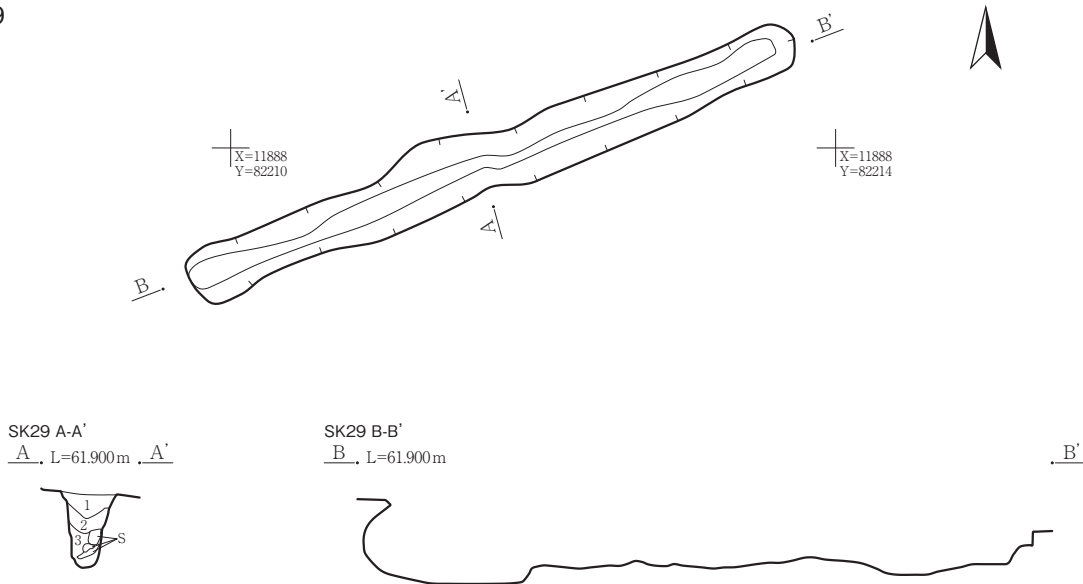
SK27



SK27

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山ブロック10%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色と 10YR3/1 黒褐色の混合シルト 粘性やや弱 締まり中 地山ブロック 20%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性中 締まり中 地山ブロック20%含む
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まり中 地山ブロック40%含む、崩落土
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎
- 6 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや疎 地山ブロック3%含む
- 7 10YR4/2 灰黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山ブロック5%含む
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや疎、地山由来の崩落土
- 9 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性やや強 締まりやや疎 地山ブロック5%含む
- 10 10YR6/4 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性強 締まり中、地山由来の崩落土

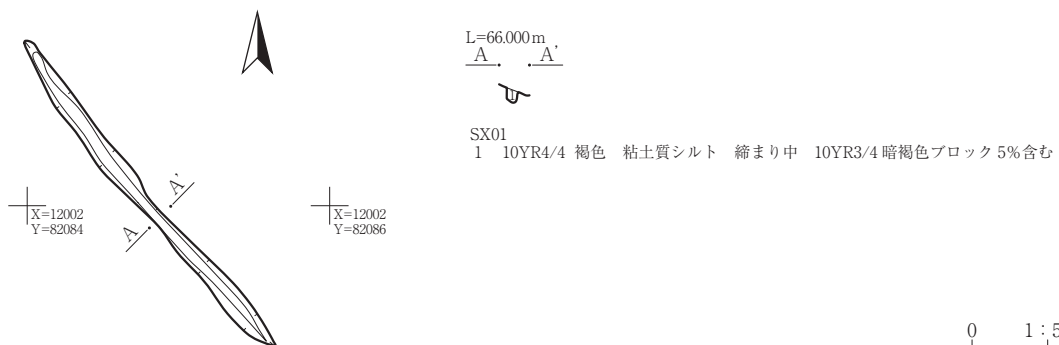
SK29



SK29

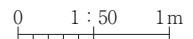
- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性なし 締まり中 10YR4/3 にぶい黄褐色 30%・10YR5/6 黄褐色土 3%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性なし 締まり中 褐色土 3%含む
- 3 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性なし 締まり中 φ10 cmの亜角礫含む

SX01



SX01

- 1 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 締まり中 10YR3/4 暗褐色ブロック 5%含む



第 27 図 SK27・29 陥し穴状遺構、SX01性格不明遺構

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製品、琥珀が出土した。総量は、大コンテナ換算4箱である。各遺物の重量、掲載遺物の出土地点・計測値などは、第13～25表を参照されたい。

(2) 縄文土器、弥生土器(第28～32図、写真図版21～24)

縄文土器は、37,780.5g出土した。42点掲載した。主体となる時期は、縄文時代前期末葉から中期前葉と推測する。弥生土器は、出土した1点(8.0g)を掲載した。

竪穴住居跡出土土器

S I 01：5点(11～15)掲載した。11は炉埋設土器として使用された深鉢胴部で、多軸絡条体が縦回転で施文されている。厚手で大型である。器形の外傾の度合いが高い。胎土には繊維を含む。12は床面直上出土の深鉢の口縁部破片で、太目の原体側面圧痕が施文される。中期か。

S I 02：1点(16)掲載した。口縁部破片で、口端が丁寧に整形され、LR横回転が施文される。

土坑出土土器

S K 03：2点(17・18)掲載した。深鉢の口縁部破片で、原体側面圧痕と刺突列が施文される。18の胴部文様は、単軸絡条体第1類が縦回転で施文される。胎土には砂粒・砂礫を含む。

S K 05：1点(19)掲載した。深鉢の胴部破片で、結束第1種横回転が施文される。

S K 06：2点(20・21)掲載した。20は、深鉢の胴部下位から底部で、結束第1種横回転が施文される。21は、口縁部に刺突列を施し、胴部に結束第1種横回転が施文される。

S K 07：8点(22～29)掲載した。22は底面直上から埋上下位、24～27は埋土中位・遺物2・3・4・5出土の深鉢である。文様は、主に口縁部に原体側面圧痕、胴部に結束第1種横回転が施文される。26は四単位の波状口縁で、口縁部と胴部の境が括れ、胴部上半が湾曲する球胴形深鉢類似の器形である。

S K 08：11点(30～40)掲載した。30～33は底面直上、34～38は埋土中位出土の深鉢である。主な施文内容は、口縁部に原体側面圧痕、胴部に結束第1種横回転が施文される。32の胴部文様は結束第2種横回転が施文される。37の胴部文様は、単軸絡条体第1A類縦回転が施文される。

S K 09：1点(41)掲載した。深鉢の口縁部破片で、口唇・口縁に原体側面圧痕が施文される。

S K 10：1点(42)掲載した。埋土中位出土の深鉢で、口縁部に原体側面圧痕、頸部に隆帯を貼付け、刺突を施す。胴部に結束第1種横回転が施文される。

S K 11：1点(43)掲載した。深鉢の口縁部破片で、単軸絡条体第1A類縦回転が施文される。

S K 13：1点(44)掲載した。埋土上位から出土した深鉢である。口唇部にLR横回転、口縁部に原体側面圧痕と刺突列、胴部に結束第1種横回転が施文される。外面上半部が黒みを帯びている。

S K 17：1点(45)掲載した。深鉢の胴部破片で、単軸絡条体第1A類縦回転が施文される。

S K 19：4点(46～49)掲載した。埋土中位の遺物46～48は、同一個体の波状口縁の深鉢破片で、口縁部に太めの原体による側面圧痕が施文され、頸部に隆帯が貼り付けられ、刺突が施される。

S K 27：1点(50)掲載した。深鉢の口縁部破片で、口唇と口縁部に原体側面圧痕が施文される。

遺構外

2点(51・52)掲載した。1区と4区から出土した小破片である。詳細は不明である。

弥生土器は、1区から1点(53)出土した。鉢の口縁部破片か、横位沈線が施文される。

(3) 土師器、須恵器(第32図、写真図版24)

土師器は375.1g出土した。2点掲載した。

S I 03：1点(54)掲載した。甕の口縁部破片で、内外面ともヨコナデ調整が施されている。下位で重複するS K 16出土として取り上げた破片と接合している。

S I 04：1点(55)掲載した。内面黒色処理された坏で、一段の稜を持ち、内外面ミガキ調整が施される。外面底部にはケズリの痕跡も残す。口縁から底部までであるが、残存率は1/4程度である。

須恵器は156.6g出土した。3点掲載した。

3点(56～58)の出土地点は、S I 03付近、S K 16埋土上位、10区T 3と異なるが、いずれもS I 03竪穴住居跡に伴う遺物であったと判断する。甕の胴部破片で、タタキ目痕がある。

(4) 石器、石製品(第33～37図、写真図版25～28)

石器は、87点登録した。掲載点数52点で、内訳は、石鏃10点(61～70)、尖頭器2点(71・72)、石錐3点(73～75)、石匙3点(76～78)、楔形石器6点(79～84)、不定形石器8点(85～92)、異形石器1点(93)、残核5点(94～98)、磨製石斧1点(99)、磨石1点(100)、敲石8点(101～108)、石錘1点(109)、礫器1点(110)、砥石1点(111)、台石1点(112)である。剥片類16点(R F 10点、U F 6点)、石核4点、原石8点、磨石1点、敲石4点、台石2点を不掲載とした。

器種ごとに特徴を記す。石鏃は有茎鏃が多い。尖頭器は扁平で、尖頭部を持ち、石鏃より大型である。石錐は剥片の端部を使用しており、使用頻度に拠るものか錐部が短い。石匙は、横型1点、縦型2点である。楔形石器は、相対する辺に一对もしくは二対の剥離痕が認められる。不定形石器は、剥片の一辺または二辺に刃部を形成している。異形石器は、細長い剥片の両端が加工されている。残核は剥片が剥ぎ取られた状態の礫で、表皮を残す。原石は割られる前の自然礫である。磨製石斧は刃部を欠く。磨石・敲石類は、両面にツルツルした質感の磨面、側縁にザラザラした質感の擦面・摺面(いわゆる断面三角形の側面を使用する特殊磨石における磨面)が幅を持って形成され、敲打痕などと併せて複数の使用痕を有するものが多い。形状が半円状扁平打製石器に類似する石器もあるが、側面に面的な使用痕が形成され、刃部は認められない。石錘は、扁平な礫の相対する辺に剥離による抉りをもつ。磨面があることから転用品か。砥石は欠損品である。台石は大型の扁平な礫の片面に磨面が形成されている。剥片石器は頁岩、次いでチャート、礫石器は花崗岩系の石材が多く用いられている。

石製品は、出土した3点を掲載した。113は細長い形状の破片で、石材から判断すると磨製石斧の破片か。114は周囲を打ち欠いた状態の円盤状石製品と判断したが、定かでない(註1)。石材は花崗閃緑岩である。115も細長い形状の破片で、石材から石剣類か。時期は、いずれも前期と推測する。

(5) 琥珀(写真図版28)

琥珀は総量24.7g出土した。5点(116～120)を写真掲載した。竪穴住居跡、土坑からの出土が多く、縄文時代前期末葉から中期前葉の時期と推測する。割れて細片となったものが多く、加工品は未確認である。表皮が残るものがあり、当遺跡に素材として原石が持ち込まれたと推測する。

註

- (1) 円盤状石製品は、力持遺跡に23点の出土事例(長さ2.2～9.6cm、厚さ0.8～2.1cm、重量12.4～127g)があり、花崗岩系の石材が約21%存在する。力持No.8695(CⅢi3土坑1号埋土下位出土、縄文時代、径5.9×6.2cm、厚さ2.1cm、重量125.0g、石質：花崗閃緑岩、山地：北上山地)は、平清水Ⅱ遺跡114と大きさ、形状、成形手法が類似する石製品である。

第13表 土器重量表

出土地点	重量 (g)			
	縄文	弥生	土師器	須恵器
SI01	6,386.5			
SI01の南側	10.2			
SI02	45.9			
SI03	186.4		81.0	
SI03付近				45.2
SI04	3.3		116.4	
SK02	201.7			
SK03	1,391.2			
SK04	24.6			
SK05	70.5			
SK06	657.6			
SK07	6,463.5			
SK08	7,594.0			
SK09	94.3			
SK10	1,764.9			
SK11	214.0			
SK13	4,007.9			
SK15	98.7		31.0	
SK16			117.9	43.1
SK17	40.5			
SK19	1,295.5			
SK20	47.6			
SK22	24.1			
SK24	23.9			
SK26	38.9			
SK27	53.6			
SK32	3.6			
SK-	73.5			
1区	14.7	8.0		
1区T	8.6			
4区北側	14.2			
4区湧水地区	4.7			
8区	1.5			
8区-1	41.0			
8区-3	32.1		8.4	
9区T1	17.9			
9区T10	9.0			
9区T12			17.0	
9区T14	4.6			
10区	179.7			
10区-1	522.8			
10区-2	497.7			
10区-2・3	10.4			
10区-3	955.0			
10区T1	859.5			
10区T2	5.9			
10区T3	230.8			37.4
10区T4	69.2			30.9
10区T6	1,070.6			
10区T7	55.9			
10区T8	13.2			
10区T9	17.3			
10区T10	134.4			
10区T11	35.7			
10区T12	95.5			
10区T16	107.5			
10区T17	103.1			
10区T18	249.0			
10区T19	172.0			

出土地点	重量 (g)			
	縄文	弥生	土師器	須恵器
10区T20	14.1			
10区T21	49.8			
10区T22	103.5			
10区T23	32.2			
10区T24	138.3			
10区北側	1,066.2			
10区北側 (T1周辺)	11.3			
11区	15.2			
不明			3.4	
小計	37,780.5	8.0	375.1	156.6

第14表 剥片重量表

出土地点	重量 (g)
	剥片
SI01	954.5
SI02	83.2
SI03	8.6
SK02	12.8
SK03	72.1
SK05	0.9
SK06	17.6
SK09	30.0
SK10	13.5
SK11	5.3
SK13	8.1
SK19	242.7
SK20	0.9
SK21	1.7
SK22	10.9
SK26	0.8
SK32	7.2
8区-1・2	13.7
9区T1	49.9
9区T4	16.6
10区	33.7
10区-1	18.0
10区-2	31.8
10区-2・3	5.9
10区-3	67.9
10区T1	157.4
10区T2	29.0
10区T3	5.6
10区T4	2.3
10区T5	13.0
10区T6	166.9
10区T7	39.2
10区T10	19.4
10区T11	3.4
10区T16	5.0
10区T18	15.1
10区T19	1.9
10区T21	4.9
10区T22	22.9
10区北側 (T1周辺)	14.3
不明	1.2
小計	2,209.8

第15表 琥珀重量表

出土地点	重量 (g)
	琥珀
SI01	5.3
SI02	2.5
SK03	3.7
SK06	0.1
SK07	1.3
SK09	0.2
SK10	2.0
SK13	0.1
10区T1	2.3
10区T6	0.4
10区T16	0.2
10区T21	5.1
10区T23	0.3
10区-1	0.2
10区-2	0.2
10区-3	0.8
小計	24.7

第16表 炭化材重量表

出土地点	重量 (g)
	炭化物
SI01	4.7
SI02	2.6
SI04	28.3
SK03	1.5
SK05	4.6
SK06	5.2
SK07	13.8
SK08	28.5
SK09	4.6
SK10	2.0
SK13	3.7
SK16	2.3
SK19	4.1
SK25	35.5
SK27	0.9
10区T21	0.5
10区T22	0.7
小計	143.5

第 17 表 縄文土器観察表

(数値)：残存値、[数値]：推定値

掲載 No.	出土地点	層位	器種	部位	装の付着	内面調整	胎土	色調	文様の特徴	計測値 (cm)		時期	備考	図版 No.	写真 No.	
										口径	器高					
11	S101	灰埋設土器・東半埋土	深鉢	胴	無	M?	3A	7.5YR6/8 橙褐色	胴：多軸絡、軸 5 本? RL? 縦	—	(26.7)	—	—	28	21	
12	S101	床面直上 遺物 1	深鉢	口縁	無	M	2	10YR6/2 灰黄褐色	口縁：原体側圧 LR、頸：粘土網貼付 + 原体側圧 RLR	—	—	—	—	28	21	
13	S101	ベルト A-A' 3 層	深鉢	口縁	無	N	3	7.5YR6/4 にぶい橙褐色	口縁：原体側圧 R、口唇：刺突列、胴：RL 横?	—	—	—	—	28	21	
14	S101	西半埋土下位	深鉢	底	無	N?	B	10YR5/2 灰黄褐色	胴：LRL 縦?、底面：ナデ?	—	(3.4)	[9.5]	—	28	21	
15	S101	東半埋土	深鉢	口縁	無	M	B	10YR7/4 にぶい黄褐色	口縁：原体側圧 LR、結条体圧 R、頸：隆帯 + 原体側圧、胴：結束 1 横?	—	—	—	—	28	21	
16	S102	P20 埋土	深鉢	口縁	無	M	3	10YR5/3 にぶい黄褐色	口縁～：RLR 縦?	—	—	—	—	28	21	
17	SK03	南半埋土上位	深鉢	口縁	無	N?	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	口縁：原体側圧 RL、刺突列、胴：RL 横	—	—	—	—	28	21	
18	SK05	埋土下位	深鉢	口縁	無	N	1	10YR6/4 にぶい橙褐色	口縁：突起あり、原体側圧 L、刺突列、胴：刺突列、単軸絡第 1 類 L 縦	—	—	—	—	28	21	
19	SK03	埋土下位	深鉢	胴	無	M	1	10YR6/3 にぶい黄褐色	胴：結束 1RL+L 横	—	—	—	—	28	21	
20	SK06	9 層	深鉢	胴下半～底	内外	M	1A	7.5YR5/2 灰褐色	胴：結束 1 横、LR+ 附加条と RL+ 附加条、底面：ミガキ	—	(6.2)	5.2	—	28	21	
21	SK06	埋土下位	深鉢	口縁	無	—	3	7.5YR6/6 橙褐色	口縁：刺突列、胴：結束 1RL+L 横	—	—	—	—	28	21	
22	SK07	11 層、底面直上	深鉢	口縁	無	M	3B	10YR6/3 にぶい黄褐色	口縁：刺突列、胴：結束 1RL 付加条 + LR 付加条横	—	—	—	—	28	21	
23	SK07	7 層	深鉢	口縁	無	M	B	7.5YR6/6 橙褐色	4 波状?、口唇：原体側圧 LR、胴：結束 1LR+RL 横	—	—	—	—	28	21	
24	SK07	埋土中位 遺物 2	深鉢	口縁	内外	M	1	10YR5/2 灰黄褐色	4 波状、口縁：原体側圧 L、文様 4 単位、胴：単軸絡第 1A 類 R+L 縦	—	—	—	—	29	21	
25	SK07	埋土中位 遺物 3	深鉢	口縁～底	内外	—	4	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	平縁、口唇：原体側圧 L、口縁：原体側圧 L 付加条 + RL 付加条横、底面：ミガキ?	[15.0]	19.2	8.4	—	29	22	
26	SK07	埋土中位 遺物 4	深鉢	口縁～底	外	M	2	10YR6/6 明黄褐色	4 波状、口唇：原体側圧 LR、口縁：原体側圧 LR、頸：隆帯貼付 + 刺突、胴：結束 1LR+RL 横、底面：ナデ	21.4	25.4	12.9	—	29	22	
27	SK07	埋土中位 遺物 5	深鉢	口縁～胴	外	M	B	10YR6/4 にぶい黄褐色	平縁、口唇：原体側圧 RL、胴：結束 1RL+L 横	[18.8]	(23.0)	—	—	29	22	
28	SK07	南半埋土	深鉢	口縁	内	N?	3B	7.5YR6/4 にぶい橙褐色	口縁：刺突列、胴：L 横	—	—	—	—	29	22	
29	SK07	埋土	深鉢	口縁	無	M	3B	10YR5/2 灰黄褐色	口唇：R 横、口縁：原体側圧 R、結節 R 横、胴：単軸絡第 1A 類 縦?	—	—	—	—	29	22	
30	SK08	底面直上 遺物 3	深鉢	口縁	内外	M	3B	7.5YR6/6 橙褐色	4 波状?、口縁：原体側圧 L、頸：隆帯 + 刺突列、胴：結束 1LR+RL 横、結節横	—	—	—	—	30	22	
31	SK08	22 層、底面直上 遺物 4	深鉢	口縁～胴	内	N?	3	10YR6/3 にぶい黄褐色	平縁、口縁：原体側圧 RL、口縁文様帯の幅 1.5cm、胴：結束 1RL+L 横、底面：ナデ	10.0	14.3	7.2	—	30	22	
32	SK08	17 層、埋土、底面直上 遺物 5	深鉢	口縁～胴	内外	N?	3B	5YR6/8 橙褐色	平縁、口唇：LR 横?、胴：結束 2LR+RL 横	10.0	17.0	[9.6]	—	30	22	
33	SK08	22 層、底面直上	深鉢	口縁～底	外	M	3	10YR7/6 明黄褐色	平縁、口唇：LR 横位? 口縁：原体側圧 RL、結節横文 RL、頸：隆帯貼付 + 原体側圧 RL、胴：結束 1LR 付加条横、底面：ミガキ	16.4	24.7	12.4	—	30	23	
34	SK08	17 層、埋土	深鉢	口縁～底	外	—	3B	10YR7/4 にぶい黄褐色	平縁、口唇：刺突列 3 段横、原体側圧、口縁～胴：結束 1RL+L 横、底面：ミガキ	[11.1]	19.2	8.8	—	30	23	
35	SK08	17 層	深鉢	口縁	内外	M	B	7.5YR5/3 にぶい褐色	4 波状?、口縁：原体側圧 LR、頸：隆帯 + 刺突列、胴：結束 1LR+RL 横	—	—	—	—	30	23	
36	SK08	17 層	深鉢	底	内	—	3B	2.5YR6/8 橙褐色	胴：LR 横?、底面：ナデ	—	(1.9)	8.0	—	30	23	
37	SK08	埋土下位	深鉢	口縁～底	外	M	3	10YR7/6 明黄褐色	平縁、口唇：LR 横位、口縁：結束 1、胴：単軸絡第 1A 類 L 縦、底面：ミガキ	22.7	27.2	12.0	—	31	23	
38	SK08	11・12・22 層、埋土中位 遺物 1・2・4・5	深鉢	口縁～胴	内?	—	3	10YR6/3 にぶい黄褐色	平縁、口唇：原体側圧 LR、胴：結束 1RL+L 横、底面：ミガキ?	13.5	20.3	8.5	—	30	23	
39	SK08	埋土	深鉢	口縁	外	M	1B	10YR3/3 暗褐色	口唇：L 横、口縁：原体側圧 RL、胴：LR+ 結節 (Z) 横	—	—	—	—	30	23	
40	SK08	埋土	深鉢	口縁	無	M	B	7.5YR6/4 にぶい橙褐色	波状、口縁：結条体圧 R、頸：隆帯貼付 + 原体側圧 L、胴：結束 1RL+L 横	—	—	—	—	30	23	
41	SK09	埋土	深鉢	口縁	無	N?	1	10YR7/3 にぶい黄褐色	口唇：原体側圧 LR、口縁：原体側圧 RL	—	—	—	—	31	23	
42	SK10	埋土中位 遺物 2	深鉢	口縁～底	外	M?	1B	10YR5/3 にぶい黄褐色	平縁、口縁：原体側圧 LR、頸：隆帯貼付 + 刺突、胴：結束 1LR 付加条 + RL 付加条横、底面：ミガキ	[19.8]	27.5	10.0	—	31	23	
43	SK11	東半埋土中位～下位	深鉢	口縁	無	N	B	7.5YR5/4 にぶい褐色	口唇～単軸絡第 1A 類 R+L 縦?	—	—	—	—	31	24	
44	SK13	西半埋土上位、遺物 1	深鉢	口縁～胴	無	M	2B	10YR6/4 にぶい黄褐色	平縁、口唇：RL 横、口縁：原体側圧 LR、刺突列 (四単位)、胴：結束 1RL+L 横、底面：ミガキ	[25.8]	36.2	14.8	—	32	24	
45	SK17	南半埋土下位	深鉢	胴	無	M	1B	7.5YR4/2 灰黄褐色	胴：単軸絡第 1A 類 L 縦	—	—	—	—	31	24	
46	SK19	埋土中位 遺物 1	深鉢	口縁	無	M	2	7.5YR6/4 にぶい橙褐色	口縁：原体側圧 L、頸：隆帯貼付 + 刺突列、胴：LR 横	—	—	—	—	No. 46～48 同一個体	31	24

掲載No.	出土地点	層位	器種	部位	煤の付着	内面調整	胎土	色調	文様の特徴		計測値 (cm)		時期	備考	図版No.	写真No.
									口縁	器高	口径	底径				
47	SK19	埋土中位 遺物 2	深鉢	口縁	無	M	2	7.5YR7/4 にぶい橙色	波状、口縁：原体側圧上、頸：隆帯貼付 + 刺突列、胴：LR 横	—	—	—	中期	No. 46 ~ 48 同一個体	31	24
48	SK19	埋土中位 遺物 3	深鉢	口縁	無	M	2	7.5YR7/4 にぶい橙色	波状、口縁：原体側圧上	—	—	—	中期	No. 46 ~ 48 同一個体	31	24
49	SK19	埋土上位	深鉢	底	無	M	1	10YR7/4 にぶい黄橙色	胴：LR 横、底面：ミガキ	(2.2)	(7.0)	—	中期?		31	24
50	SK27	埋土上位	深鉢	口縁	無	M	3B	7.5YR5/3 にぶい褐色	口縁：原体側圧LR、口縁：原体側圧LR、刺突列、胴：LR 横?	—	—	—	前期		32	24
51	1区	黒褐色土	深鉢	胴	内	N?	3B?	7.5YR6/4 にぶい褐色	胴：LRL 横?	—	—	—	前期		32	24
52	4区 北側	湧水の黒褐色土	深鉢	胴	無	N	3?	7.5YR7/4 にぶい橙色	胴：LR 横?	—	—	—	中期	磨滅	32	24

第18表 弥生土器観察表

掲載No.	出土地点	層位	器種	部位	煤の付着	内面調整	胎土	色調	文様の特徴		計測値 (cm)		時期	備考	図版No.	写真No.
									口径	器高	口径	底径				
53	1区	排土中	鉢?	胴	無	N?	1	5YR6/6 橙色	口：横位沈線、胴：LR 横	—	—	—	前期		32	24

(数値)：残存値、[数値]：推定値

第19表 土師器観察表

掲載No.	出土地点	層位	器種	部位	胎土	色調	文様・調整技法		底部	計測値 (cm)		時期	備考	図版No.	写真No.
							外面 (口縁部・胴部)	内面 (口縁部・胴部)		口径	器高				
54	S103	床面直上	甕	口縁	2	10YR7/6 明黄褐色	口：横ナデ	口：横ナデ、ヘラナデ	—	—	—	10c 前半?		32	24
55	S104	床面直上 (2層) 遺物 1	坏	口縁~底 1/4	2	10YR7/6 明黄褐色	ミガキ	ケズリ→ミガキ	(15.2)	6.5	—	(8c 中葉) (字部 4 A 期)	丸底・腕に近い、器形・頸部外側に段有り	32	24

(数値)：残存値、[数値]：推定値

第20表 須恵器観察表

掲載No.	出土地点	層位	器種	部位	胎土	色調	計測値 (cm)		文様・調整技法		時期	備考	図版No.	写真No.
							口径	器高	外面 (口縁部・胴部)	内面 (口縁部・胴部)				
56	S103 付近	表土	甕	胴	2	10YR7/1 灰白色	—	—	胴：タタキ目	—	—	No. 56, 58 同一個体?	32	24
57	SK16	埋土上位	甕	胴	2	10YR6/1 褐灰色	—	—	胴：タタキ目	—	—		32	24
58	10区 T3	表土	甕	胴	2	10YR7/1 灰白色	—	—	胴：タタキ目	—	—	No. 56, 58 同一個体?	32	24

(数値)：残存値、[数値]：推定値

縄文土器観察表の凡例

項目	表記	内容
内面調整	M	ミガキ
	N	ナデ
	不明	不明
	胎土	胎土
胎土	1	砂粒を含む
	2	細礫・砂粒を含む
	3	細礫を含む
	4	細礫を多量に含む
施文の順番	旧→新	
	内	内面コゲ
煤の付着	外	外面スス
	無	付着無し
スス・コゲ	A	繊維を少量含む
	B	繊維を含む

2 出土遺物

第21表 石器観察表

(数値)：残存値

掲載No	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	石材	時代・産地	備考	図版No	写図No
61	SK07	南半埋土	石鏃	(22.5)	15.3	6.0	2.57	平基無茎鏃	チャート	1	尖頭部欠損	33	25
62	SK11	東半埋土中位~下位	石鏃	27.8	14.0	4.1	1.4	円基鏃	頁岩	1		33	25
63	SK19	埋土上位	石鏃	(43.5)	18.7	6.5	3.6	凸基有茎鏃	頁岩	1	基部欠損	33	25
64	SK19	埋土上位	石鏃	(32.0)	16.9	6.0	3.0	凸基有茎鏃	頁岩	1	尖頭部・基部欠損	33	25
65	8区-3	II層	石鏃	(24.6)	17.1	4.8	1.7	凸基有茎鏃	凝灰岩	1	基部欠損	33	25
66	10区-1	III層上面	石鏃	46.6	(18.3)	5.5	3.4	平基無茎鏃	チャート	1	基部欠損	33	25
67	10区-3	黒褐色土層	石鏃	(27.0)	(14.0)	4.3	1.0	凹基無茎鏃	頁岩	1	基部欠損	33	25
68	10区T1	盛土	石鏃	(27.0)	16.3	4.9	1.4	凸基有茎鏃	頁岩	1	基部欠損	33	25
69	10区T1	盛土	石鏃	23.1	13.6	4.0	0.9	凸基有茎鏃	凝灰岩	1		33	25
70	10区T5	表土	石鏃	(32.7)	16.2	5.4	2.7	円基鏃	頁岩	1	尖頭部欠損	33	25
71	SI01	西半埋土下位	尖頭器	(51.3)	28.6	8.4	10.1	両面周縁加工	チャート	1	基部欠損	33	25
72	SK19	埋土上位	尖頭器	41.1	24.5	11.1	9.3	両面周縁加工	頁岩	1		33	25
73	SI01	東半埋土	石錐	34.0	14.0	5.4	2.5	摘み無、剥片の端部	頁岩	1		33	25
74	10区-1	地山検出面	石錐	23.3	10.0	4.4	0.8	摘み無、剥片の端部	頁岩	1		33	25
75	10区T1	盛土	石錐	35.2	14.2	3.5	1.3	摘み無、剥片の端部	頁岩	1		33	25
76	SK02	南半埋土下位	石匙	38.4	43.0	7.2	11.2	横型、両面周縁加工	頁岩	1		33	25
77	SK06	12層	石匙	55.7	26.8	9.5	11.0	縦型、片面周縁加工	頁岩	1		33	25
78	SK25	埋土下位	石匙	(45.3)	17.7	2.1	8.6	縦型、両面周縁加工	チャート	1	刃部欠損	33	25
79	SI01-P1	南半埋土	楔形石器	38.7	27.0	17.9	133	四辺二対の剥離	チャート	1		33	25
80	SI01	東半埋土	楔形石器	35.8	25.9	6.7	4.4	二辺一対の剥離	頁岩	1		33	25
81	SI02	埋土	楔形石器	44.5	26.7	10.0	12.3	二辺一対の剥離	珪質頁岩	1		33	25
82	SK19	埋土下位	楔形石器	37.5	28.8	7.9	7.6	二辺一対の剥離	安山岩	3		33	25
83	10区北側(T1周辺)	地山検出面	楔形石器	31.0	26.2	10.6	9.4	二辺一対の剥離	頁岩	1		33	25
84	10区T1	盛土	楔形石器	39.8	25.0	11.5	11.0	二辺一対の剥離	頁岩	1		33	25
85	SI01	ベルトA-A'3層	不定形石器	55.1	30.5	16.3	21.9	片面(腹面)一側縁加工	頁岩	1		34	25
86	SI01	ベルトA-A'3層	不定形石器	31.4	12.3	3.4	1.1	片面一側縁加工	頁岩	1		34	25
87	SI01	東半埋土	不定形石器	56.0	55.1	21.4	36.8	両面一側縁加工	頁岩	1		34	25
88	SI03	4層	不定形石器?	32.6	23.8	10.6	6.9	片面急斜度調整?	頁岩	1		34	25
89	SK03	25層	不定形石器	58.7	47.7	12.0	24.1	片面一側縁加工	チャート	1		34	25
90	SK10	埋土中位	不定形石器	54.6	30.1	9.5	15.9	片面一側縁加工	チャート	1		34	25
91	10区T1	表土	不定形石器	65.7	29.7	17.3	27.6	片面一側縁加工	チャート	1		34	25
92	10区T1	盛土	不定形石器	38.1	46.0	11.2	15.8	片面ノッチ	頁岩	1		34	25
93	10区T5	表土	異形石器	45.2	16.5	7.0	4.2	両面端部加工	チャート	1		34	25
94	SI02-P44	埋土	残核	43.4	36.5	16.0	27.9	表皮有、打面2	凝灰岩	4		34	26
95	SI03	4層	残核	40.1	20.5	17.1	15.9	表皮有、打面2	チャート	1		34	26
96	SI03	2層	残核	58.3	30.0	19.4	27.3	表皮有、打面1	頁岩	1		34	26
97	SI03	埋土下位	残核	65.4	58.4	24.0	103.4	表皮有、打面1	チャート	1		34	26
98	SK03	埋土	残核	63.7	49.9	27.1	97.2	表皮有、打面1	凝灰岩	1		34	26
99	SK13	西半埋土上位S7	磨製石斧	(145.8)	60.4	40.8	585.1	基部	細粒花崗閃緑岩	3	刃部欠損	35	26
100	SK03	埋土	磨石	87.2	81.7	53.5	510.3	両面磨面、片面窪み	砂岩	1		35	26
101	SI02	床面直上遺物1	敲石	86.4	79.7	53.8	538.4	円形、周縁敲打痕	ヒン岩(花崗閃緑斑岩)	3		35	26
102	SK06	底面直上	敲石	129.6	70.5	32.8	432.2	板状、一端一側縁敲打痕	砂岩	1		35	26
103	SK06	13層	敲石	140.3	79.3	32.7	584.7	板状、両端剥離痕、一側縁敲打痕	ホルンフェルス	2		36	27
104	SK13	西半埋土下位	敲石	96.1	63.3	26.0	233.2	板状、周縁敲打痕	花崗斑岩	3		36	27
105	SK15	埋土中位	敲石	122.2	93.0	55.7	899.4	板状、一側縁敲打痕	花崗閃緑岩	3		36	27
106	SK24	底面直上	敲石	(79.3)	67.6	34.8	339.4	板状、周縁敲打痕	細粒花崗閃緑岩	3		36	27
107	10区T10	漸移層?暗褐色土	敲石	135.8	69.3	35.1	632.1	板状、両端剥離痕、一側縁敲打痕	細粒花崗閃緑岩	3		36	27
108	10区-2・3	盛土	敲石	124.6	62.0	29.3	369.5	板状、一端敲打痕、剥離痕	ホルンフェルス	2		36	27
109	SI02	床面直上	石錘?	66.8	65.3	21.0	157.1	円形、両端剥離痕	ホルンフェルス	2		37	28
110	SK02	北半埋土3層	礫器	118.2	83.1	62.1	701.0	表皮有、片面一側縁加工	頁岩	1		37	28
111	SK16	埋土上位	砥石	(83.3)	49.5	44.5	221.9	棒状、溝あり	凝灰岩	4		37	28
112	SK07	11層	台石	200.5	131.5	62.5	2961.3	亜角礫、片面	花崗岩(細粒)	3		37	28

第22表 石製品観察表

(数値)：残存値

石器観察表の凡例

掲載No	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	分類	石材	時代・産地	備考	図版No	写図No	表記	時代	産地
113	SI01	西半埋土	磨製石斧ミニチュア?	(28.8)	23.7	9.1	20.4	—	頁岩	1		37	28	1	中生代三畳紀~ジュラ紀	北上山地
114	SK13	2層	石製円盤?	41.1	45.3	13.3	34.2	—	花崗閃緑岩	3		37	28	2	中生代(変成は中生代白亜紀)	北上山地
115	SK19	埋土上位	石刀?	(60.3)	15.7	5.1	9.0	—	頁岩	1		37	28	3	中生代白亜紀	北上山地
														4	中生代白亜紀~新生代古第三紀	久慈層群・野田層群

第23表 琥珀観察表

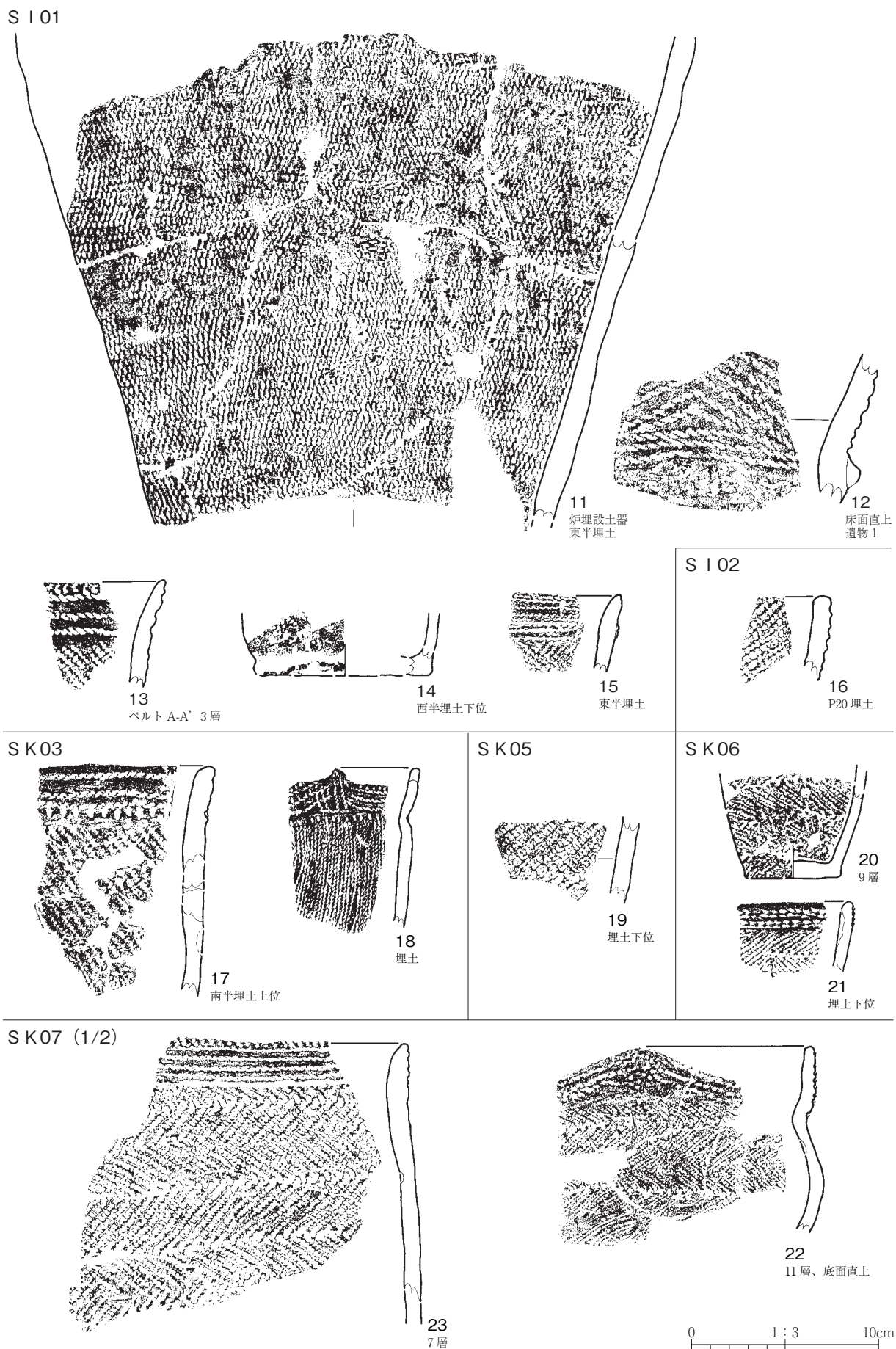
掲載No.	出土地点	層位	重量 (g)	備考	写真No.
	SI01	西半埋土下位	2.5		
116	SI01	西半埋土	2.1		28
	SI01	ベルト埋土下位	0.1		
	SI01	ベルト A-A' 3層	0.5		
	SI01	埋土下位焼土1周辺	0.1		
117	SI02	床面直上遺物2	2.5		28
	SK03	南半埋土上位褐色土	1.0		
118	SK03	南半埋土下位	2.0		28
	SK03	北半埋土6層	0.6		
	SK03	北半埋土17層	0.1		
	SK06	12層	0.1		
119	SK07	埋土	1.2		28
	SK07	7層	0.1		
	SK09	埋土	0.2		
120	SK10	埋土中位	1.2		28
	SK10	埋土下位	0.8		
	SK13	西半埋土上位遺物1土器内の土	0.1		
	10区 T1	盛土	1.0		
	10区 T1	周辺地山検出面	1.3		
	10区 T6	盛土	0.4		
	10区 T16	地山検出面	0.2		
	10区 T21	地山検出面	5.1		
	10区 T23	地山検出面	0.3		
	10区-1	地山検出面	0.2		
	10区-2	地山検出面	0.2		
	10区-3	黒褐色土層	0.8		

第24表 炭化材観察表

出土地点	層位	重量 (g)	備考
SI01	炉(埋設炉)焼土(土器外側)	0.2	
SI01	炉内の土1層	4.1	¹⁴ C分析試料1
SI01	炉内の土2層	0.4	
SI02	焼土	1.0	
SI02-P4	埋土	1.2	
SI02-P6	埋土	0.4	
SI04	床面直上(2層)C2	3.4	
SI04	床面直上(2層)C3	4.2	
SI04	床面直上(2層)C4	1.4	
SI04	床面直上(2層)焼土ブロック	4.8	
SI04	床面直上(2層)C1	14.5	
SK03	底面直上	1.5	
SK05	南埋土下位にぶい褐色土	2.9	
SK05	底面直上	1.7	
SK06	底面直上	0.8	
SK06	9層土器底部内の土	1.6	
SK06	12層	1.3	
SK06	13層	1.5	
SK07	埋土上部	2.8	
SK07	7層	1.3	
SK07	8層	5.7	
SK07	11層	4.0	
SK08	埋土上部	1.0	
SK08	6層	2.1	
SK08	17層	20.0	
SK08	22層	4.7	¹⁴ C分析試料2
SK08	床面直上遺物2(一括)	0.7	土器口縁部内側にへばり付いた土より採取した炭
SK09	埋土	4.6	
SK10	埋土中位遺物1(2かもしれない)	0.6	土器中部の土から出た炭化物
SK10	底面直上	0.5	¹⁴ C分析試料3
SK10	埋土中位	0.4	
SK10	埋土下位	0.5	
SK13	西半埋土上位遺物1土器内の土	1.6	
SK13	2層	0.6	
SK13	6層	1.5	
SK16	埋土	2.3	
SK19	埋土下位	4.1	
SK25	埋土下位	6.6	
SK25	底面直上	28.9	
SK27	底面直上	0.9	¹⁴ C分析試料4
10区 T21	地山検出面	0.5	
10区 T22	地山検出面	0.7	種子?

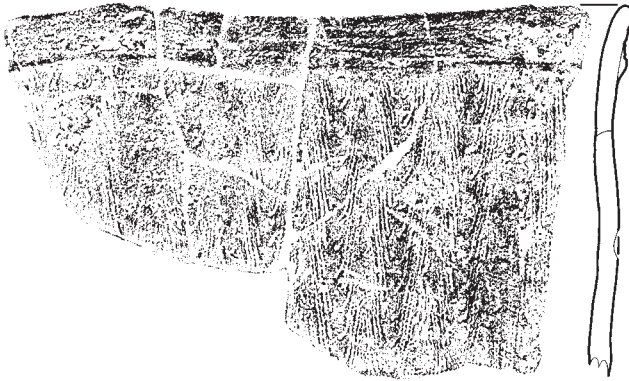
第25表 掲載遺物一覧表

出土地点	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	石器	石製品	琥珀
SI01	11~15				71(尖頭器)、73(石錐)、79・80(楔形石器)、85~87(不定形石器)	113(磨製石斧ミニチュア?)	116
SI02	16				81(楔形石器)、94(残核)、101(敲石)、109(石鏃)		117
SI03				56	88(不定形石器)、95~97(残核)		
SI04			54				
SK02					76(石匙)、110(礫器)		
SK03	17・18				89(不定形石器)、98(残核)、100(磨石)		118
SK05	19						
SK06	20・21				77(石匙)、102・103(敲石)		
SK07	22~29				61(石鏃)、112(台石)		119
SK08	30~40						
SK09	41						
SK10	42				90(不定形石器)		120
SK11	43				62(石鏃)		
SK13	44				99(磨製石斧)、104(敲石)	114(石製円盤?)	
SK15					105(敲石)		
SK16				57	111(砥石)		
SK17	45						
SK19	46~49				63・64(石鏃)、72(尖頭器)、82(楔形石器)	115(石刀?)	
SK24					106(敲石)		
SK25					78(石匙)		
SK27	50						
1区	51	53					
4区	52						
8区					65(石鏃)		
10区				58	66~70(石鏃)、74・75(石錐)、83・84(楔形石器)、91・92(不定形石器)、93(異形石器)、107・108(敲石)		

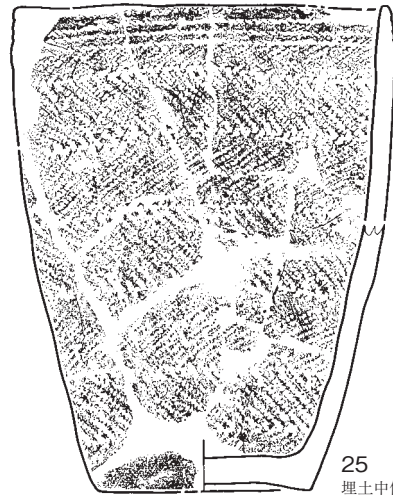


第 28 図 縄文土器 (1)

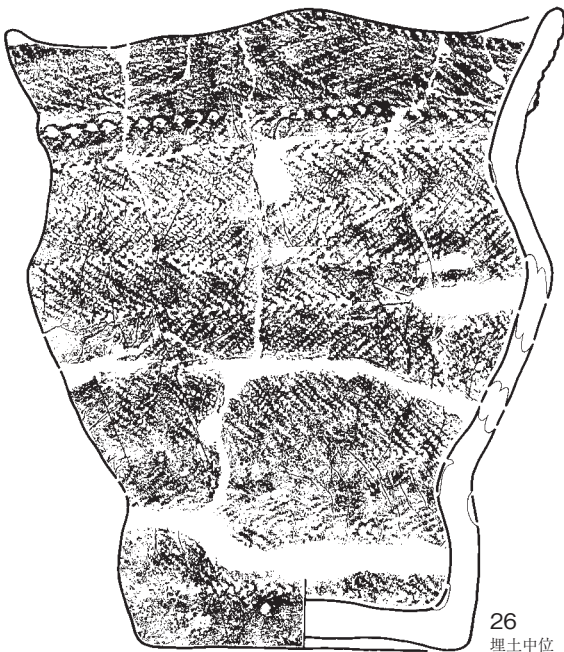
S K07 (2/2)



24
埋土中位
遺物 2



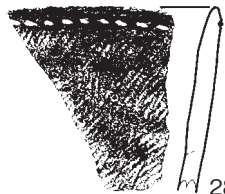
25
埋土中位
遺物 3



26
埋土中位
遺物 4



27
埋土中位
遺物 5



28
南半埋土

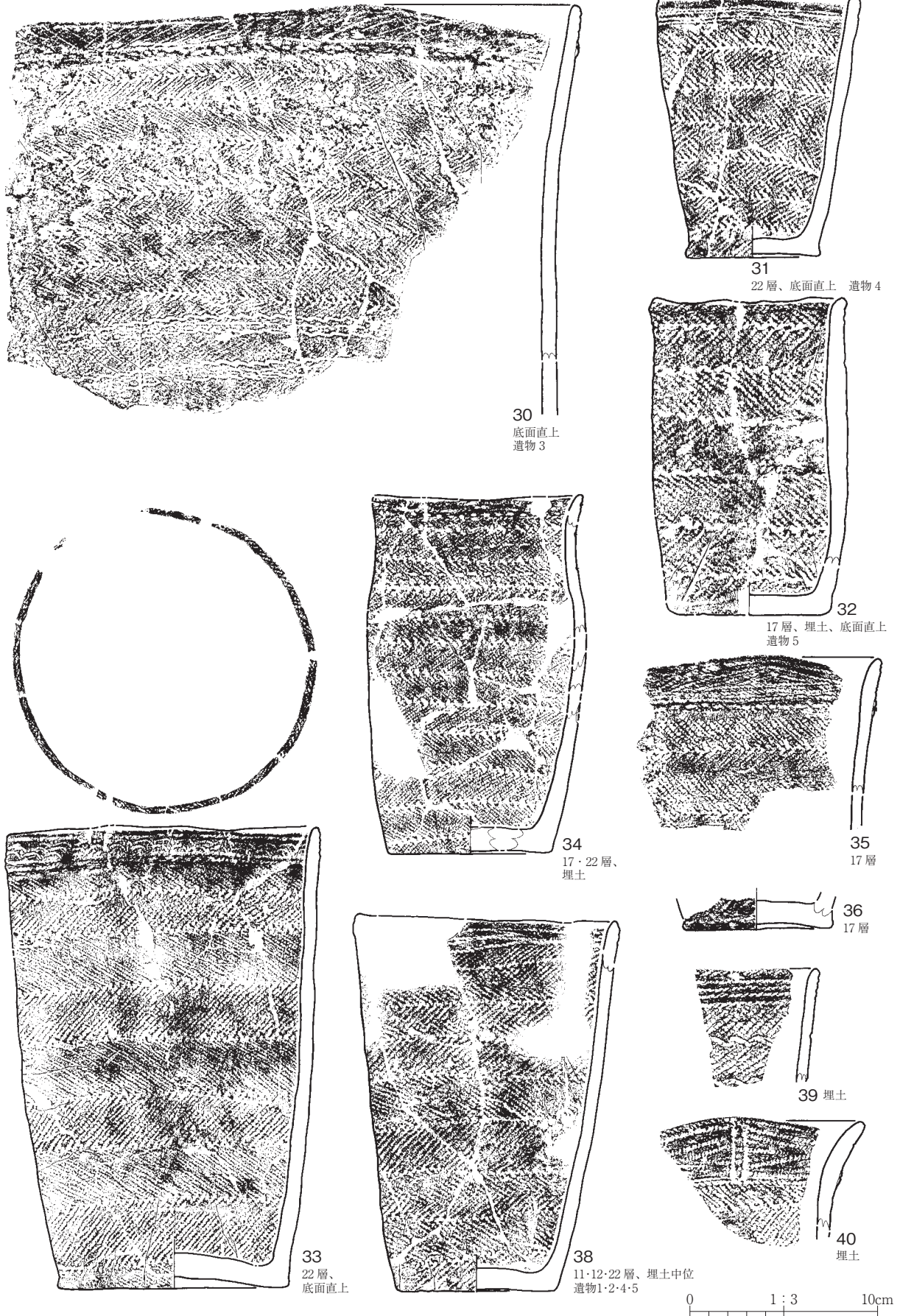


29 埋土

0 1:3 10cm

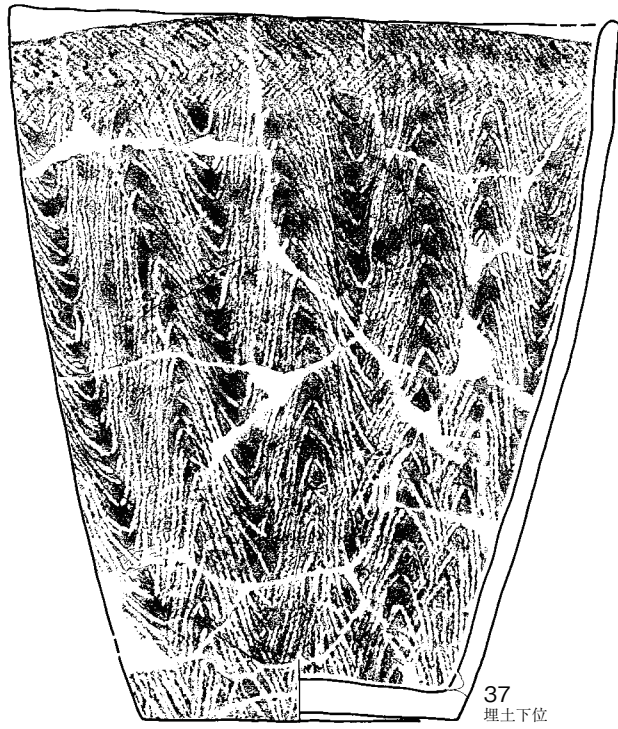
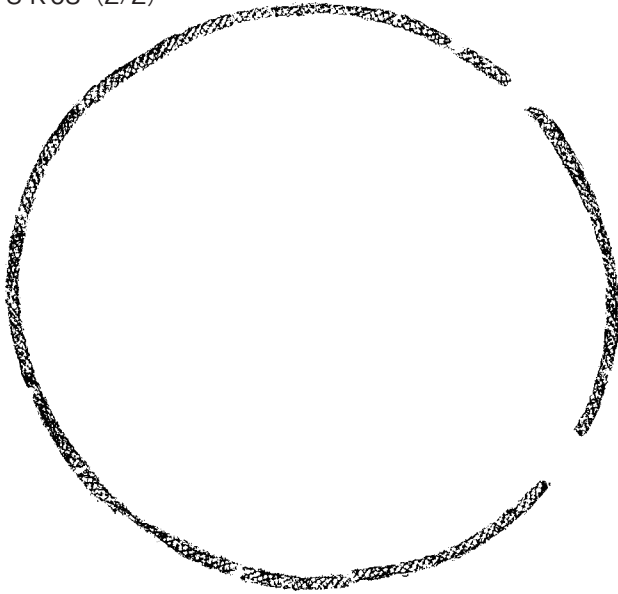
第 29 図 縄文土器 (2)

SK08 (1/2)



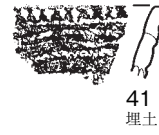
第30図 縄文土器(3)

S K 08 (2/2)



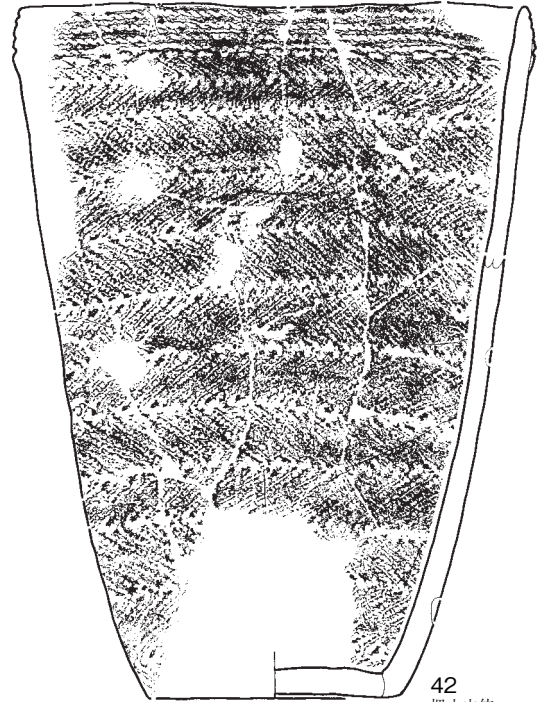
37
埋土下位

S K 09



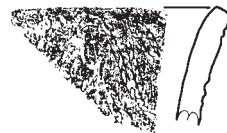
41
埋土

S K 10



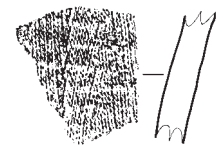
42
埋土中位
遺物 2

S K 11



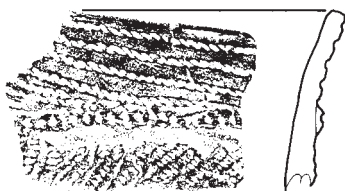
43
東半埋土
中位~下位

S K 17



45
南半埋土下位

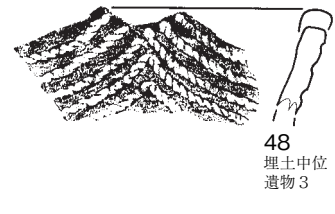
S K 19



46
埋土中位
遺物 1



47
埋土中位
遺物 2



48
埋土中位
遺物 3

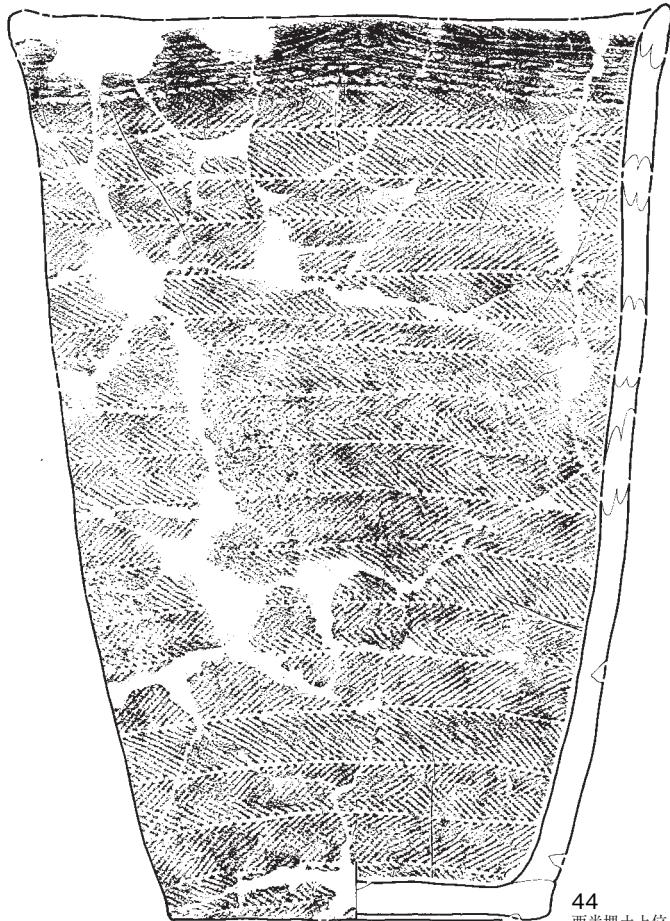


49
埋土上位

0 1:3 10cm

第 31 図 縄文土器 (4)

SK13



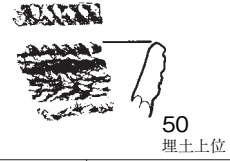
44
西半埋土上位
遺物1

S I 03・SK16



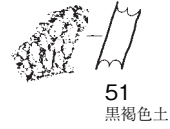
54
床面直上 (S I 03)
埋土上位 (SK16)

SK27



50
埋土上位

1区



51
黒褐色土

4区 北側



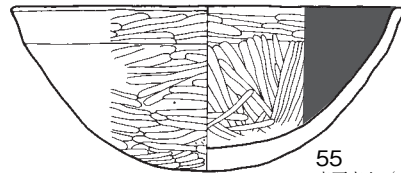
52
湧水の黒褐色土

1区



53
排土中

S I 04



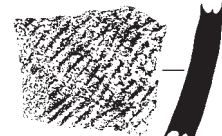
55
床面直上 (2層)
遺物1

S I 03 付近



56
表土

SK16



57
埋土上位

10区 T3



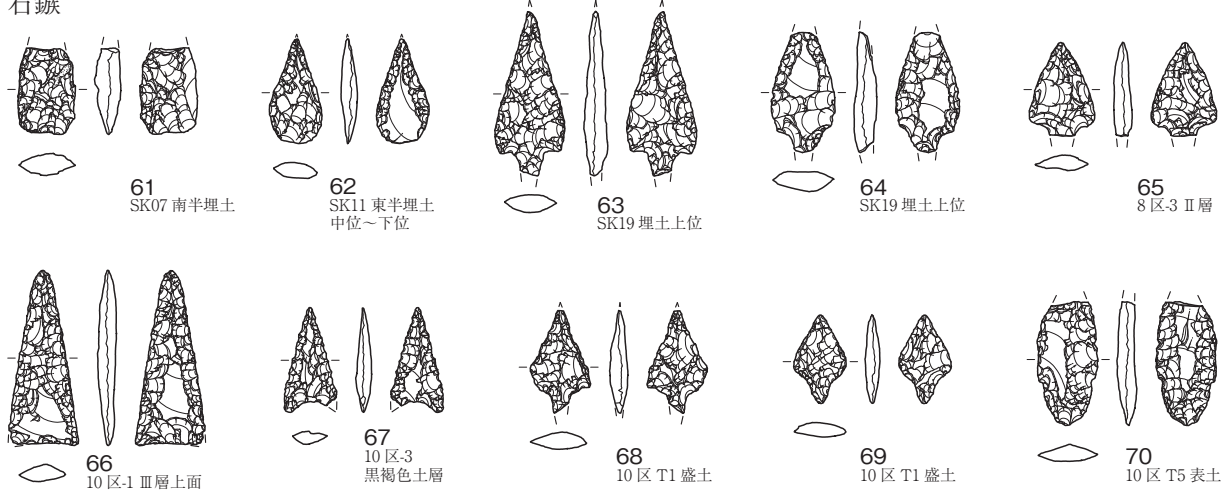
58
表土

44・50～52：縄文土器
53：弥生土器
54・55：土師器
56～58：須恵器

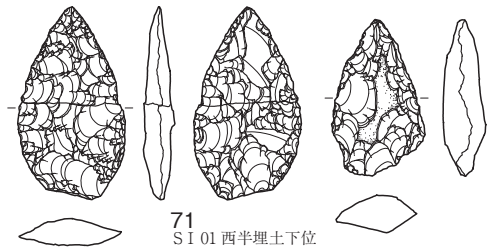
0 1:3 10cm

第32図 縄文土器(5)、弥生土器、土師器、須恵器

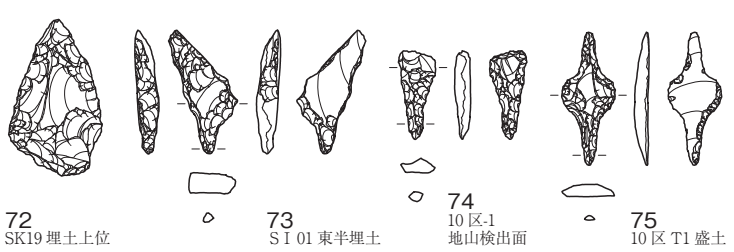
石鏃



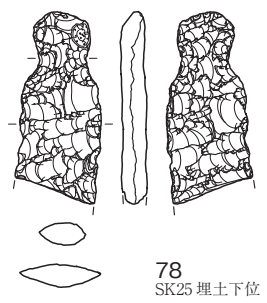
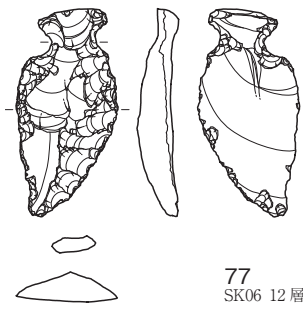
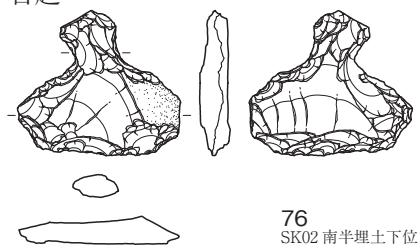
尖頭器



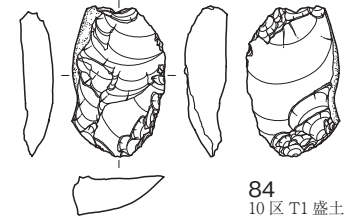
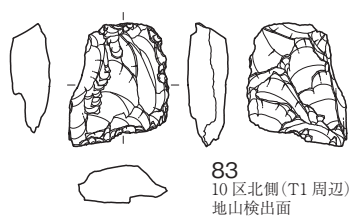
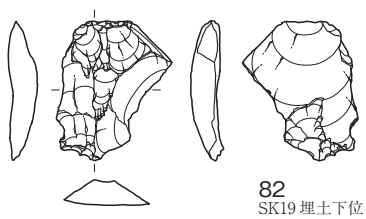
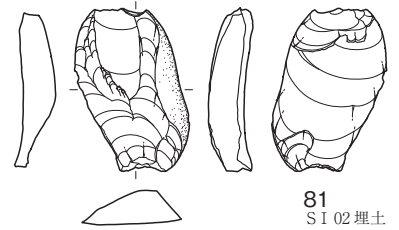
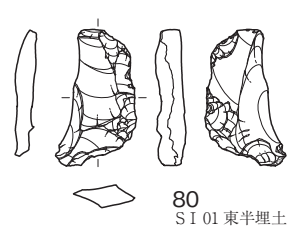
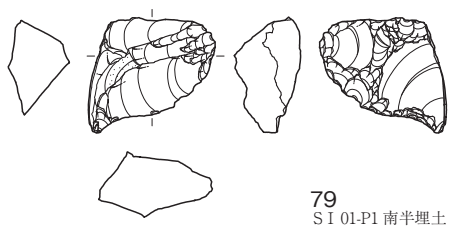
石錐



石匙



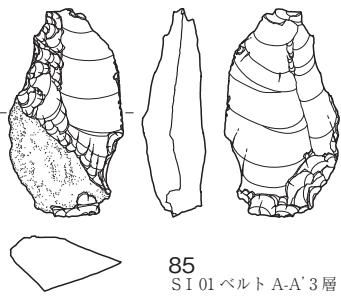
楔形石器



0 1:2 5cm

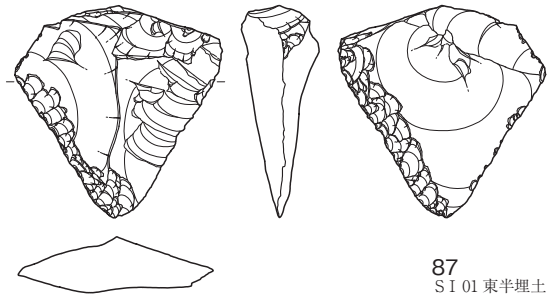
第33図 石器(1)

不定形石器

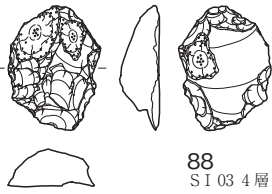


85
SI 01 ベルト A-A' 3層

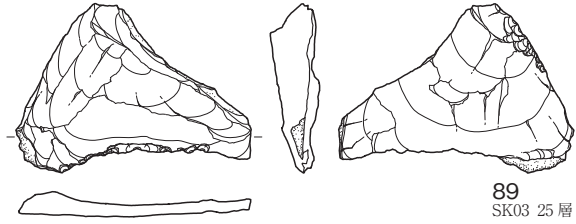
86
SI 01 ベルト A-A' 3層



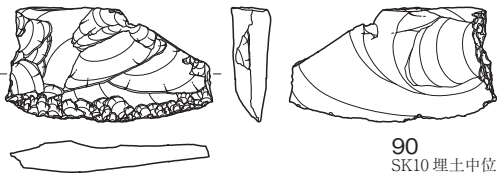
87
SI 01 東半埋土



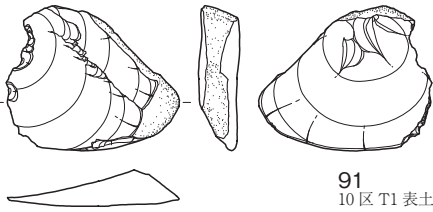
88
SI 03 4層



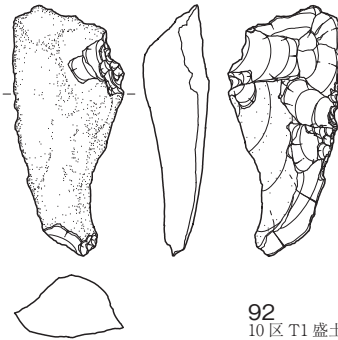
89
SK03 25層



90
SK10 埋土中位

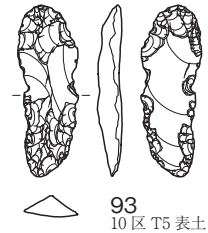


91
10区 T1 表土



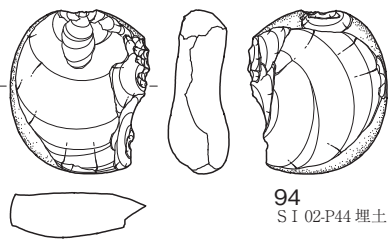
92
10区 T1 盛土

異形石器

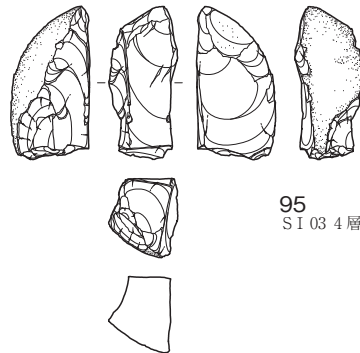


93
10区 T5 表土

残核



94
SI 02-P44 埋土



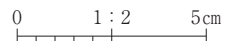
95
SI 03 4層

96
SI 03 2層



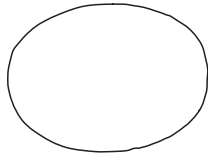
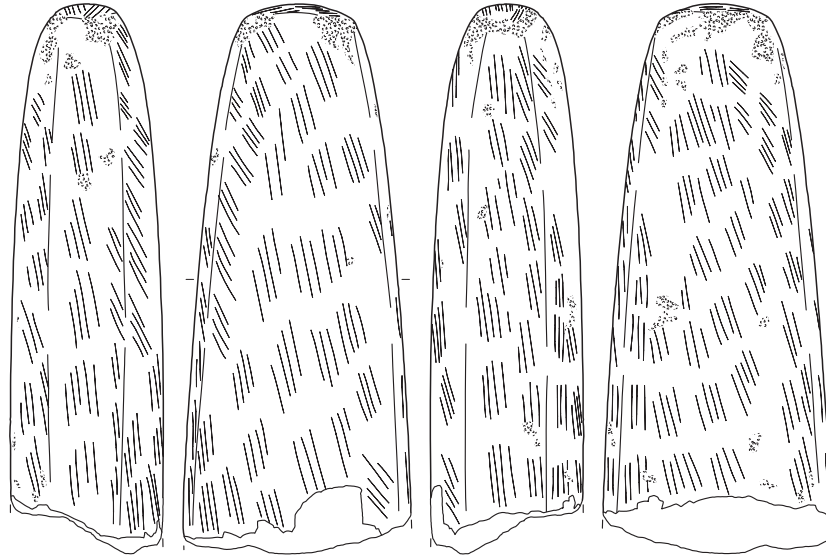
97
SI 03 埋土下位

98
SK03 埋土



第34図 石器(2)

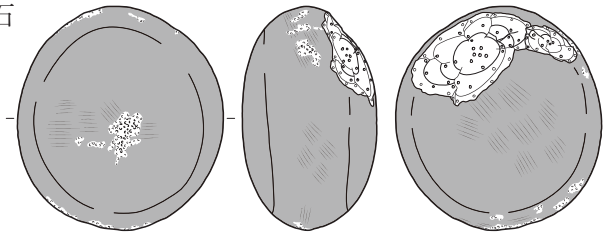
磨製石斧



99
SK13 西半埋土上位 S7

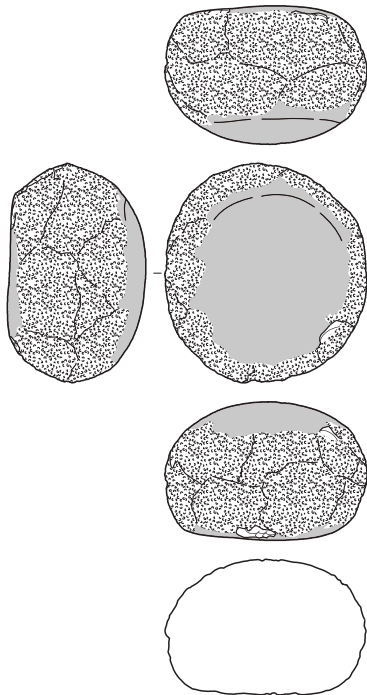
0 1:2 5cm

磨石

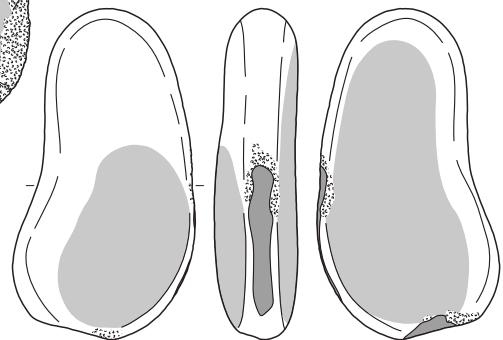


100
SK03埋土

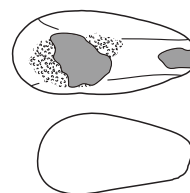
敲石



101
SI 02
床面直上
遺物 1



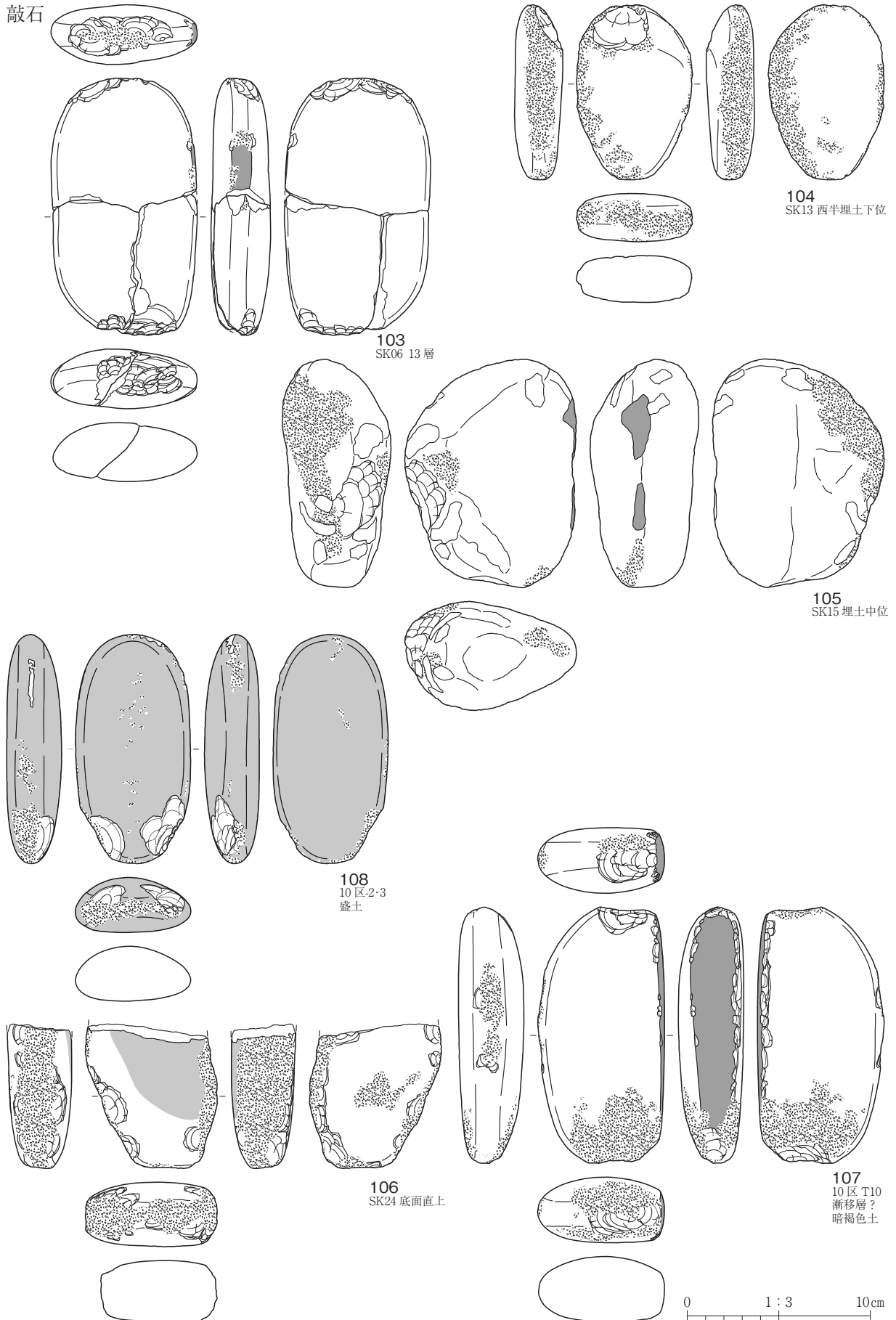
102
SK06 底面直上



0 1:3 10cm

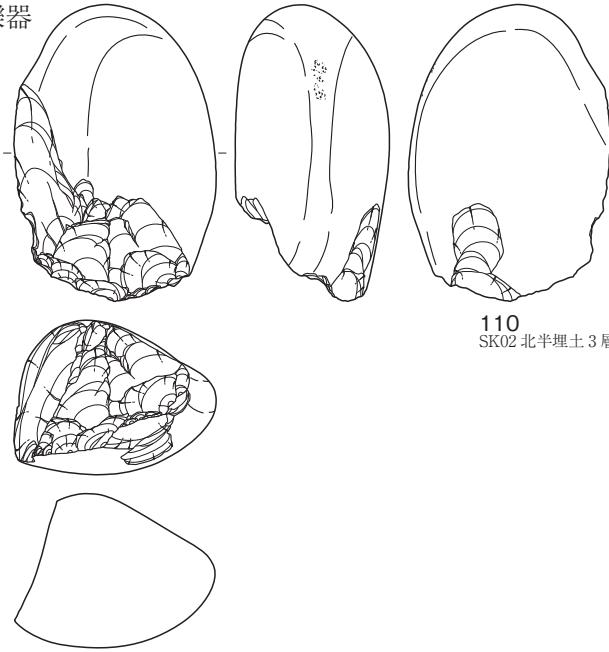
第 35 図 石器 (3)

敲石



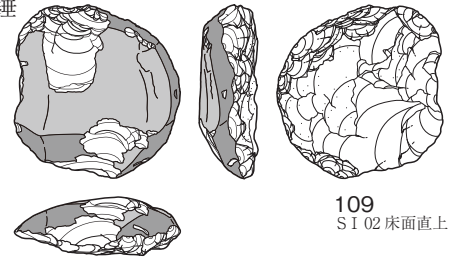
第36図 石器(4)

礫器



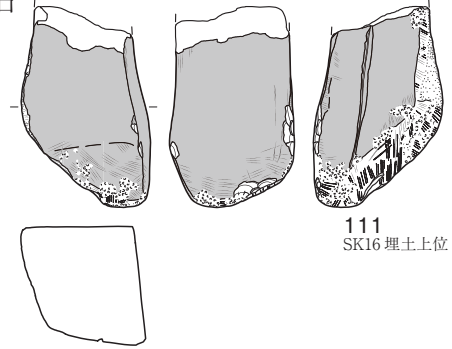
110
SK02 北半埋土 3層

石錘



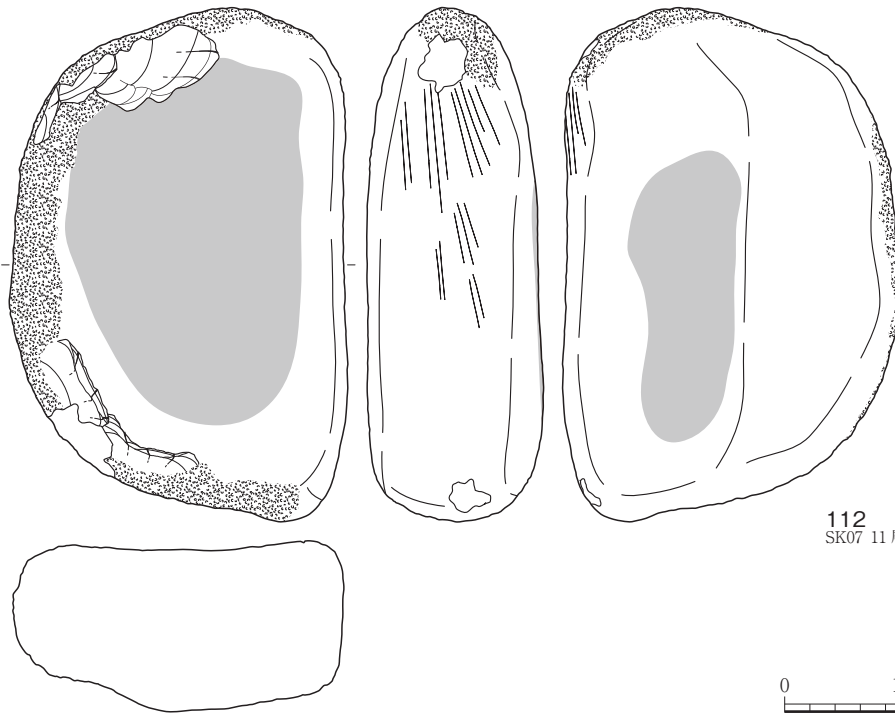
109
SI 02 床面直上

砥石

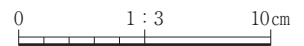


111
SK16 埋土上位

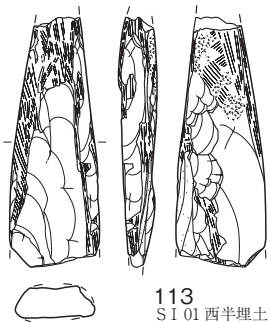
台石



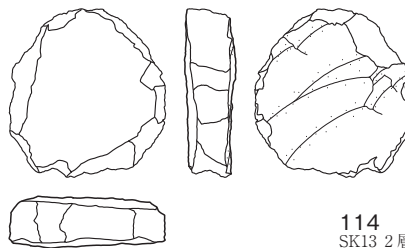
112
SK07 11層



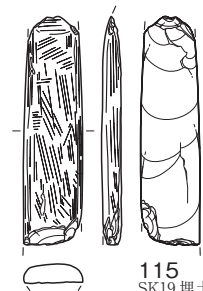
石製品



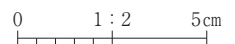
113
SI 01 西半埋土



114
SK13 2層



115
SK19 埋土上位



第37図 石器(5)、石製品

VI 分析・鑑定

1 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

平清水Ⅱ遺跡は、岩手県九戸郡野田村大字野田第22地割内に所在し、十府ヶ浦に向かって東流する明内川右岸の段丘に立地する。測定対象試料は、竪穴住居跡、土坑から出土した炭化材4点である(表1)。

試料1～3が出土したSI01、SK08、SK10からは円筒下層d式土器が出土している。また試料4が出土したSK27は、試料1～3が出土した遺構より古いと考えられている。

(2) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(3) 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxⅡ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(4) 算出方法

- 1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- 2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- 3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- 4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

(5) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料1～3の¹⁴C年代は、 $4750 \pm 30\text{yrBP}$ (試料3) から $4640 \pm 30\text{yrBP}$ (試料2) の間にまとまる。暦年較正年代 (1σ) は、これらの中で最も古い試料3が $3626 \sim 3523\text{cal BC}$ の間に2つの範囲、最も新しい試料2が $3496 \sim 3367\text{cal BC}$ の間に2つの範囲で示され、全体として縄文時代前期末葉から中期前葉頃に相当する (小林編2008、小林2017)。出土土器の時期におおむね近い結果である。

試料4の¹⁴C年代は $5890 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $4786 \sim 4723\text{cal BC}$ の範囲で示され、縄文時代前期初頭から前葉頃に相当する (小林編2008、小林2017)。遺構について推定される時期におおむね一致する値となった。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 一土器型式編年と炭素14年代一, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62 (4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

1 放射性炭素年代測定

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-210823	1	HS II - 21 SI01 竪穴住居跡 炉内埋設土器内土1層	炭化材	AAA	-27.27 ± 0.20	4,730 ± 30	55.53 ± 0.18
IAAA-210824	2	HS II - 21 SK08 土坑 22層	炭化材	AAA	-26.78 ± 0.16	4,640 ± 30	56.13 ± 0.19
IAAA-210825	3	HS II - 21 SK10 土坑 底面直上	炭化材	AAA	-26.20 ± 0.16	4,750 ± 30	55.35 ± 0.18
IAAA-210826	4	HS II - 21 SK27 陥し穴状遺構 底面直上	炭化材	AAA	-29.11 ± 0.17	5,890 ± 30	48.04 ± 0.16

[IAA 登録番号: #A867]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-210823	4,760 ± 30	55.27 ± 0.18	4,726 ± 26	3621calBC - 3584calBC (22.4%) 3531calBC - 3509calBC (15.8%) 3429calBC - 3382calBC (30.1%)	3629calBC - 3557calBC (34.0%) 3536calBC - 3495calBC (22.8%) 3455calBC - 3377calBC (38.7%)
IAAA-210824	4,670 ± 30	55.93 ± 0.18	4,638 ± 26	3496calBC - 3439calBC (57.3%) 3378calBC - 3367calBC (11.0%)	3514calBC - 3424calBC (75.0%) 3411calBC - 3395calBC (3.7%) 3385calBC - 3361calBC (16.8%)
IAAA-210825	4,770 ± 30	55.22 ± 0.18	4,751 ± 25	3626calBC - 3561calBC (59.0%) 3533calBC - 3523calBC (9.3%)	3634calBC - 3511calBC (86.4%) 3427calBC - 3407calBC (5.0%) 3399calBC - 3382calBC (4.1%)
IAAA-210826	5,960 ± 30	47.64 ± 0.16	5,888 ± 27	4786calBC - 4723calBC (68.3%)	4836calBC - 4811calBC (7.1%) 4805calBC - 4703calBC (88.4%)

[参考値]

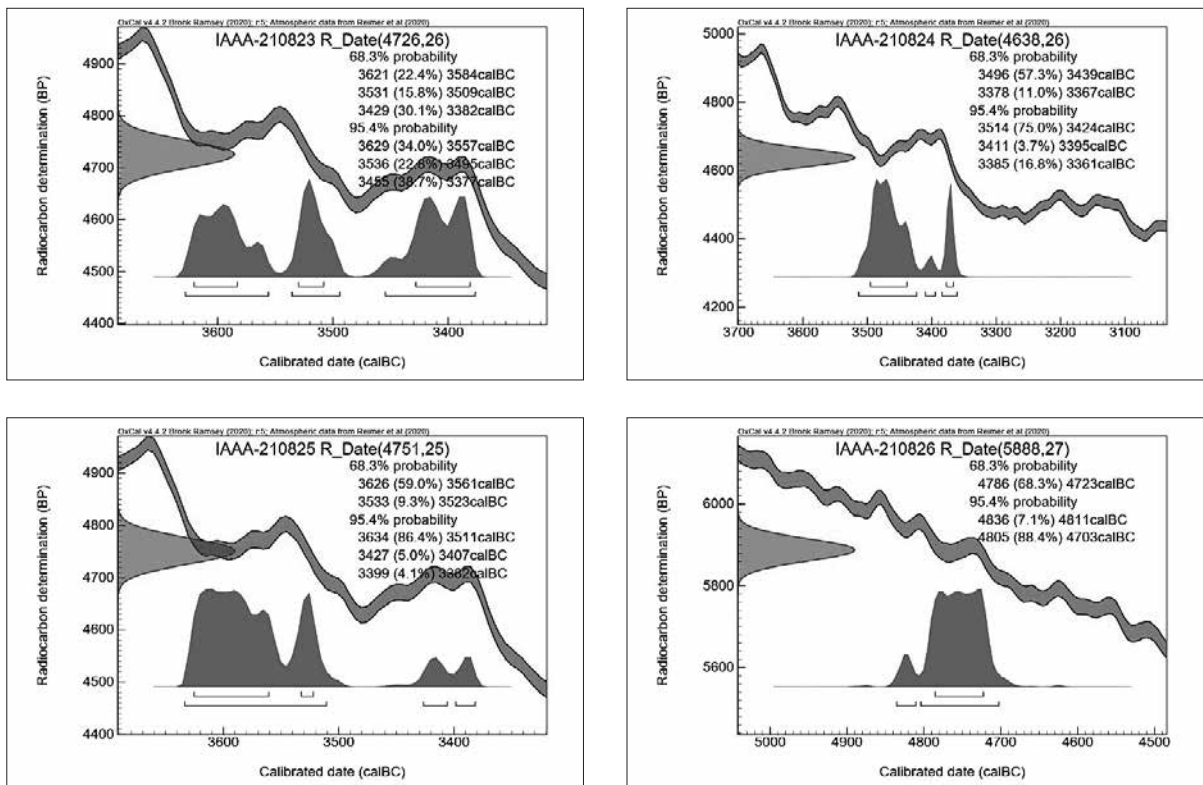


図1 暦年較正年代グラフ (参考)

2 火山灰の分析

(株) 火山灰考古学研究所

(1) はじめに

東北地方三陸地域の地層や土壌の中には、十和田、岩手、秋田駒ヶ岳、焼石、鳴子など東北地方の火山のほか、北海道地方の洞爺、中国地方の三瓶、九州地方の始良や阿蘇、さらには中朝国境に位置する白頭山など遠方の火山に由来するテフラが数多く挟在されている。そのうち、後期更新世以降の多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴がテフラ・カタログ(町田・新井, 2011)などに掲載されており、考古遺跡などで調査分析を実施し、年代や層位が明らかない指標テフラを検出することで、地形や地層さらには考古学的な遺物・遺構の層位や年代などに関する情報を得ることができるようになっている。

野田村平清水Ⅱ遺跡における発掘調査でも、テフラ層やテフラ粒子を含む可能性が高い土層が認められたことから、発掘調査担当者により採取された2試料について、テフラ分析(テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定)を実施し、含まれるテフラの由来を明らかにして、遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。分析対象は、陥し穴状遺構のSK20の1層下面から採取された試料1と、竪穴住居跡のSI03の7層から採取された試料2の2点である。

(2) テフラ検出分析

a 分析方法

試料に含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料ごとに6gを電子天秤で秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去した後に、恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

b 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料1には、無色透明の繊維束状や、白色のスポンジ状の軽石型の火山ガラスが比較的多く含まれている。磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。一方、試料2には、無色透明や淡褐色の繊維束状やスポンジ状の軽石型、無色透明や淡緑色の分厚い中間型、さらに無色透明のバブル型の火山ガラスが少量含まれている。磁鉄鉱など不透明鉱物以外の重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

(3) テフラ組成分析(火山ガラス比分析・重鉱物組成分析)

a 分析方法

次に、テフラ粒子の量や特徴を定量的に把握するために、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析済み試料について、分析篩で $>1/4\text{mm}$ 、 $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ 、 $1/8 \sim 1/16\text{mm}$ 、 $<1/16\text{mm}$ の粒子に篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で $1/4 \sim 1/8\text{mm}$ の250粒子を観察して、火山ガラスの形態(一部色調)別含有率、軽

鉱物と重鉱物の含有率を求める。

3) 偏光顕微鏡下で1/4～1/8mmの重鉱物250粒子を観察して、重鉱物組成を求める。

b 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図1に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を表2と表3に示す。

試料1には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物が、順に11.2%、64.4%、17.2%含まれている。火山ガラスは、含有率が高い順に、スポンジ状軽石型(7.6%)、繊維束状軽石型(2.8%)、中間型(0.8%)である。不透明鉱物以外の重鉱物には、含有率が高い順に、斜方輝石(48.0%)、単斜輝石(14.8%)、カンラン石(0.4%)が認められる。

一方、試料2には、火山ガラス、軽鉱物、重鉱物が、順に3.6%、39.2%、40.4%含まれている。火山ガラスは、含有率が高い順に、中間型(2.4%)、繊維束状軽石型(0.8%)、無色透明バブル型(0.4%)である。不透明鉱物以外の重鉱物には、含有率が高い順に、斜方輝石(39.2%)、単斜輝石(11.6%)、角閃石(3.2%)、カンラン石(0.8%)が認められる。

(4) 屈折率測定(火山ガラス・鉱物)

a 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度向上のために、火山ガラスと斜方輝石の屈折率測定を実施した。測定方法は温度変化型屈折率法(壇原, 1993)である。測定対象の火山ガラスは1/8～1/16mm粒子中のもの、また斜方輝石は>1/4mmのものから実体顕微鏡を併用しながらピックアップして軽く粉砕したものである。

b 測定結果

屈折率の測定結果を、本地域に分布する代表的な指標テフラの屈折率特性を合わせて表4に示す。試料1に含まれる火山ガラス(31粒子)の屈折率(n)は、1.510-1.514である。また、斜方輝石(31粒子)の屈折率(γ)は、1.702-1.711である。

一方、試料2に含まれる火山ガラス(31粒子)の屈折率(n)は、1.499-1.521である。この値はbimodal組成で、1.499-1.509(23粒子)と1.513-1.521(8粒子)の値からなる。また、斜方輝石(31粒子)の屈折率(γ)は、1.704-1.710である。この値もbimodal組成で、1.704-1.710(10粒子)と1.714-1.721(21粒子)の値からなる。

(5) 考 察

試料1には、繊維束状やスポンジ状の火山ガラスが比較的多く含まれていること、重鉱物に斜方輝石や単斜輝石が多く認められること、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性などから、十和田中掬テフラ(To-Cu, 約6,000～6,200年前, 大池ほか, 1966, 早川, 1983, 町田・新井, 1992, 2003, 2011, 工藤・佐々木, 2007)が多く含まれていると考えられる。試料が黄色火山灰層のブロックから採取されたらしいことを考えると、本地域に降灰したTo-Cuのうちの下部を構成するフォール・ユニットから採取されたものと推定される。この火山灰層ブロックは、陥し穴と考えられているSK20覆土中にあることから、SK20の層位は、To-Cuより下位と考えられる。

一方、試料2には、火山ガラスや斜方輝石の屈折率特性などから、複数のテフラが混在していると考えられる。火山ガラスの多くは、形態や色調、さらに屈折率特性から、915年に十和田火山から噴

出した十和田 a テフラ (To-a, 大池, 1972, 町田ほか, 1981, Hayakawa, 1985, 町田・新井, 2011 など) に由来すると考えられる。低めの屈折率特性をもつ斜方輝石の多くについても、To-aに由来する可能性が高い。

また、屈折率が高い火山ガラスについては、この試料にバブル型ガラスが含まれていることを合わせると、10世紀に白頭山火山から噴出した白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm, 町田ほか, 1981, 町田・新井, 2011 など) に由来すると考えられる。以上のことから、試料が採取された土層は、B-Tm降灰後に最終的に形成された土層の可能性が高い。なお、この試料2に含まれる屈折率が高い斜方輝石については、秋田駒ヶ岳火山、焼石火山、鳴子火山などに由来するものと思われる。

(6) ま と め

野田村平清水Ⅱ遺跡において、発掘調査担当者により採取された2試料を対象に、テフラ分析 (テフラ検出分析・テフラ組成分析・火山ガラスおよび鉱物の屈折率測定) を実施した。その結果、縄文時代と推定される遺構の覆土中の火山灰ブロックから採取された試料1は、十和田中堰テフラ (To-Cu, 約6,000～6,200年前) と考えられる。一方、古代の可能性のある試料2には、十和田 a テフラ (To-a, 915年) や白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm, 10世紀) が含まれている可能性が高いことが明らかになった。

文献

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.138-149.

壇原 徹 (1993) 温度変化型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀研究試料分析法2」, p.149-158.

早川由紀夫 (1983) 十和田中堰テフラ層の分布, 粒度, 組成, 年代. 火山, 28, p.263-273.

Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. *Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo*, 60, p.507-592.

工藤 崇・佐々木 寿 (2007) 十和田火山後カルデラ期噴出物の構成土噴火史編年. 地学雑誌, 116, p.653-663.

町田 洋・新井房夫 (2011) 「新編火山灰アトラス (第2刷)」. 東京大学出版会, 336p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海をわたってきたテフラ. 科学, 51, p.562-569.

大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究, 11, p.232-233.

大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰. 第四紀研究, 5, p.29-35.

表1 平清水Ⅱ遺跡のテフラ検出分析結果

分析試料	軽石			火山ガラス			重鉱物 (不透明鉱物以外)
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
試料1 (SK20-1層下面)				**	pm (fb, sp)	無色透明, 白	opx, cpx
試料2 (SI03-7層)				*	pm (fb, sp), md, bw	無色透明, 淡褐, 淡緑	opx, cpx

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない. 重鉱物は不透明鉱物以外.
bw: バブル型, pm: 軽石型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石.

表2 平清水Ⅱ遺跡の火山ガラス比分析結果

分析試料	bw	bw (pb)	bw (br)	md	pm (sp)	pm (fb)	sc	軽鉱物	重鉱物	その他	合計
試料1 (SK20-1層下面)	0	0	0	2	19	7	0	161	43	18	250
試料2 (SI03-7層)	1	0	0	6	0	2	0	98	101	42	250

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, sc: スコリア型, cl: 無色透明, p-br: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状.
数字: 粒子数.

表3 平清水Ⅱ遺跡の重鉱物組成分析結果

分析試料	ol	opx	cpx	am	mc	opq	その他	合計
試料1 (SK20-1層下面)	1	120	37	0	0	83	9	250
試料2 (SI03-7層)	2	98	29	8	0	100	13	250

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, mc: 雲母, opq: 不透明鉱物. 数字: 粒子数.

表4 屈折率測定結果

地点・試料 ・指標テフラ	火山ガラス		斜方輝石		文献
	屈折率 (n)	測定数	屈折率 (γ)	測定数	
平清水遺跡Ⅱ遺跡・試料1 (SK20-1層下面)	1.510-1.514	31	1.702-1.711	31	本報告
平清水遺跡Ⅱ遺跡・試料2 (SI03-7層)	1.499-1.521 (1.499-1.509) (1.513-1.521)	31 (23) (8)	1.704-1.721 (1.704-1.710) (1.714-1.721)	31 (10) (21)	本報告

岩手県域の代表的指標テフラ (後期更新世以降)				
白頭山苫小牧 (B-Tm)	1.511-1.522			1)
十和田 a (To-a)	1.500-1.508		1.706-1.708	1)
十和田中振 (To-Cu)	1.508-1.512		1.703-1.709	1)
鬼界アカホヤ (K-Ah)	1.506-1.513			1)
肘折尾花沢 (Hj-O)	1.499-1.504		1.712-1.715	1)
秋田駒柳沢 (Ak-Y)			1.718-1.723	1)
秋田駒小岩井 (Ak-K)			1.708-1.712	1)
十和田八戸 (To-H)	1.505-1.509		1.706-1.708	1)
浅間板鼻黄色 (As-YP)	1.502-1.504			1)
鳴子湯沼上原 (Nk-U)	1.492-1.500			1)
始良 Tn (AT)	1.498-1.501			1)
十和田大不動 (To-Of)	1.506-1.510		1.707-1.710	1)
鳴子柳沢 (Nr-Y)	1.500-1.503		1.717-1.722	1)
大山倉吉 (DKP)	1.508-1.514			1)
焼石山形 (Yk-Y)	1.501-1.503		1.720-1.725	1)
焼石村崎野 (Yk-M)	1.503-1.508		1.717-1.722	1)
阿蘇 4 (Aso-4)	1.506-1.510			1)
鳴子荷坂 (Nr-N)	1.500-1.502		1.724-1.728	1)
肘折北原 (Hj-Kth)	1.499-1.502		1.728-1.733	1)
御岳第 1 (On-Pm1)	1.500-1.503			1)
三瓶木次 (SK)	1.496-1.498			1)
洞爺 (Toya)	1.494-1.498			1)

本報告における屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定法(壇原, 1993)による。
1) : 町田・新井 (2011). 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993).

図1 平清水Ⅱ遺跡のテフラ組成ダイアグラム

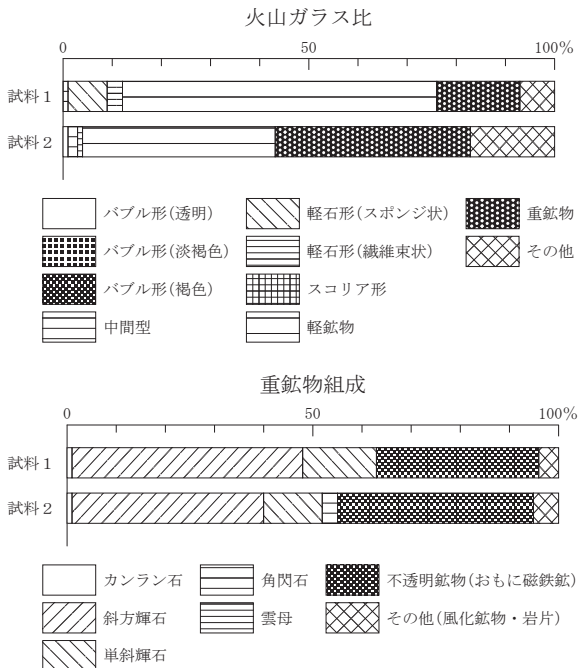


写真1 試料1 (SK20-1層下面, 透過光)
中央・右下: スポンジ状軽石型ガラス,
右: 繊維束状軽石型ガラス,
中央(有色鉱物): 斜方輝石.

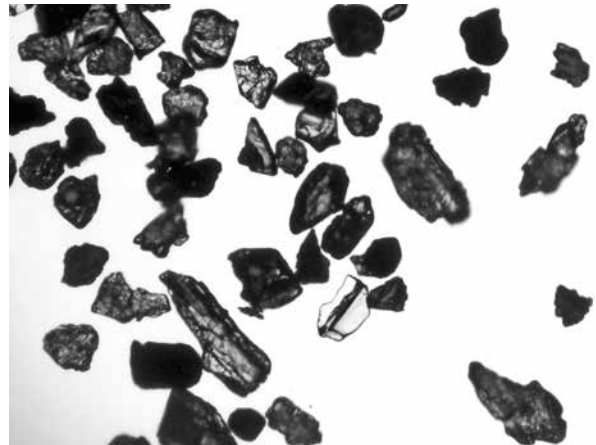


写真2 試料2 (SI03-7層, 透過光)
中央下: 無色透明のバブル型ガラス.



写真3 試料2 (SI03-7層, 透過光)
中央右: 繊維束状軽石型ガラス,
右上(有色鉱物): 斜方輝石.

写真図版

Ⅶ 総 括

1 平清水Ⅰ遺跡

遺構は確認されなかった。遺物は縄文土器、石器、琥珀片など少量が出土した。

2 平清水Ⅱ遺跡

(1) 縄文時代

竪穴住居跡2棟を確認した。S I 01竪穴住居跡は土器埋設炉・地床炉を伴う。時期は前期末葉と推測する。S I 02竪穴住居跡は前期末葉から中期前葉の土坑群と重複し、竪穴住居跡が新しい。

土坑28基を確認した。断面フラスコ状を呈するのは24基である。規模・平面形は、底径150～200cm程の円形基調で(第39図)、底部に副穴を伴うものがある。S K 07・08土坑から円筒下層d 1式相当の土器が複数個体出土した。土坑の主たる時期は、前期末葉から中期前葉と推測する。

陥し穴状遺構5基を確認した。平面形は楕円形2基、溝状3基である。埋土に十和田中掬テフラを確認した楕円形の陥し穴状遺構は前期前葉か。溝状の陥し穴状遺構は、楕円形の陥し穴状遺構より時期が新しいと推測する(註1)。集落域に近い8・10区のみならず、南西側の1・12区でも確認した。

集落の範囲は、竪穴住居跡、土坑が確認された10区北側と8区北側が該当する。今回の調査では、平成13・14年度調査で確認された集落跡の南側と西側の範囲を確認したものと思われる(第38図)。

縄文土器は円筒下層d 1式相当を主体とする(第40図)。器形は口縁部がやや開くバケツ形(茅野2008の第1図A類)である。口径/底径の比率1.6、器高/底径の比率2.3で、底部から口縁まで直線的に立ち上がる。文様は口唇部に原体側面圧痕や回転縄文、口縁部に原体側面圧痕が施される。頸部に隆帯を貼り付け、刺突を加える。口縁部文様帯の幅は約0.9～4.0cm(8.4%前後)で、26を除くと、0.9～2.5cmで7.2%である。口縁部文様帯の幅は器高の1割未満といえる(第26表)。胴部文様は結束第1種(羽状縄文)横回転が多く、次に単軸絡条体第1A類縦回転が続く(註2)。細い原体を使用し、底部まで緻密に施文される。内面はミガキ調整で胎土に砂礫や繊維を含む。中期前葉の土器は円筒上層a式相当か。口縁部に太い隆帯と原体側面圧痕が施される。胎土に繊維は含まない。

石器は、石鏃、剥片類、原石や残核が多い特徴がある。平成13・14年度調査でも同様の傾向がみられる。剥片類、原石、残核の多さは、当遺跡での石器製作が行われていた傍証となる。

琥珀は、小型の原石が持ち込まれ、加工されたと推測される。製品は未確認である。

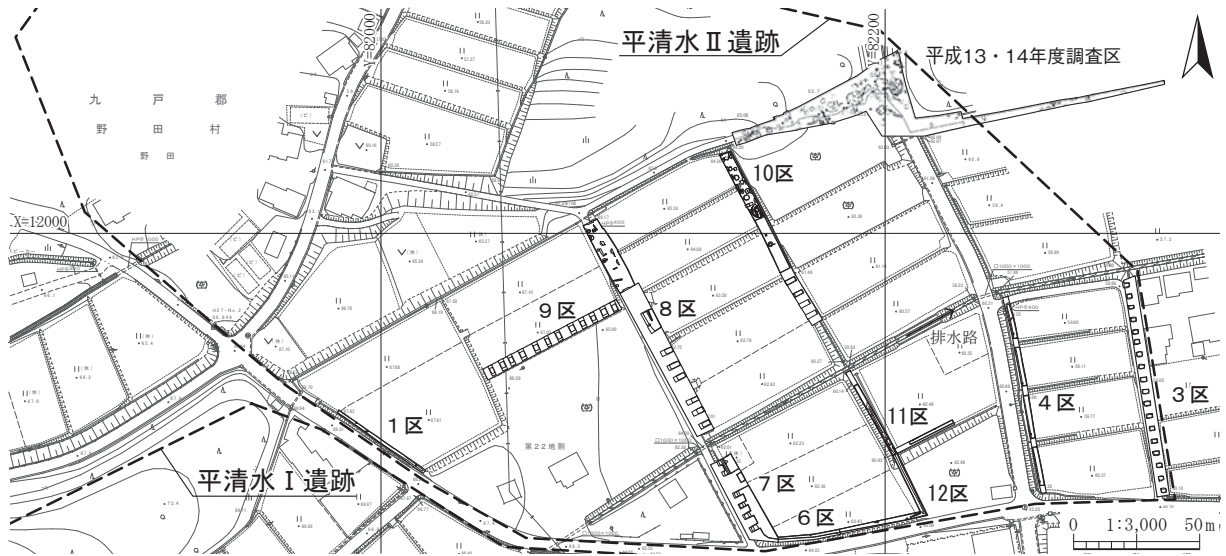
(2) 古 代

竪穴住居跡2棟を確認した。S I 03竪穴住居跡埋土で十和田a火山灰を確認した。時期は出土遺物から10世紀前葉以前か。S I 04竪穴住居跡の時期は、出土遺物から8世紀中葉と推測する(註3)。

3 自然科学的分析・鑑定結果と調査の所見

(1) 放射性炭素年代測定

縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構から出土した炭化材4点の放射性炭素年代測定を行った。試料1は竪穴住居跡の炉埋設土器内、試料2・3は土坑埋土の炭化材で、分析結果は縄文時代前期末葉から中期前葉に相当する値である(註4)。試料4は楕円形の陥し穴状遺構出土の炭化材で、

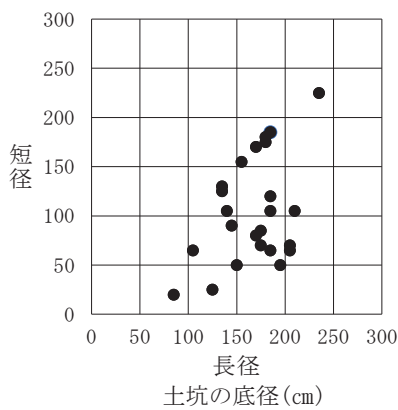


平清水Ⅱ遺跡の遺構分布図



平清水Ⅱ遺跡の縄文時代の集落概念図

第38図 周辺の地形と遺跡の立地



第39図 土坑の底径規模分布図

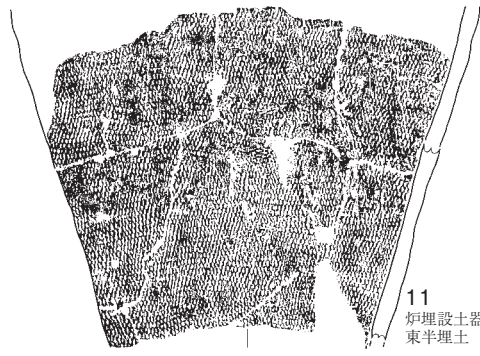
第26表 縄文土器の計測値と比率

[推定値]

掲載No.	計測値 (cm)				比率		
	口径	口縁部文様帯の幅	器高	底径	口径/底径	器高/底径	口縁部文様帯の幅/器高
25	[15.0]	1.3	19.2	8.4	1.8	2.3	6.8%
26	21.4	4.0	25.4	12.9	1.7	2.0	17.7%
31	10.0	1.4	14.3	7.2	1.3	2.0	9.8%
32	10.0	—	17.0	[9.6]	1.0	1.8	—
33	16.4	1.8	24.7	12.4	1.3	2.0	8.1%
34	[11.1]	0.9	19.2	8.8	1.3	2.1	4.7%
37	22.7	2.0	27.2	12.0	1.9	2.7	7.4%
38	13.5	1.3	20.3	8.5	1.6	2.4	6.4%
42	[19.8]	2.1	27.5	10.0	2.0	2.8	7.6%
44	[25.8]	2.5	36.2	14.8	1.7	2.5	6.9%
平均	16.6	1.9	23.1	10.5	1.6	2.3	8.4%

※ 26の口縁部文様帯の幅は波状口縁の波頂部で4cm、それ以外で3cm。

S I 01



11 炉埋設土器
東半埋土



12 床直遺物 1



13 ベルト A-A'
3層



14 西半埋土下位



15 東半埋土

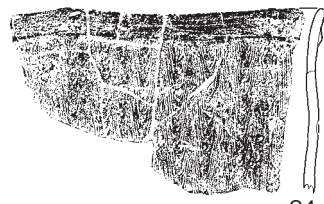
S K 07



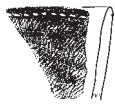
22 11層、底面直上



23 7層



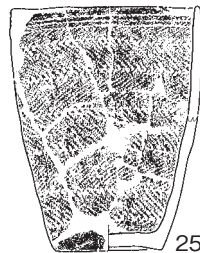
24 埋土中位、遺物 2



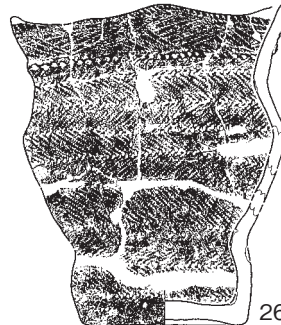
28 南半埋土



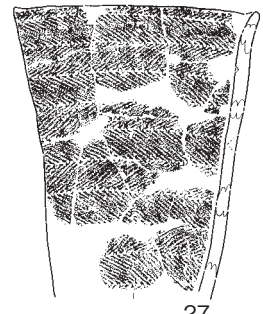
29 埋土



25 埋土中位
遺物 3

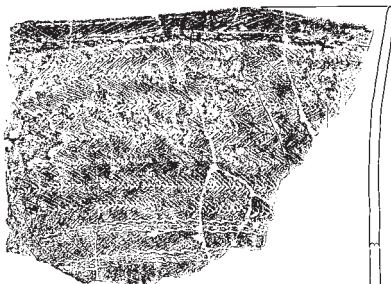


26 埋土中位
遺物 4

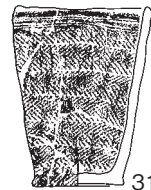


27 埋土中位
遺物 5

S K 08



30 底面直上
遺物 3



31 22層、底面直上
遺物 4



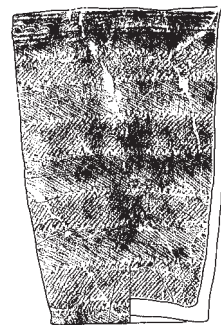
32 17層、埋土、底面直上
遺物 5



35 17層



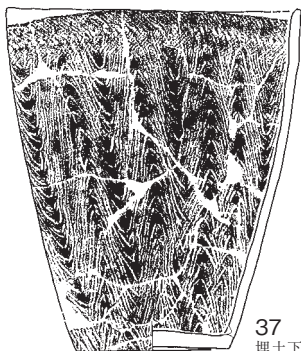
36 17層



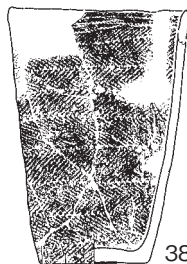
33 22層、
底面直上



34 17・22層、埋土



37 埋土下位



38 11・12・22層、埋土中位
遺物 1・2・4・5

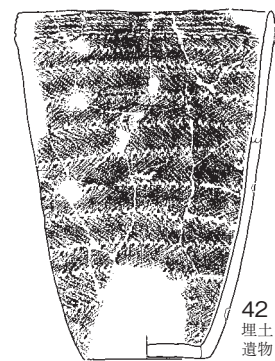


39 埋土



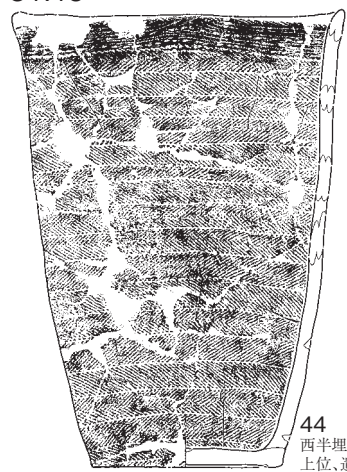
40 埋土

S K 10



42 埋土中位
遺物 2

S K 13



44 西半埋土
上位、遺物 1

0 1:6 20cm

第40図 縄文土器集成図

分析結果は縄文時代前期初頭から前葉に相当する値である。いずれも調査所見と矛盾しない。

(2) 火山灰分析

古代の竪穴住居跡1棟と陥し穴状遺構1基で確認した火山灰2点の分析・鑑定を行った。試料1は、十和田中掘テフラ (To-Cu) と考えられる分析結果である。試料2は、十和田aテフラ (To-a)、白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm) の可能性が高いとの分析結果である。いずれも調査所見と矛盾しない(註5)。

4 まとめ

平清水Ⅱ遺跡は、南西から北東方向に延びる尾根とその南斜面に縄文時代前期末葉から中期前葉の集落が形成されていた。集落の形成前後の時期には、広範囲に狩猟の場が設けられていた。古代の集落については詳細不明だが、今後、周辺遺跡との関係から資料を位置づけていく必要がある。

註

- (1) 陥し穴状遺構の形態による時期的な差異は、中平遺跡など周辺の複数遺跡の調査で確認されている。本書Ⅱ章参照。
- (2) 茅野 2008は、円筒下層d1式の胴部文様は「青森県南東部では、秋田同様結束第1種羽状縄文が多く、単軸絡条体第1A類・多軸絡条体回転文が続く。」(pp222)と指摘する。同様の傾向は軽米町大鳥Ⅰ遺跡でも認められる。青森県南東部で胴部文様に多用される結束第1種羽状縄文は、岩手県沿岸北部を含む青森県南東部の地域の特徴のひとつと考えられる。
- (3) 出土した土師器は、宇部 2013の4A期(8世紀中葉)、8B期(10世紀前葉)付近に相当するものと推測する。
- (4) 茅野 2008で提示された青森県三内丸山遺跡の円筒下層d1式の時期3点の¹⁴C年代測定値(測定値BP±1σ)は、4680±50(Beta-112353)、4650±50(Beta-11795)、4553±50(NUTA 2-720)。平清水Ⅱ遺跡の円筒下層d1式の時期3点の¹⁴C年代測定値は、4730±30(IAAA-210823)、4640±30(IAAA-218024)、4750±30(IAAA-210825)で、近似値を示している。
- (5) 古代の竪穴住居跡に堆積する火山灰については、平清水Ⅲ遺跡の調査成果を参照した。火山灰を分析したⅡ区SⅠ01・04・16は、埋土上位に白頭山苦小牧火山灰(B-Tm)、間層を挟み、下位に十和田aテフラ(To-a)が確認され、Ⅱ区SⅠ03は、間層を挟まず、2a層(下位)のB-Tm、2b層(上位)のTo-aの連続する上下関係が認められる。時期は、Ⅰ期7世紀代のⅡ区SⅠ03・04、Ⅴ期9世紀代のⅡ区SⅠ16、Ⅵ期9世紀後半から10世紀前半のⅡ区SⅠ01と時間幅があり、平清水Ⅱ遺跡の事例と類似する。

引用・参考文献

- 岩手県立博物館 2005『縄文北緯40°～前・中期の北東北～』
 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発刊報告書
 1999『大鳥Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第290集
 2004『平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第449集
 2008『力持遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第510集
 宇部則保 2013「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号(pp11～31)、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
 小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション、同書所収論考：茅野嘉雄「円筒下層式土器」(pp218～225)、早瀬良介「前期大木式土器」(pp226～233)、小笠原雅行「円筒上層式土器」(pp344～351)
 野田村教育委員会 2020『平清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書<Ⅰ分冊 遺構編>』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
 野田村教育委員会 2020『平清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書<Ⅱ分冊 遺物編>』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
 藤原秀樹 2012「北海道・北東北の貯蔵穴と貯蔵穴への埋葬」『北海道考古学』第57輯(pp63～84)

写 真 图 版

写真图版 1・2：平清水 I 遺跡・平清水 II 遺跡

写真图版 3：平清水 I 遺跡、遺構：3、遺物：3

写真图版 4～28：平清水 II 遺跡、遺構：4～20、遺物：21～28



遺跡近景（西から）



遺跡近景（南から）



遺跡近景（西から）



10区全景（直上から）

写真図版2 遺跡（令和3年度）



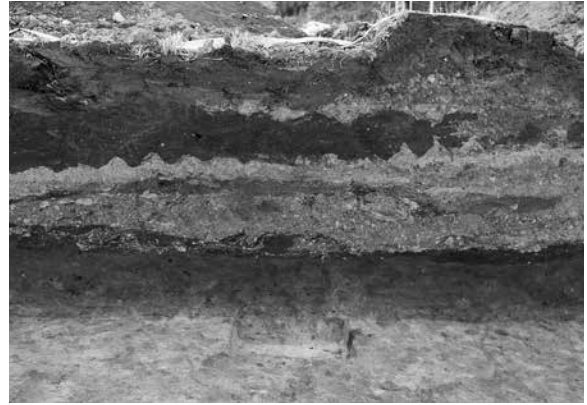
2区 現況 (南から)



2区 平面 (南から)



2区 平面 (直上)



2区 基本土層C 断面 (東から)



5区 平面 (南から)

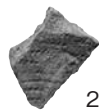


5区 基本土層A 断面 (東から)

2区



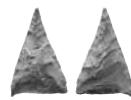
1



2



3



4



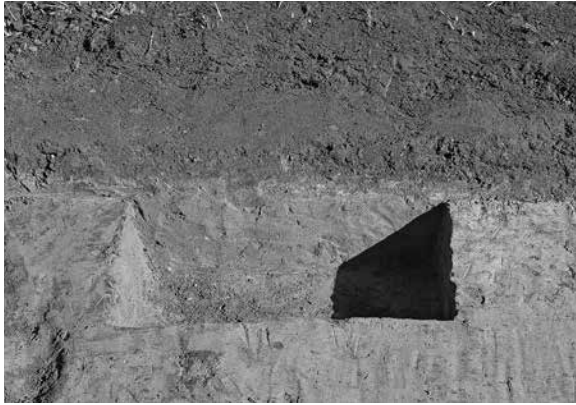
5



1区 現況 (南東から)



1区 平面 (南東から)



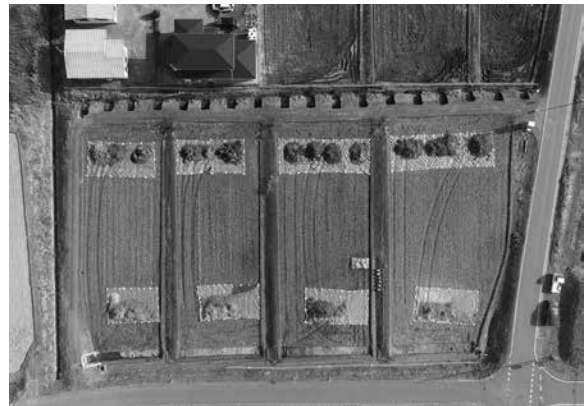
1区 基本土層A 断面 (南西から)



1区 基本土層B 断面 (南西から)



3区 平面 (南東から)



3・4区 平面 (直上から)



3区 T1基本土層A 断面 (南東から)



4区 基本土層A 断面 (東から)

写真図版4 1・3・4区



6区 現況 (東から)



6区 平面 (東から)



6区 基本土層A 断面 (南から)



6区 作業風景 (東から)



7区 現況 (南東から)



7区 平面 (東から)



7区 T6基本土層 断面 (南東から)



7区 作業風景 (南東から)



8区 現況 (南東から)



8区 平面 (南東から)



8区 基本土層 断面 (南東から)



8区-3 平面 (南東から)



8区-4 T4・5・6 平面 (北東から)



8区-5 T1・2・3 平面 (北東から)



9区 平面 (南西から)



9区 T11基本土層 断面 (南西から)

写真図版6 8・9区



現況（南東から）



現況（北西から）



平面（南東から）



基本土層 A（北東から）



作業風景（北西から）



作業風景（南東から）



作業風景（南東から）



作業風景（北東から）



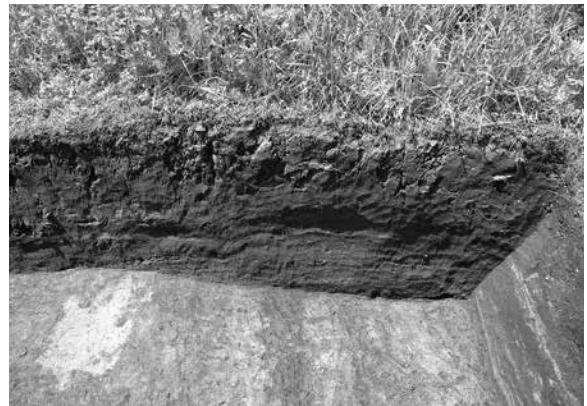
11区 現況 (南西から)



11区 東側 平面 (西から)



11区 基本層序A 断面 (南から)



11区 基本土層C 断面 (東から)



12区 現況 (東から)



12区 南側 平面 (東から)



12区 基本土層A 断面 (南から)



12区 基本土層B 断面 (西から)

写真図版8 11・12区



平面（南から）



平面（東から）



断面（南から）



断面（東から）



炉 平面（南から）



炉 断面（南から）



遺物1（12）出土状況・焼土2 検出状況（南から）



焼土2 断面（南から）



平面（南から）



平面（東から）



断面（南から）



断面（東から）



P2 断面（西から）



P11 断面（南から）



P14 断面（南から）



作業風景（南東から）

写真図版 10 S I 02 竪穴住居跡



S103 平面 (南から)



S103 断面 (南から)



S103 断面 (北東から)



S103・SK16 断面 (東から)



S104 平面 (東から)



S104 断面 (東から)



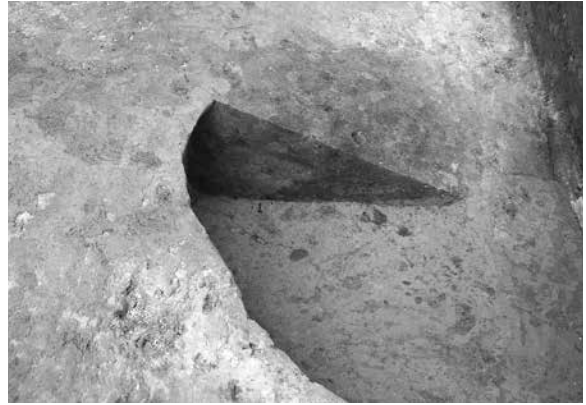
S104 遺物出土状況 (西から)



S104 検出状況 (東から)



SK02 平面 (南から)



SK02 断面 (南から)



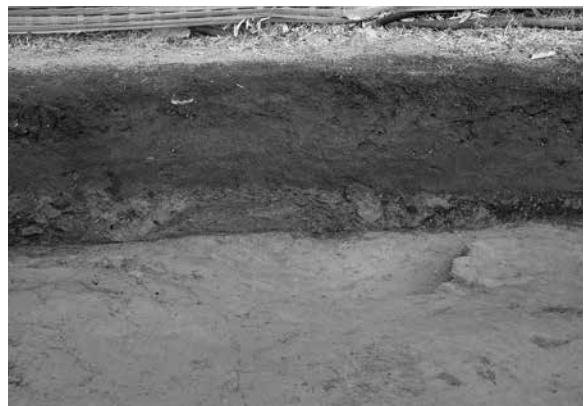
SK03 平面 (南東から)



SK03 断面 (南東から)



SK04 平面 (南西から)



SK04 断面 (南西から)



SK05 平面 (南東から)



SK05 断面 (南東から)

写真図版 12 SK02・03・04・05 土坑



SK06 平面 (西から)



SK06 断面 (西から)



SK07 平面 (南東から)



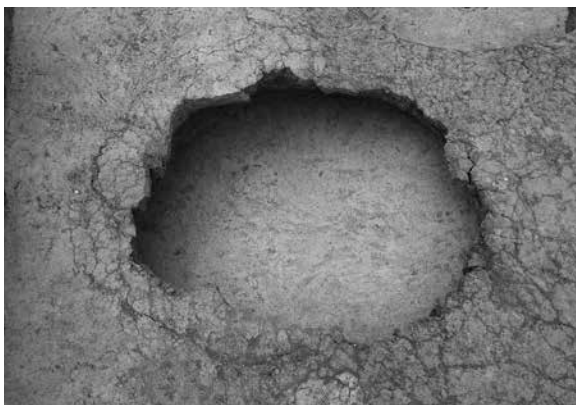
SK07 断面 (南東から)



SK07 遺物出土状況 (北から)



SK08 遺物 (33) 出土状況 (南から)



SK08 平面 (南東から)



SK08 断面 (南東から)



SK09 平面 (南西から)



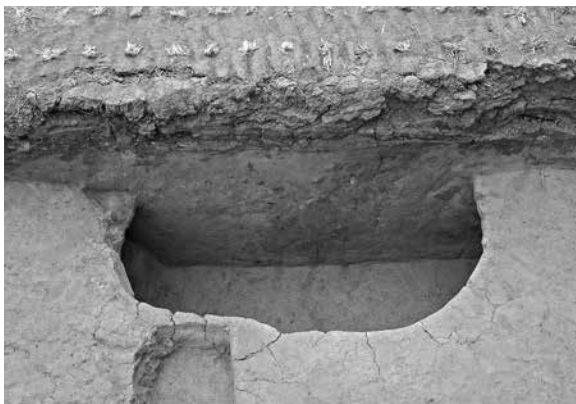
SK09 断面 (南西から)



SK10 平面・断面 (南西から)



SK10 遺物 (42) 出土状況 (北西から)



SK11・12 平面・断面 (東から)



SK13 遺物出土状況 (南から)



SK13 平面 (東から)



SK13 断面 (東から)

写真図版 14 SK09・10・11・12・13 土坑



SK14 平面 (南西から)



SK14 断面 (南西から)



SK15 平面 (南東から)



SK15 断面 (南東から)



SK16 平面 (東から)



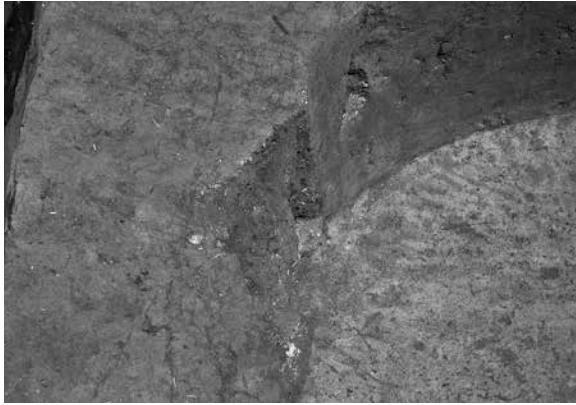
SK16 断面 (東から)



SK17 平面 (南東から)



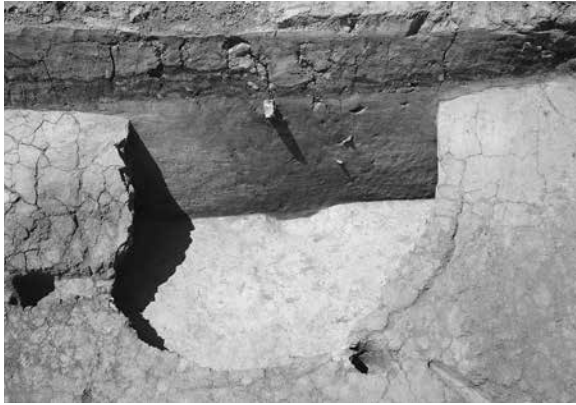
SK17 断面 (南東から)



SK18 平面 (南から)



SK19 遺物出土状況 (南東から)



SK19 平面 (東から)



SK19 断面 (東から)



SK21 平面 (南東から)



SK21 断面 (南東から)



SK22 平面 (北東から)



SK22 断面 (北東から)

写真図版 16 SK18・19・21・22 土坑



SK24 平面 (南東から)



SK24 断面 (南東から)



SK25 平面 (南東から)



SK25 断面 (南東から)



SK26 平面・断面 (東から)



SK28 平面・断面 (北から)



SK30 平面 (南から)



SK30 断面 (南から)



SK31 平面 (南東から)



SK31 断面 (南東から)



SK31 検出状況 (東から)



SK32 作業風景 (南から)



SK32 平面 (南東から)



SK32 断面 (南東から)



SK33 平面 (南東から)



SK33 断面 (南東から)



SK01 平面 (東から)



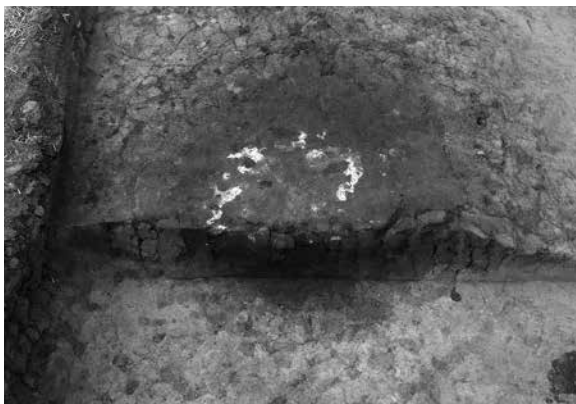
SK01 断面 (東から)



SK20 平面 (南から)



SK20 断面 (南から)



SK20 検出状況 (南から)



SK23 作業風景 (南から)



SK23 平面 (東から)



SK23 断面 (東から)



SK27 平面 (南東から)



SK27 断面 (南東から)



SK29 平面 (北東から)



SK29 断面 (北東から)



SK29 作業風景 (北東から)



SX01 断面 (南東から)

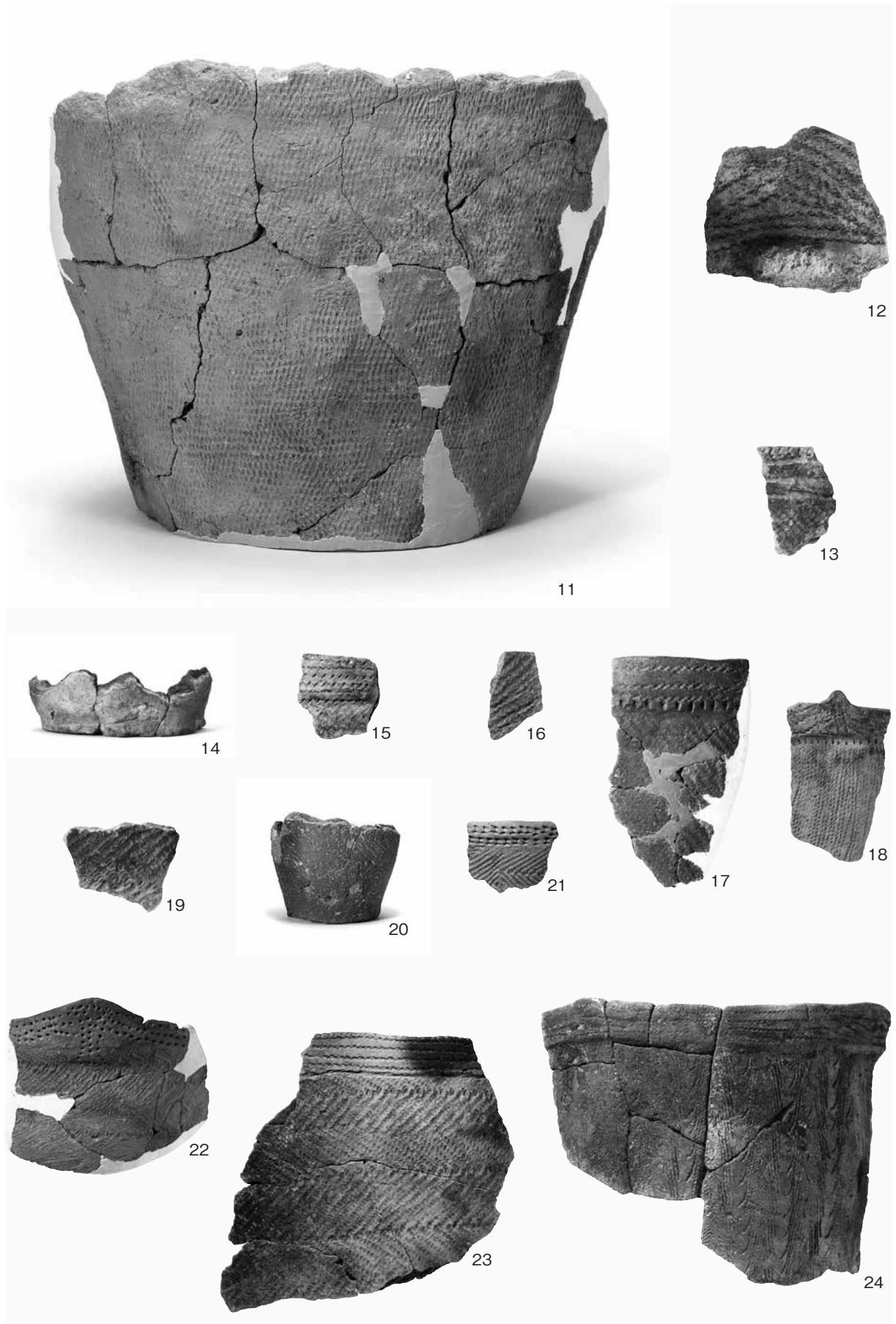


SX01 平面 (南東から)



SX01 断面 (南東から)

写真図版 20 SK27・29 陥し穴状遺構、SX01 性格不明遺構



写真図版 21 縄文土器 (1)



25



26



27



28



29



30



31



32

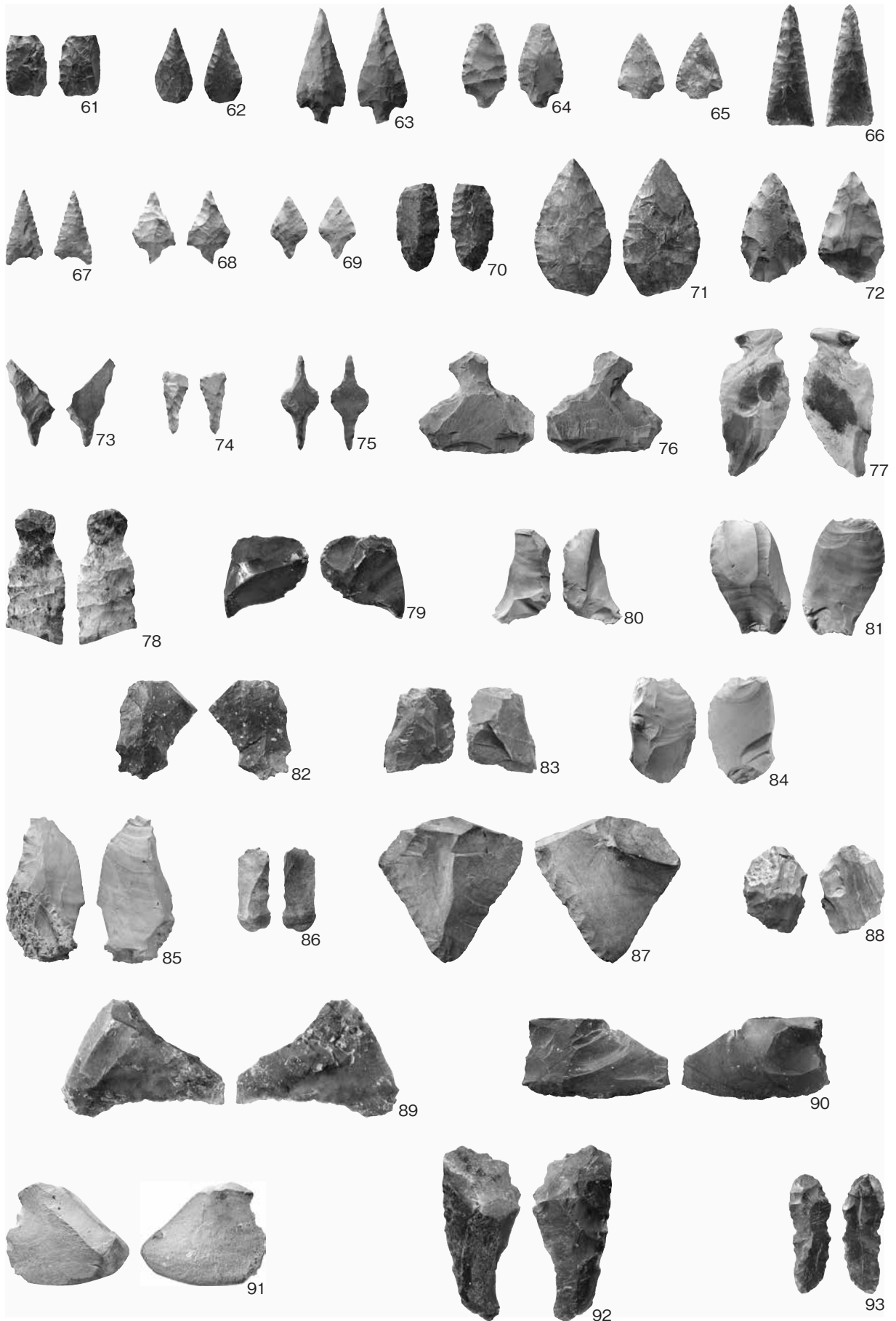
写真図版 22 縄文土器 (2)



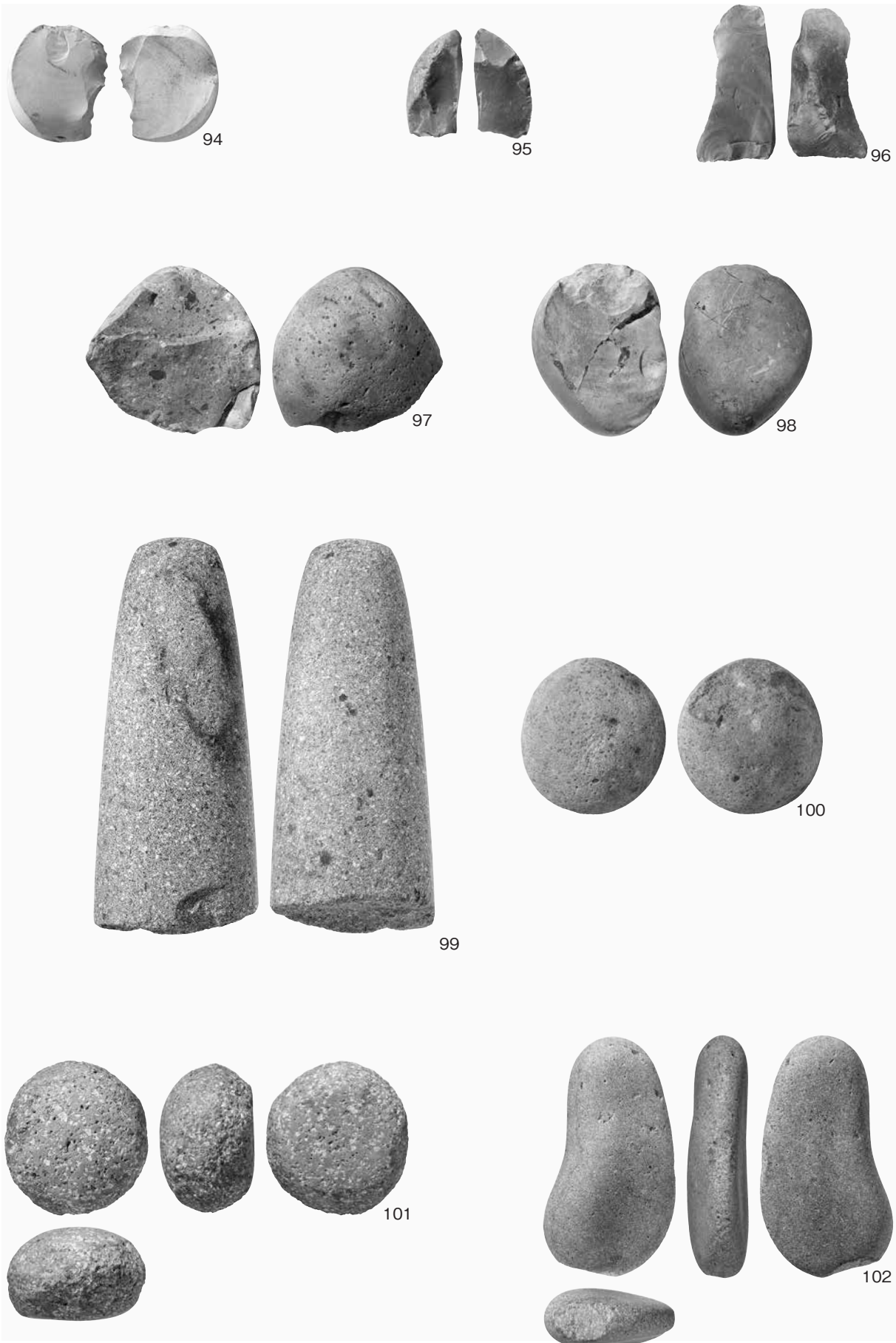
写真図版 23 縄文土器 (3)



写真図版 24 縄文土器（4）、弥生土器、土師器、須恵器



写真图版 25 石器 (1)



写真図版 26 石器 (2)



103

104



105



106

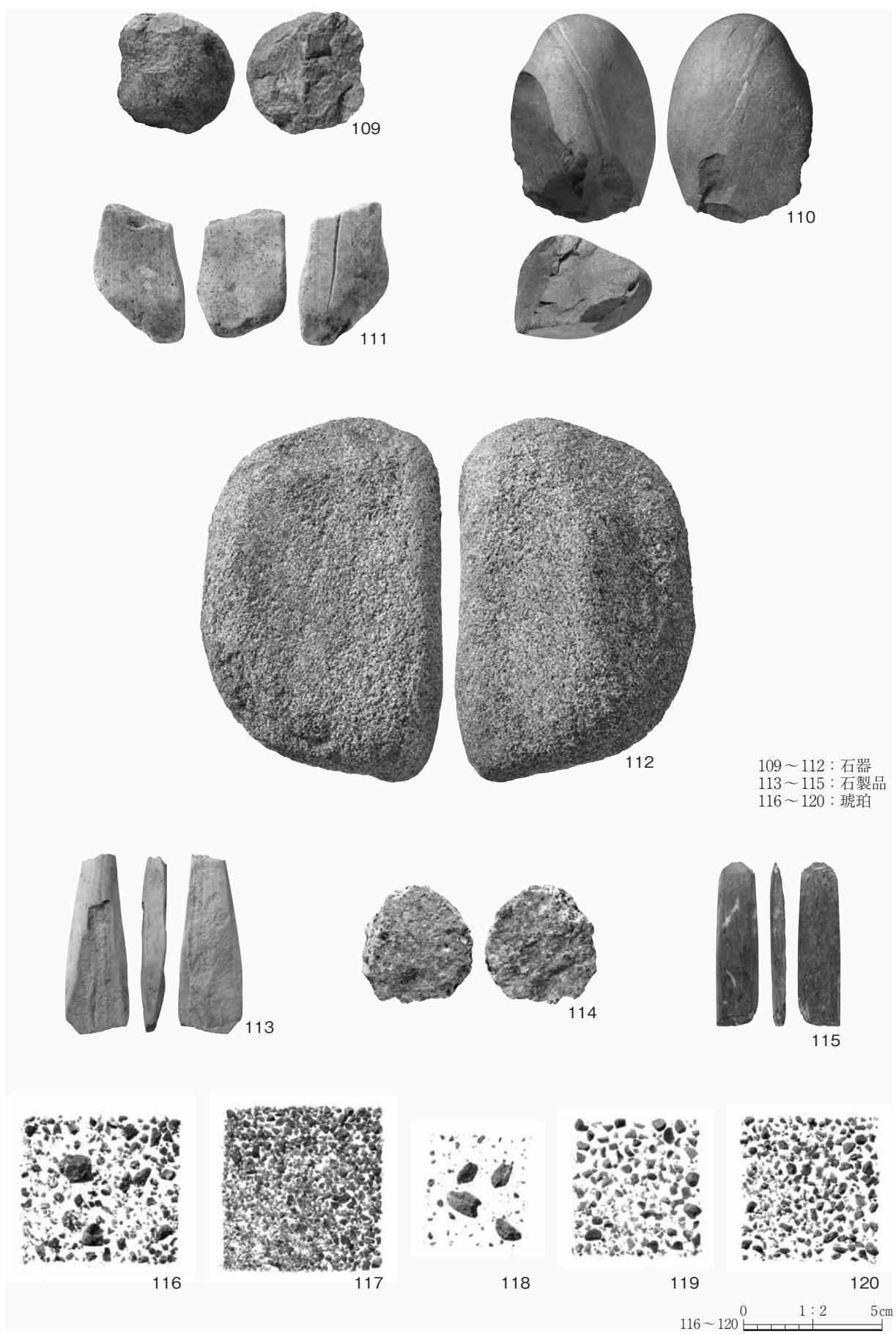


107



108

写真図版 27 石器 (3)



写真図版 28 石器（4）、石製品、琥珀

報告書抄録

ふりがな	ひらしみずいちいせき・ひらしみずにいせきはくつちょうさほうこくしよ							
書名	平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第739集							
編著者名	阿部勝則・野中裕貴							
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2023年3月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇〇〃	〇〇〃			
ひらしみずいちいせき 平清水Ⅰ遺跡	いわてけんくのへぐん 岩手県九戸郡 のだむらおおあぎの 野田村大字野 だだいちわりない 田第22地割内	35033	JG60-0241	40度 06分 07秒	141度 47分 47秒	2020.10.16 ～ 2020.11.26	469㎡	経営体育成基盤 整備事業（泉沢・ 中平地区）
						2021.04.06 ～ 2021.06.30	720㎡	
ひらしみずにいせき 平清水Ⅱ遺跡	いわてけんくのへぐん 岩手県九戸郡 のだむらおおあぎの 野田村大字野 だだいちわりない 田第22地割内	35033	JG60-0224	40度 06分 14秒	141度 47分 47秒	2020.10.16 ～ 2020.11.26	663㎡	経営体育成基盤 整備事業（泉沢・ 中平地区）
						2021.04.06 ～ 2021.06.30	2,229㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平清水Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代	なし		縄文土器 石器 琥珀		・十和田中振テフラ	
平清水Ⅱ遺跡	集落跡 狩り場	縄文時代	竪穴住居跡	2棟	縄文土器 土師器・須恵器 石器・石製品 琥珀	・フラスコ状土坑 ・円筒下層d1式土器 ・陥し穴状遺構に十和田 中振テフラ堆積		
			土坑	26基				
			陥し穴状遺構	5基				
		古代	竪穴住居跡	2棟				
		不明	土坑	2基				
要約	<p>平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡は、十府ヶ浦海岸に流れ込む明内川右岸の段丘に立地し、現在、段丘上を東西に走る2級村道中平上明内線を挟んで、南側を平清水Ⅰ遺跡、北側を平清水Ⅱ遺跡として分けられている。明内川左岸の低い段丘には、平清水Ⅲ遺跡が立地する。</p> <p>今回の調査で、平清水Ⅱ遺跡の範囲の北側に沿って南西から北東方向に延びる尾根を中心に集落が形成されていることがわかった。平清水Ⅱ遺跡は、平成13・14年度にも調査が行われ、縄文時代前期末葉から中期前葉を主体とする集落跡が確認されていた。今回確認された遺構も、連続する尾根上から南斜面に形成された一連の集落跡と推測される。</p> <p>縄文時代前期末葉から中期前葉の集落は、竪穴住居跡とフラスコ状土坑から構成される。フラスコ状土坑からは、前期末葉（円筒下層d1式土器）がまとまって出土したものもある。集落が形成される前後の時期には、より広い範囲に狩り場が設けられていた。前期前葉の陥し穴状遺構は円形や楕円形である。中期以降の陥し穴状遺構は溝状である。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第739集

平清水Ⅰ遺跡・平清水Ⅱ遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（泉沢・中平地区）関連遺跡発掘調査

印刷 令和5年3月1日

発行 令和5年3月10日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001

発行 岩手県県北広域振興局農政部農村整備室
〒028-8042 岩手県久慈市八日町1-1
電話 (0194)53-4988

(公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235

印刷 株式会社五六堂印刷
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通3-16-15
電話 (019)654-5610